
レジェンズ Legendz Behind of Chronos

ヒート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レジェンズ Legendz Behind of Chronos

【Nコード】

N5388J

【作者名】

ヒート

【あらすじ】

”あの戦い”から早25年…
街はとうの昔に平穏を取り戻していた。
そう…あの風が吹くまでは…

次世代のサーガ達とレジェンズを取り巻くファンタジーストーリー。

*この小説は二部構成の予定となっています。第二部は男性向け・

女性向けの内容が顕著です。（第一部はそのような表現は皆無です。）、獣同士、人間同士、人間と獣のカップリングが苦手な方は閲覧を遠慮していただきたいと思います。御了承下さい。

・免責事項

*なお、この作品で何らかの害を被っても作者に一切の責任はありません。御了承下さい。

Prologue

暗闇の中から鈍い声が響く。

「どうだ気分は？」

鈍い声に反応するように女の声が訝する。

「今更私をこの世界に戻して何よ…。肉体は既に取り込まれてしまつて此処には無いのよ…」

悲しみを帯びた高い声は暗闇に同調して震えていた。

「お前が本当に役に立つときがきたのだ…永きに渉る儂の野望が果たされるときがもう目の前にある…」

鈍く黒い声の主はその実体のないものがあるであろうカプセル状のモノに向かつて再び話しかける。

「大丈夫だ…アイツにも逢わせてやる。」

「…！！逢えるの！？あの子に…！」

カプセル状のモノから驚いた声があがる。

「くふふ…まあ、お前の働き次第だな。しかし、儂も竜王にお前

をやすやすと渡したのは迂闊だった。すこし気付くのが遅かったの
う…まさか、お前が『あの力』を目醒めさせる力を持っていたとは
な…。おまえは、既に気付いていたのだろう？ なんだっておまえは
…」

「お父さんのことは何も言わないで!!」

響いた声はすぐに静寂を取り戻し沈黙が続いた。闇は周りを包み、
此処の空気を一層張り詰めさせる。すると、鈍い声が沈黙を破る。

「まあいい…。魂だけでも力を増幅させることは十分に可能! そう
すれば…ふふふ。」

「やめて! あの力…あの力を使っではいけない!」

「うるさい!! 黙れ!! お前の事情など聞いておらん…!! 儂を恨
むなよ、お前がその胤として生まれた己の運命を呪うがいい!」

「…くっ!」

男の声があたりに響き、女の悔恨を含んだ声はそれに呑み込まれて
しまった。

…
…そう、あの時からもう始まってたんだ。この戦いは…

闇は深くなるばかりで何も答えてはくれなかった。

P r o l o g u e (後書き)

拙い文章ですが、これから頑張っていきたいのでよろしく願います(´・`・´)

E p i 風が吹く日の朝の空 〉 A d a y o f r e u n i t i n g

今日は何か違う…

きっとそれは不確かな確信ではないはず…

Ep・1 風が吹く日の朝の空 ー A day of reuniting

「はぁ… やつと終わったぁ」

???? 憂鬱な溜息を洩らすハルカ・ヘップバーン。

ガラス張りなのにも関わらず光が殆ど入らない部屋に処理し終えた書類を抱え佇んでいた。

部屋には、ペン立てなど変わりばえない物が置かれた社長の机と軽く自分の肩を越す大きな社長椅子、目立った物はそれぐらいしか置いていない。ハルカは自分の心の中にいるような気分になった。

???? ハルカは再び溜息を尽きながら社長がまだ来ていないのを余所に黒光る社長椅子に腰掛る。

彼女はふとカレンダー見た。今日は12月20日か…。ハルカは単身赴任でクリスマスには帰れないという夫の言葉を思い出した。今年には娘と一緒にスパークス家で催されるパーティにでるつもりであるが…

???? 彼女は、椅子から立ち上がり社長室の隣にある秘書室へと向かい、珈琲を一杯注ぐ。そして、湯気が立ち込めるそれを持ちながらバルコニーに出た。ここは空調が効き過ぎなので肌にとっても悪いし、気分が悪くなる。いくら50歳とて美の追究は欠かせられない。それだけではなく最近此处へ風にあたりにくると妙に落ち着くのだ。そう不思議と…。

???? 冷たい朝の風が頬を撫ぜる。ビルの影を落とした下界を眺めるとスクランブル交差点が陽炎を發して、通勤者に埋め尽くされている。近くの店ではクリスマスシーズンのためかフェアを行っている所が目立った。そして、真下付近では此处に出社してくる上司や後輩がビルへ吸い込まれるように入ってきていた。

?????こんなに人がいるのに微風や小鳥の鳴き声しか聞こえない……。

無機質。排他的。

いつもと変わらない風景。

ハルカは、そんなことを思いながら冷たい冬の風を浴びていた。

「ふう……（私もここに勤めて長いわね、25年経つかしら……）」

?????彼女は25年前に、父親の勧めでDWCに入社した。「DWC(dark wizard company)」は、世界的に有名な玩具会社である。世界中の玩具シェアは51%で玩具界を支配している。そして、彼女はその会社で持ち味の行動力や体力でこの地位まで上り詰めた。しかし、彼女にはいまでも果たせない願いがあった。

「（でも、何故かしら……やっぱり全く思い出せない、何かあったことは確かなんだけど……）」

実は、彼女には、自分自身の半生の記憶が殆ど無い。病院にも診てもらっているがなかなか原因に辿り着けないでいた。

「（だけど、その失くした記憶にあの人達がいる……）」

シュウくん…

メグさん…

マツくん…

ディーノくん……」

思い出せそうで思い出せない、記憶に眠る確かな存在感は彼女をもどかしく且つ苛立たせていた。空調が効きすぎた部屋から乾燥した空気が共存を求めるかの様に外に流れてくる。

????愛用のマグカップに注がれた珈琲に映る自分の顔をふと見た。何て寂しそうな顔なのだろうか…。

そして、それから逃れるように珈琲を飲み干す。独特の香りが鼻に抜けてきた。

「苦いわね……」

ハルカはマグカップの底を見ないよう直ぐに片付けバルコニーに戻った。

上を見上げるといつものニューヨークの空が広がっている。

「眩しい…」

?????まだ一日は始まったばかり…

太陽が見える筈のない西の空がハル力を確かに見つめていた。

「こらっ!!早くおきなさあ!!」

??甲高い声が家中に響く。

「ん…ん、あと5分…」

ベシンッ!!

「いつてえっ!!おいメグ、別に朝からやらなくてもいいだろう!」

?????激烈なチョップが見事に顔にヒットする。少し顔が腫れている。そんな顔でシュウはメグに怪訝そうに顔を向ける。

「喧しい!…さつさと、準備してリビングにきなさいよ、シュウ。私、ユウト起こしてくるから」

「はいはい」

「『はい』は1回!」

メグは湯気を漂わせるオタマを持ちながらシュウの部屋を後にした。

?????メグが去った後、シユウは手早く身支度を済ませる。白いワイシャツの上に紺のネクタイと上下灰色のスーツを着る。冷たい階段を駆け降り、洗面台で顔を洗い髪を整えた。こうして、シユウの一日は始まる。

シユウは鏡を見て、よしつと言いながらリビングへ向かった。すると、芳しい香りがしてくる。

「んっ！この匂いは…メグのトマトスープじゃねえかあ」

?????トーストの上に乗せたバターとトマトスープの香りが冷たい朝の空気を解し、食欲を掻き立てる。

「シユウ、先食べてて」

「あいよ」

?????シユウは食卓につくと、先ずトマトスープに手を出した。スプーンで零さぬように慎重に口に運ぶ。トマトの酸味が口に放漫に広がる。

?????次にトーストを手に取り思い切りかぶりつく。バターの芳ばしい香りとトーストから出る軽快な音が調和し、一日の活力を与えてくるようだ。

「あー、やっぱりメグの料理は最高だな！」

?????暫くして、2階から息子・ユウトが眠そうな目を擦りながら下りてきた。

「父さん、おはよ…」

「おはよう、ユウト、早く準備しなさいよ遅刻しちゃうわよ!」

「全く…ユウトは寝ぼすけだなあー」

「アンタが言うな!もうホント誰かさんに似たんだから…」

いつもと変わらない風景。

至って一般的な家庭であるマツタ二家。

そんな普通の日常が今此処にある。

と、眠気眼を擦りながら洗面台へ向かう我が子を見てふと思うシユウ。まただ…何だろうか、この違和感は何?普通じゃない日などあっただろうか?

考えてみたものの取り留めがつかないので結局、気にする事はないと軽く受け流し朝食を貪り続ける。

????数分後、身支度を整えた我が子が食卓につく。ユウトは淡い翠の長袖シャツ、下はこの前買い物にでかけたときに見つけたという特価品のポリエチレン製でクリーム色の長ズボンを着ていた。彼は、色とりどりの食卓をまるで珍しいモノをみるかのように眺めて、どれに手をつけようか迷っているようだった。

「ユウト!さつさと食べなさいよ…って二人とももうこんな時間!」

????メグの言葉に二人は時計をみると、7時50分を指していた。登校(通勤)時間は8時ジャストである。

「ち、遅刻!!!」

????二人は、急いで家を出発した。ユウトは名残惜しそうにテ

ーブルの上のものを見つめ、それからトーストを一枚啜って出て行った。

「父さん！行ってきます！」

「ユウトもいつてらっしゃい！」

二人はそれぞれ学校と会社へ向かった。ユウトはブルックリン101小学校に通っている。シュウはDWCの開発部の部長だ。

「ああー！シュウー、ユウトー、今日は同窓会があるんだから遅くなっちゃダメよー！！マツクの引越しも兼ねてるんだから！」

「わかったー！」

「わかってるよー！んじゃ、いつてきます！」

そついいながらシュウとユウトは寒空の広がるビル街とへ消えていった。

「ふふ、シュウってば変わらないわね…、さーて私も掃除しなくちゃ…きやつ！」

すると突然、いきなり螺旋を描くように風が吹き、落ち葉が庭に散乱する。メグは不思議と何か懐かしく感じ、昔のシュウを思い浮かべる。…何かが欠けている気がした。

「…風が強いわね、洗濯物干せるかしら…」

????メグは冷たい手をさすりながら、温もりを求めて家の中へ

戻っていった。

「うわっ、遅刻遅刻！」

????空飛ぶダッシュボードに乗り、急いで学校へ向かう。空を飛ぶというよりは浮いているといったほうが正しいかもしれない。

「ちよつとユウト！乗せて行きなさいよ！」

「マリ！ちよ、ちよ、バランス悪いって！」

朝日に映えた金髪を靡かせながら走ってきた女の子マリ。ユウトの幼馴染であり、親友である。そして…

「ユウト〜！待ってよ〜！」

「リュドじゃねーか！おはよ！…っってお前も乗るのかよ？あ、でもバランス取れた」

ユウトやマリに比べ、容姿端麗なリュド。緋色の髪が特徴的だ。同じく、ユウトの幼馴染で、親友だ。

「ていうか、なんでトーストなんて啜えてんのよ、あんたのマイブーム？」

「しらねえよ！自然とこうなったんだよ！」

「まあ、どうでもいいけど。とりあえず慌てず急ぎなさい！」

急かすマリ。そんな矛盾してることできるはずないと思ったが、叱責されるのは気がひけたのでその言葉に従った。ただへさえ安全運転が大変なのに、ここであのチョップを喰らったら大変なことになる。

????そして全力疾走し続けたおかげで、彼らはなんとか学校に着いた。ユウトはマリとのトーストのやりとりと同時進行だったためか息絶え絶えである。教室の窓から室内を遠目で見てみると、まだ生徒達は好き放題遊んでいるのが見えた。

「間に合った……じゃあ、教室はいるか」

汗に塗れた体を冷たい風が撫で下ろす。ユウト達は少し身震いして教室へと入っていった。

????ユウトのクラスは縦6列、横5列、35人前後の至って普通のクラス。

その教室の戸を抜けると同時に、担任教師が入ってきた。いつも通りの畏まったスーツ姿である。いつもの様に出席をとり始めるかと思いきや、今日は重要な報告あると言い、生真面目な顔をさらに強張らせた。

「えー、今日は転校生を紹介します」

教室が一瞬ざわめいたが、担任は直ぐにそれを糾し、静寂を取り戻す。

「では、入ってください。マクフィールド君。」

???? 一人の男の子が緊張した面持ちで教室に入ってきた。季節の割には薄めの白いシャツの上にハンドメイド感バグンの茶色の上着を羽織った太めな体型…ってマクフィールドってどこかで聞いたような…？

「トーマス」マクフィールドと言います。よ、よろしく願いしますなんだな…」

照れくさそうに自己紹介をする転校生。しかし、ユウトは名前よりその台詞の最後の部分に驚いていた。ユウトはそれによりあやふやだった考えが確信にへと変わった。

「では、マクフィールド君。ヘップバーンさんの隣に座ってくださいね。あの金髪で一番後ろの席の…では、教科の先生が来るまで静かに待っていて下さい」

教師が皺の多い指で後ろの方向を指して指示を出した後、直ぐに廊下へと出ていった。一方、トーマスは巨体を揺らしてこちらに向かってくる。

「よろしくなんだな」

ユウトは気になっていたことを訊こうとして身を乗り出したが、マリがいち早くトーマスに訊きにかかった。

「ねえ…」

「…？」

トミーは首を傾げる。

「あなたもしかして…マイク・マクフィールドさんの息子だったりする？」

すると、トミーは凶星だったせい少し目を見開いた。驚きと疑問が混じり合った表情をしている。

「ど、ど、どうしてそれを…！まさか君たちがユウト、メアリー、リュド？！」

「そうよ！じゃあ、改めて紹介させてもらっわ！私は、メアリー・ヘップバーン、まだまだ幼けな11歳の女の子、マリって呼んでね。よろしく！」

「俺はユウト・マツタニっていうんだ。マックおじさんの息子か…ホントそっくりだな。これから仲良くやってこっぜ！」

「僕はリュド・スパークス。これからよろしくね。」

「よろしくなんだな？」

「……………お互いはやくも打ち解けあい、不安に満ちていた顔が綻ぶトーマス。すると、シウがトーマスに尋ねる。

「トーマス…だっけ？じゃあ、これからトミーって呼ぶよ。でさ、もしかしてトミーも同窓会にくるのか？」

「いくつもりなんだな。前は遠いところに住んでいたからお父さん

しか行けなかったけど…。」

と、トミーがユウト言った。

すると、横でマリが溜息をついて不満げに呟く。

「あー、私も行きたかったなあ。今日はママが遅いから家で待ってないといけないのよね。一人過ごす夜は淋しいのよ…」

「大丈夫だよ。どうせ僕の家でクリスマスパーティーやるんだし…みんなには遅かれ早かれ会えるよ」

出た、リュドの正論攻めとユウトは横目で見て思った。それを聞いたマリが反論する。

「まったく…リュドは分かっているんだから。バーよ？子どもは入れないの、わかる？入れる機会を逃すことが悔しいわ…。だって今のご時世にあんなアンティークなところないわよ。最近は一気取ったカフェばかり…なんていうか魅力を感じないのよ、わからないかな。」

「そ、そうだね…。まあ、ぼくはそれよりみんなに会えないことの方を…」

リュドとマリの口論はクラス名物。誰かが止めない限り永遠に続く…。

「トミー、ごめんな、これ日常茶飯事だからさあ…」

「愉しいからいいんだな。」

噂に聞く寛容さは本当のようだ…。ユウトは感心の溜息を吐いてとりあえず目の前の争いを止めに入る。

「あゝ、そこのお二人さん…そろそろいい加減にしないか？」

「ユウト、ちょっと聞いてよ！リユドったら白靴下がおシャレとかいつてるのよ」

「白はおシャレとかいう問題じゃなくて紳士的だろ？僕は黄色の靴下をおシャレとかいうマリアに同情するよ…」

おい…何故そうなった。二人の会話力は底しれないことをユウトはひしひしと感じた。

「はいはい、とりあえず転校生の前なんだから落ち着け」

????すると、タイミング良く教師が教室に入ってきた。ナイスティーチャー！

リユドやマリアは渋々席に着く。トミーも続けてマリアの隣に座った。次は社会か…まあいつものように昼寝するか。

ユウトは席に着き教科書を机に出したのと同時に、先生が入ってきた。手際良く出欠を採り、直ぐに授業を始め、つらつらと無機質に話し始める。

そして、催眠効果抜群の声はユウトを眠りに誘う。暗転。

…

…

…… 40分後

「…そしてこの人は王になった。おっともうこんな時間だな！
ん…まだ時間少し余ってるから、面白い話しようか…みんなレジエ
ンズっていう伝説の生き物を知ってるかい？」

ん…まだ授業終わってないのか。

ユウトは既に終了のチャイムが鳴る直前に目が覚めるといふ体系が
身についてしまった。しかし、今回は珍しく早めに目覚めた。そ
れに気付いたのがマリがユウトに話しかける。

「あら、ユウト今日は早いわね。そうそういま先生が喋ってる話面
白そうよ！」

マリがテンションを上げて満面の笑みを浮かべユウトに言った。

「ん…ああ…。レジエンスなんたらってやつ？まあ、どうでもいい
けど…」

教師は話を進める。

「先生、それに関する資料持ってきたからな、読んでみるぞ。まず、
このウィンドドラゴンっていう生き物から…」

【ウィンドドラゴン】

属性：トルネード

クラス：プライドクラス

体長：2・1m（全長2・8m）

かつて世界を統べた6竜王の1つ、トルネードキングドラゴンの直系。

プライドクラス最強の位置におり、成長につれて力を発現していく。「ギナーヤの書」によると、先史時代、火属性のブレイズドラゴン族とは不仲で度々衝突し、他族を巻き込む戦争を頻繁に起こしていたという。

かと言って、ウィンドラゴンは好戦的ではない。なので、特有の好奇心が災いしたものが多いと言えるだろう。逆に、ブレイ……」

「……余談に華を咲かせているがユウトの耳にはたいして入らなかった。興味のないものを憶えることほど苦痛なことはない……。他のクラスメイトは話に興味津津のようだ。マリに至っては一言一句聞き逃さずにも携帯しているメモ帳へ書き留めている。」

「……そして、終令のチャイムが鳴った。教師も話に夢中だったようで、チャイムに驚いている。教師は、急いで号令をかけて資料と教本を抱え教室を足早に出ていった。すると、マリが目を輝かせながらユウトほうへ向かってきた。」

「ユウト……！ レジェンズってすごいいい！ 私もう興奮しまくり！
！今までにないロマンを感じたわ！ あゝ、もうヤバイ！」

いきなりマリが胸ぐらを掴んできた！ 呼吸困難に陥りそうになるユウト。

「く……苦しい……」

もがくユウトをよそにマリは力を一層増してくる。待て！ これ冗談じゃない！

「マリ！落ち着いて！」

「どうどうなんだな！」

「…………リウドとトミーがマリを諫める。マリは悶絶しているユウトに気付き、手を離す。ユウトは失神寸前だったようで息が荒くなっている。手を地面について伏す体勢になる程だ。」

「ぜえ…ぜえ…死ぬかと思った…」

「ユウト大丈夫？男なんだからしっかりしなさいよね。」

マリの辛辣な扱いに腹が立ったが、これはさっきも言ったように茶飯事だ。ユウトは反応する気もなかったので、無視を決め込むことにして体勢を整える。

「…………ふと、教室の窓をみると同時に風が入り込んできた。」

教室の空調に慣れたせいかわ冬の風も心地良く思える。

そんな仄かな風だが、教室がさんざめく中でも、それは確かに此処に居ることがわかった。

「…………今日は午前授業だ、まだ帰れない…。」

「…………目覚めかけた朝の光は風と共に訪れ、まだ知らない未来を抱く無垢な子供達を包んでいた。」

E p i 風が吹く日の朝の空 〉 A d a y o f r e u n i t i n g

視点が安定していない；

そこは慣れていくしかないか…

Ep. 2 あの日が街に吹いてきた〜Returning in the w

あの日のお会いもこんな風に空は広がっていた。
お前の白い翼のように...

??

？ 放課後、授業が終わり次々と小さな足並みを揃えて帰っていく生徒達。この後遊ぶ約束をする者やそのまま家路へ向かう者と様々だ。

「じゃあな！」

「また明日ね！」

「また後でなんだな」

ユウトたちは学校の入口の前で別れ、それぞれの帰路に立った。ユウトは、ふと、トミーの住む場所を聞くのを忘れていたことに気付く。しかし、どうせまた会っのだから焦ることはないと自分もすぐに帰ることにした。

?? 一方、シュウたちはその我が子の帰りを待っていた。

「なあ、メグ、そろそろユウト帰ってくるかな？」

シュウは退屈そうに低反発の空色のソファーに足を組んで座っていた。シュウはどちらかというと、待つ方ではなく待たせる側なので、こういう時の時間の使い方がわからない。メグが皿を洗いながらシュウの素朴な疑問に応える。

「うん、今日は午前授業よ。確か個人面談の準備とか冬休み前とかで午前授業が続いたはずよ。」

シウは、そうかと軽く返事をしてテーブルに置いてあった珈琲を一杯だけ飲む。昔はよく学校終わったらメグたちと遊びに行ったなあ、と昔のことに耽っていた…。

……。

(…ガガッ！)

！！

なんだ…今、頭に過ぎった声は？まず声なのか？…音っぽいけど。それにしても、またあの違和感…最近頻度が増してきている。このところはホントに酷い。時間あったら病院いくか…。

？？　？　シウが思い悩んでると、ドアから音がした。

「ただいまー、父さん、母さん」

「おかえりー」

「お帰り、ユウト。さあ、シウ、さっさと準備しなさい。ユウトも」

シウとユウトは簡単に準備を済ませ、ジャンパーを着て外出に備

える。

「よし、じゃあ車に乗るか。ユウト、忘れ物ないか？」

「ないよ」

「メグも乗ったし出発だな！」

シュウは車のエンジンを入れ同窓会を行う場所へ向かう。同窓会と
いっても、シュウたちの仲が良かったメンバーたちで飲み会をする
というものだ。元リキリキリッキーズのチームメイトや、もちろん
あの2人も来る予定だ。頻度は年1〜2回程度。

集合場所は『ワニの穴』というバーで一日貸し切り状態である。ユ
ウトは子供だが昔の誼の息子、それに特別な日ということでお構い
なし！嬉しい限りだ。

?? ? 暫くして『ワニの穴』に着いた。此処は路地裏にある為
に目立たない。

それもこのバーの特徴である。シュウ達は入口に手を掛ける。

カラコロンッ

「いらっしやい…」

落ち着いた声が出迎えてきた。

「どうも、エドさん 御無沙汰してます」

「シュウくん…此処ではマスターと呼んでくれないかな…」

ラと揺れ、酌まれたばかりのスイート＝ダンディがカウンターに光を落とす。

「マスター、久しぶり！元気にしてた？」

ユウトはハキハキと声をかけ、シュウとメグの間の席に座る。

「お久しぶりです、ユウトくん…もちろん元気ですよ」

「ホント？？マスター、ガリガリだからそう見えないんだよね」

ユウト少しからかい気味に言った。

「よく言われますよ…別に何も心配しなくて結構です。私はこう見えて体調管理はしっかりしていると自負していますからね」

珍しく自慢気にするマスター。すると、彼はユウトにレモンを添えたコーラを出した。ユウトはそうか、そうかとも言うかのように頷きながらコーラを喉に通す。

「こらっ！ユウト、そんなこと言っちゃダメでしょ、すみませんマスター…」

「ぶふっ！ぐっ！？」

メグはユウトの頭を押さえ込み強引に頭を下げさせた。しかし、ユウトはコーラを飲んでいたため吹き出してしまいそうになっている。

「いえいえ、子供は元気が何よりです？それより、連れの方はまだですか？」

「あーそつだな、そろそろ来ると思っけど…」

シュウは自分の腕時計をみて、流れるように自分達が入ってきた扉を眺める。すると、

カラコロンッ

「よお！シュウもういたのか！久しぶりだな！」

「いらっしやいませ…リキリキリッキーズOB御一行様」

久しい声だ。OBとは言っているが、プライベートで集まって野球はまだ続けているらしい。たまに社会人野球として試合にも出場しているとのこと。シュウは幾分か前に見た雑誌にそのニュースが載っていたことを思い出した。

「マスターも久しぶり、元気にしてたか？」

マスターはいと答え、シュウと同じようにスウィート「ダンディを酌む。シュウやメグも何事も無く元気そうな姿を見て安心したようだ。

リキリキリッキーズメンバーはシュウの頭を掻き回し、戯れ合う。メグは横で何かを懐かしむように彼等を見つめいた。すると、頭を弄られるシュウがリッキーズに訊いた。

「そんな頭クシャクシャすんなって！…そういえばさマックとキザ夫の奴まだか？」

「マック？それならさっき…」

？メンバーの一人言いかけようとしたその時、

カラコロンッ！

「あつ、きたきた！」

息を荒げながら戸を開けたのはあのマツク…とそれによく似たもう一人の子供。

「お、遅れて…ハア…ごめん… フウ…なんだな…」

「遅れてすみませんなんだな…ふう…」

昔と変わらず太めな体型で瞑らな瞳。そしてそれに優しさを持たせながら此方を申し訳そうに見てきた。

「シュウ、メグ、ユウト君久しぶりなんだな♪ あとみんなも♪」

相変わらずの穏やかな口調で喋るマツク。シュウはどことなく安堵感を覚えた。思わずマツクに抱き付く。

「よお！マツク！会いたかったぜえ〜」

「マツク、久しぶりね！元気してた？」

「僕は元気なんだな♪ でもシュウ達が元気そうで僕は嬉しいんだな」

マツクは深々と頭を下げた。流石にそんなことされては許さない訳がないのだが、抑シュウ達にそういう考えがないのは当然のこと。

「別にいいって！俺たち友達じゃねえか」

「シュウ、ありがとうなんだな」

「で、その子は？まさか・・・」

「僕の息子のトーマスなんだな」

「よろしく願います」

マクフィールド親子が礼をする。ホントに性格まで似てるな。すると、ユウトがしゃしゃりでてきた。

「よお、トミー。あれ？リュドはまだなのか？」

シュウはユウトの言葉でスパークス家が来てないことに気付く。いつもディーノは人一倍この集会を楽しみにしてるのだが。

「ああ、リュドなら今日は来れないんだな」

トミーが冷静に言った。ジャズは穏やかに流れる。

ユウトは少し驚いた。行かないのなら、何故あの時にいかなかったのか気になったからだ。トミーは淡々と話し続ける。

「いきなりリュドのお父さんの仕事の電話が掛かってきたらしくて・・・しかも結構重要らしいなんだな」

ユウトは納得したようで首を立てに振った。シュウは今回はヤケに欠席多いなと思議に思った。彼は個人的にはマックに会えれば良かったと思っている。しかし、近くに引越してきたらいいのでこれ

から何時でも会えるのは嬉しい限りだ。
昔に戻った気分になる。

シウウはスウィート「ダンディを飲み感傷に浸る。

「そっか、リウドの家は行こうと思えば行けるし…。そうそう、マツクおじさんはいいの？ 今日会えなくて」

「今度別で会うんだな」

ふうん、それなら大丈夫かとユウトは何となく納得してみる素振りを見せた。

「流石だぜ、マツク！ なあなあ、今度俺の家に遊びに来いよ、トミ！ も連れてさ。」

「もちろんいくんだな」

何が流石なのかユウトは理解できなかったものの、少なくともマツクは理解していたようだ。このような意思疎通が図れるのはこの人だけだろう。

ユウトはその光景に感服したせいか、その理由が気になり出した。

ユウトは惟みた結果、思い切って訊くことにした。

「ねえねえ、唐突で悪いけどマツクおじさんはどうして父さんや母さんとそんな仲がいいの？」

「うーん…そうなんだな…」

マツクとトミは椅子に座り、スウィート「ダンディとハンバーガ

ー（ケチャップ大盛）を頼んだ。この店は頼めばなんでも出てくるらしい。マックはハンバーガーを頼張りながらユウトの質問に答える。

「僕とシユウ達は昔から一緒に居たからなのかもしれないんだな」

マックが電灯を見上げながら意味深に呟く。

「昔って？」

「生まれた時からなんだな」

マックは満面の笑みを浮かべてシユウの方へ振り向く。シユウはそれに応えるかのように微笑んだが、それは少しの悲しみを含んでいるように見えた。シユウが続いて言う。

「昔ねえ…そういえば…」

シユウが重苦しそうに話を切り出した。ユウトはいつもと違う父に気付く。

「思い出したか？」

「まだ…なんだな」

「私も…」

途端に張り詰める空気。ユウトは、父のこのような顔を見たことが無いようで啞然としていた。いつもの笑った口は小さく萎み、やっと呼吸ができそうな程になってしまっていた。シユウは淡々と続け

る。

「そっかぁ…まだか。すごい近くにいる気がするんだけどな」

「なんで忘れたということをおぼえているんだろ？不思議なんだな…」

「思い出せないのが淋しい…でも思い出すのは怖いよね…」

ジャズが無常に流れ続ける。向こうではリッキーズが仲間同士で過去話に華を咲かせており、愉しそうな笑い声が聞こえていた。シユウは何かを決心したのか眼の色が変わった。そして、ある提案をする。

「あそこいつてみねえ？」

「あそこって何よ？」

メグは突然の問いかけに困惑する。

「あそこ…懐かしいんだな」

「だからあそこって…あ！もしかして…」

マツクの理解力に驚いたメグだが、すぐ自分も同じ様になった。シユウは続ける。

「ああ、あそこだ」

寂しい笑顔を浮かべる三人。それを見つめるユウトは何のことか理

解できる訳もないので父に訊ねる。

「父さん、あそこって？」

疑問する我が子を見つめる父シユウはユウトにも自分が居た場所を教えるのには良い機会だと思った。

「そういえば、ユウトは知らないな…。よし、行ってみるか！」

「賛成なんだな」

シユウは皆の賛同を得たあと、申し訳なさそうにエドを見て言う。

「じゃあ、マスター俺たち先行くわ…お代ここに置いとくから。あ
と他のみんなにもいって…ほら、もうあんなんだし」

シユウが指を向けた先にはすっかり宴会モードONとなったリッキ
ーズがいた。ウイスキーを原液のまま飲み干している…

「ふふつ、またいらしてくださいね…」

そういつて既に泥酔しているリッキーズとマスター一瞥し、バーを
後にした。

?? ? 外に出ると、もう日が沈みかけていた。バーの中にいる
と時間の経過が鈍くなるようだ。腕時計を見ると、午後4時半頃。
こんな時間だというのに西日がかかっているのをみて冬がまだ続く
ことを感じられずにはいらなかった。黄昏の空が人々を茜色に染
める。

「さあ、みんな車に乗って！」

シユウは皆を自分の車に案内して乗り込ませた。彼の車は所謂ハイブリッドカーというもの。法律が改正され、今では燃料が電気か水素などの環境に良いものしか使えない。ハイブリッドカーはリスクが比較的軽度で済むのでアイドリングを禁止することで使用が許可されている。シユウの車はエメラルドグリーンのメツキで西日が反射し、それは少しの橙を纏わして輝いていた。そんな車を見ながらマツクは目を輝かせながら眺めていた。

「シユウの車とてもカッコいいんだな♪」

「照れるからよせよ♪」

「そこ調子乗らない！」

3人は昔のようなやり取りを見せた。それを見たユウトとトミーは感嘆の溜息を洩らす。

「流石父さん……」

「なんだな」

5人は車に乗り込みあの場所へ向かった。懐かしい風が吹いていた場所へ……。

?? ? 10分後、ビルの間道を通り目的地へ到着。4人はシユウを先頭に中へ入って行く。

かび臭く、埃っぽい。

シユウ達はある頃からの時間の経過を感じていた。

「ぎえー、埃っぽい」

「そりゃ、そうでしょ。25年くらい来てないんだから。というか、25年も取り壊さなかったのが不思議よ。」

「懐かしいんだな」

感慨に耽る3人。

ユウトたちは初めてみるものばかりのようで目を爛々と輝かせていた。

「父さん、これってテーブル？木で作られてるみたいだけど…」

「ああ、昔はこういうテーブルが多かったんだぜ。いまはガラスや貴金属でできてるのが多いけどな」

「ふうん、で、これはなに？」

「それは…」

懇切丁寧に説明するシユウ。メグたちも周りを見渡して懐かしんでいた。すると、メグがあるものを見つける。

「わぁー、これ懐かしい、見てよマック」

「ホントなんだな！みんな小ちゃくてカワイイんだな」

メグとマックが見ているのは昔撮った写真だ。色褪せてしまってい

たが自分たちの記憶にはそれがなかった。

「メグ、マツク、なに見てんだ？」

シウトとユウト達がメグたちのところへ寄ってくる。ユウトはまじまじとネガで撮られた写真を覗き込む。

「え、これ父さんたち！？トミー、お前おじさんにクリソツだな」

「親子なんだから当たり前なんだな。ユウトもユウトにお父さんにそっくりなんだな。というか、クリソツって…」

ユウトの古めかしいボキャブラリーに軽く引いたが、沢山の写真からは愉しそうな笑みがこぼれている。すると、トミーがある事に気付く。

「あれ？この写真…ちょっと遠目に写ってるんだな」

その写真には当時のシウトやメグ、マツク、ディーノそして大人が4人程写っている。しかし、人を写すにはピントが遠すぎる。まるで、後ろそこに何かがいたかのように…

「あれ？ホントだな、なあメグ、俺らなんでこんな…」

ヒュウウウ…。小窓から風吹いてくる…。

（なあ…？風のサーガ…）

！！！

「ぐあつ…！」

シュウがいきなり頭を抑えてしゃがみ込む。シュウの頭には今まで感じたものより遙かに強大な違和感が襲い掛かってくる！

「父さん！？」

「シュウ！どうしたの！？」

「大変なんだな…！」

シュウの首筋からは大量に汗が吹き出ており、息遣いも荒くなる。メグたちは、シュウの突然の異変に焦りを隠しきれない。写真が床に散乱する。

すると、声を嚔らしながらシュウが喋り出した。

「…だ…っげほ！」

「え？ シュウなんて言ったの？」

「ここだ… ゲホツガハツ…」

シュウが苦しそうに何かを伝えようとしている。ユウトに至っては今にも泣き出しそうだ。

すると、シュウは蹣跚けながら立ち上がる。そして、何かに操られているかのように肩を揺らしながらすぐ上にあつた小窓から身を乗り出す。

「シュウ！ 危ないんだな！」

「きゃあああああ！！」

「父さん！」

ユウトが小窓へ駆け上っていく。

窓から顔を出すと風が顔にぶつかり目を閉じてしまった。風が少し収まったのを確認して目を開けてを見渡すと時計の長針の上を覚束ない足取りで立っている。どうやら時計塔の上に行きたいようだ。

「父さん… 俺も行く！」

ユウトは小窓に足をかけ、長針へと飛び移る。眼下に広がるのはコンクリートだけ。落ちたらひとたまりもない…

「ユウトくん、危ないんだな！ 早く戻るんだな！」

「ユウト！ お願いやめて！」

小窓からメグは涙ぐんだ目でユウトに訴える。すると、上から声が聞こえてきた。

「ユウト…！早く俺の手に…」

シュウが震えながら手を伸ばしてきた。ユウトはシュウの手を掴もうとした。その時…

ゴオオオオオオオオ！

尋常ではない風が突然吹いてきた。それは此処だけではなくニユーヨーク…いや、世界中かもしれない。草木が騒めき、街が揺れている。

すると、ユウトはバランスを崩し、足を滑らせてしまった。

「え」

「父さん…！！」

ユウトがどんどん小さくなっていく。下に待ち受けるのは無慈悲な岩の床。最悪の事態がシュウの頭に過る。

「ユウトオオオオオ！！」

「いやあああああ！！」

「そんな…！」

「ユウト！」

もうダメなのか…！

シュウ達の叫びが虚空に響く。

その瞬間、吹き続けていた風が螺旋を描いて竜巻を創りだした。それはユウトを包み込み、空へと舞いあげる。右手にさっきまでなか

ったもの携えて。

ユウトはシュウの両手へと舞い降りた。そして、シュウが呟く。

「…思い出した」

螺旋はどんどんと大きくなり実体を持つようになっていく。

「思い出したんだな…」

「私も…」

渦巻くそれは竜のような姿を露にしてくる。鋭い爪、白く剛健な脚。

「父さん…これって…？」

「何が起きたんだな…？」

脹やかな腹。蒼を帯びた尾。筋肉質な腕。長い頸。そして…

全てが実体化したかと思うと、もう一陣吹き、白い翼を空を斬るように広げる。すると風から現れたものが金髪を靡かせ、言葉を発する。

「ふう…やっぱここはいい風が吹くじゃねえか」

やっとわかった。全て。

懐かしい風、求めていた風がいま目の前にいる。

「なあ…？？前の？風のサーガ…」

聞き覚えのある声。そう、間違いない。

シュウは目に透明な雫を溜めて叫ぶ。

「シロン…！」

空より遠く、想いは永く…。

止まっていた時が再び刻み始めた。

Ep. 2 あの風が街に吹いてきた〜Returning in the w

シロンさんktt!!!!

最終回じゃないです。まだまだ続きます！

Ep.3 夜嘶するものよつといで！ 〈They are talking

俺たちの再会って喜んでいいんだよね…？

「…おっ！」

「どうした、風の竜王」

「ツツチ、面白いコト起きたみたいだぜ」

「？？？ここは六竜王の間。」

「？？ここは入り口が2つあり、部屋はドーム1個分の広さの間だ。そこには、様々な色へと変化し続ける六芒星とそれを囲むように書かれた意味深なルーン文字がある魔法陣が描かれていた。そして、六芒星の頂点のそれぞれに竜が居座っている。」

「その下品な呼び方をやめろというのがわからんのか！我らは六竜王なのだぞ。私は土の竜王だ、そのつまらぬ呼び方をされていては我が僕に示しがつかぬ…！」

「だってよ、俺ら竜王同士なんだからそんなよそよそしい呼び方は、なんか嫌じゃねえか。特に俺らは他のレジエンズと違って、種族としての名前しか持っていないんだからさ」

「我ら竜王は馴れ合うために此処にいるのではない。貴様は本当に竜王としての自覚が…」

「あゝ、説教は結構。あんた語り始めると1年は経ってるからねえ」

このフランクな口調なのは六竜王の一人、トルネードキングドラゴン。もう一人は、堅い口調で紅一点のアースクエイクキングドラゴンだ。二人の口論は日常茶飯事なので、他の竜王たちも暖かく見守

ることしかできない。

「二人とも相変わらずだね、僕はやっぱり二人は仲いいと思うけどなあ。」

「そうだな、毎日一緒にこんな下らない争いをやりあってるんだからな。」

二人の口喧嘩を傍観しているのはストームキングドラゴンとヴォルケーノキングドラゴン。

一人称が『僕』となっているのが前者で、残りが後者だ。

「水の竜王、火の竜王！お主らも呑気に眺めてるんじゃない。これはお前達も……」

すると、暗い入り口から新たな竜の姿が現れた。

「また其方たち喧嘩ソナタしていたのか……」
「いま帰った……」

「光の竜王！闇の竜王！」

「おかえり。」

「よお、ピカリンとネクラさん」

「今までどこ行ってたんだ？」

「少し地球の様子を見てきたところだ」
「特に異常はなかった」

入り口の闇から現れたのはスピリチュアルキングドラゴンとネクロムキングドラゴン。二人は四属性の上に立つ光と闇の竜王だ。光の竜王は白く細身の馬のような体型で、かといって足腰はそれのよう

に強剛ではなく、寧ろ手弱女でスラッとしている。周りには眩く玉石を着飾っていて、神々しく輝いている。闇の竜王は光の竜王とは逆に逞しく、筋肉隆々、黒みを帯びた紫の軀が闇らしさを際立たせている、それと、縫われた両目と眉間にある目が更に不気味さを醸していた。

そして、光の竜王は風の竜王の呼び方につっかかることもなく質問する。

「そんなことより、風の竜王よ、お前は何かを感じたのか？」
「ああ」

風の竜王は眼の色を鎮ませて一呼吸おくと、ゆっくりと口を広げた。

「先程、レジエンスウォーを終えたウィンドドラゴンが再び地球に甦った。」

「何！！それは本当か、風の竜王！？」

「俺が嘘なんてついてどうするよ、土の竜王さん？」

土の竜王をからかい気味に敬称で呼ぶ。
すると、光の竜王が重い口を開く。

「ふむ、其方の直感したことが真実まことならば、その現象はおかしいと考えるのが尤もだろう。闇の竜王よ。前回のレジエンスウォーから何年たっているか判るか？」

「ん？…ああ、25年程だ。」

「うーん、早いね…」

「確かに。俺たちも余り休息なんて摂れていないからな」

「しかし、これは『転送準備期間』を大きく下回っているぞ…最低でも50年は必要だ。」

皆がそれぞれの推察を挙げていくものの、まだ情報不足のための的を射た答が出ることはなかった。

「…とりあえず、今は答を決めるのは早いだろう。暫く様子を見ることにしよう。」

光の竜王の提案にみんなコクリと肯く。なんやかんやで、いざという時は竜王としての立場を皆ちゃんと弁えている。????暫くの沈黙が続いた後、水の竜王が呟く。

「そういえばさあ…」

「どうした、水の竜王」

水の竜王の言葉に反応する火の竜王。実は、この二人は相反する属性だがとても仲が良い。水の竜王曰く、”自分が女だったら恋愛的な意味で好きになっていた”という程だ。

「もう、あの人を封印して永いよね…」

「…ああ、あいつか。いきなりどうしたんだ？そんなこと。」

火の竜王が水の竜王の突然の発言に疑問する。いつも明るく振舞っている水の竜王がこういう不安げな顔をするのは珍しい。

「いや、今更だけど罪悪感が湧いてきてさ…」

水の竜王は不安を隠すように微笑したが、すぐに元に戻ってしまった。

「…どうしたんだ？」

「嫌な…予感がする。」

不安が周りの闇をさらに着色してくる。

「…………果たしてこの竜王は何者なのか？そして封印した”あいつ”とは？それがわかるのはまだ先の話である…」

「…………茜色に輝く太陽と空を背に白竜が滞空している。」

「シロン、どうして…！」

「シユウは戸惑いを隠せないでいる。前触れもなくこんなこと起きたら誰でもこんな状態になるだろう。」

「お前、それが人が久し振りに帰ってきた時のセリフか？ああ？」

白竜シロンは溜息をついてシユウに言った。

「え…ホントに…シロン？」

「だから、そういつてんじゃないか」

シロンが半ば呆れ気味だったが、それは決して嫌悪からくるものではなかった。

シュウは目から零れる涙を服の袖で拭う。

「うう…シロン…。」

「で、何かいうことはないのか？」

「おかえり、シロン…！」

「ふっ…ただいま、シュウ。」

二人の交わした言葉は他愛もないが、シュウには特別なことと感じたのは言うまでもない。

すると、するとシュウは堪えきれなくなったのか号泣し始めた。それを見たシロンが困ったように言う。

「おい！いつまで泣いてんだ？」

「だって、グスッ…だってよ、お前、もう会えないって、ウッ…あ

の時いったじゃねえか…」

シロンは溜息をつき、小窓から眺めてくる2つの顔に語りかける。

「あのなあ、はあ…まあいいや。よお、メグ、マック久し振りだな」

「え…ええ、久し振り…」

「なんだな…」

メグ、マックも混乱しており、とりあえず返答することしかできなかった。

「あ、とりあえず、そこ座っていいか？メグ、マック、俺の手の上に乗れ」

「「あ…うん」」

シロンはシュウの左隣に片足をぶら下げるように座り、手の上に乗せたメグたちを時計塔の上にそっと降ろす。シュウは抱きかかえたユウトを両手から下ろして右隣に座らせた。シュウは呼吸を整え、シロンに尋ねる。

「シ…シロンさあ、なんで帰ってきたんだ？寂しくなったのか？」

横にいる白竜は前と同じ飛行帽を被って、前と同じザンバラ頭で、前とは違う眼をしていた。どこか遠くを見つめるかのように。彼の金髪が夕陽に映えて眩く反射してきた。

「さあな、ブルックリンの風が気にいったのかもな…」というのは、

冗談だ。こいつに訊けば解るんじゃないか？なあ、ラン」

冗談とは思えない口調で喋ったシロンの項から黒い羽の生えたネズミが顔を覗かしているのが見えた。

「ランって？」

シュウはハテナという顔をしてシロン見つめる。シロンは相変わらずの記憶力のなさ呆れて名前を言おうとすると、マックが突然立ち上がって喋る。

「ランシーンさんじゃないのかな？」

「さすがマックだな、正解」

「へえ、マック、お前すごいな…って、えええええ！？」

シュウは魂消たようで思わず尻餅をつく。メグも驚きを隠せないでいる。

「ちょ、ちょっとマテ！シロン、なんでわるっちゃがいるんだ？あいつ、宇宙にいった…」

「え、シュウどういうこと！？」

「ランシーンさんとシロンは一つになったんじゃないかったっけ？」

メグとマックは知られざる事実を聞いて驚いている。その場にいた訳でもないのに知らないのは無理はない。シュウは、質問攻めを受けて混乱している。

「だぁー！ストップ、ストップ、ストーっプ！とりあえず、お

前ら、落ち着け、話を整理しよう」

シュウが場を糾すと、皆が静まり返る。

「じゃあ、まずはメグとマックに話さなきゃな…えっと、

…なんだっけ？」

シロンは呆れを超越し、落胆した。これがまさに世界を救った張本人とは思えない…。

「なんなのよ、シュウ。さっき宇宙なんたらって言ってたじゃない」
「そうだった…？」

シュウとメグが夫婦漫才を繰り広げると、黒いねずみがシロンに耳打ちをする。

「ん…なんだラン。あー、わかった」

「シロン、どうしたんだな？」

マックがシロンとランシーンのやり取りに疑問する。

「ランがりボーンしてくれだってさ」

「らしいんだな、シュウ」

マツクがシュウへ言葉を受け流す。

「んっ、リボーン？OK！カムバック、リボーン！！」

しーん。

シロンはもうシュウの馬鹿さに感服してしまっている。

「お前、じゃねえよ。そいつだ、サーガだ、帽子被ってるガキンチヨだ」

「え、俺？…って、ガキンチヨってなんだよ！」

ユウトは突然の指名に驚いたが、自分に対しての二人称で冷静になる。

「なんだよ、お前がサーガかよ。ユウト、父さん手本見せるからな！タリスポッドをこう上に翳して…」

シュウがユウトに方法を体で教える。シュウのわりには分かりやすく教えている。しかし、シュウはある重要な事実に気付いていない。

「この白い機械みたいなもの？こうやって、」

「そうそう、そしてランシーン、カムバック、リボーン！！って言うんだ」

「えっと…ランシーン、カムバック、リボーン！！」

黒いねずみが黒い旋風^{つむじかぜ}となり、魔道具タリスポッドへと吸い込まれ水晶となる。そして、呼び声と同時に大きな風が起るとそこから漆黒の翼と黒服を纏った黒い竜が出てきた。

「……」

「「「「「！！！！！」」」」」

黒竜は無言だったが、どこかしら哀しげな眼をしていた。ユウトは思わず、自分のタリスポッドとランシーンをキョロキョロと見渡し、自分のしたことに驚いていた。

「なんだ、ユウト。やればできんじゃないか」

「う…うん」

「????すると、突然風を切って途轍とてつもない速さでシュウの顔めがけてなにかが向かってくる。」

「ベシンツー！」

「あんた、なに軽く重要なことスルーしてんのよ!!」

「シュウ、今のはなんかついていうか絶対おかしいんだな……」

「いつてえっ!!メグ、いい加減それやめろ、顔がもたねえよ!」

「喧しいわ!あんた、聞いた?!うちのユウトがアレよ、ア・レ!」

メグとマックが必死に示唆する。

「ユウトがどうかしたのか?…あー、明日も午前授業だったか?こいつらと一緒にいく…グボアッ!!」

メグチョップがもう一発シュウの顔へクリーンヒットする。

「あんた…ふざけるのも……」

「シュウ、シロン曰く、ユウトくんは風のサーガみたいなんだな」

マックが簡潔に説明する。それを聞いたシュウは痛む頬をおさえながら言う。

「へえ、ユウト、お前サーガなのか」
「らしいね…はは」

「つて、お前サーガかよ！！！」

「そういつてんだろ！ああ、もう、黙って聞いてりやグダグダと」
「というか、さっきシユウ自身が言ってたんだな…」

シロンは苛立つてしまい怒号をあげた。流石のマックも呆れている。????ふと、空を見ると既に日が沈んでいた。暗闇が街を包み静寂を醸す。目立っていた黒竜は暗闇と同化し、いないのよう見え、逆に白い方は浮き出ているように見えた。
夜風が痛む頬を優しく撫ぜる。

「もう、遅いぜ…とりあえず家に帰らねえか？話はまた後で」
「そうね…」
「それがいいんだな」

皆が賛同したユウトとトミーは眠そうな顔になっている。一日中動き回ったのだから疲れるのは当然だ。

「シロン、わるっちょ、話あとでいいか？こいつら眠った後で…」

「ああ」

「…」

シロンは返事をしたが、ランシーンは頷くだけだった。

「んじゃ、車に…」

風がくくこの街をくく

????いきなり、音楽が鳴り始めた。いったい…。

「あ、ディーノから電話なんだな」

驚いたことにマツクの携帯の着信音だった。シュウは何故かそれが感に障った気がした。

…！！　そういえば、ディーノのヤツも思い出したんじゃないのか？俺らも思い出したし。

「うん、うん、分かったんだな」

マツクが会話を終えたようで、携帯を閉じてズボンのポケットに入る。そして、恐らくディーノからであろう言伝をシュウたちへ言う。

「ディーノが、？僕の家に来てくれ、話がある。どうしてなのかは分かってるだろう。？って言ってたんだな」

この発言からディーノも思い出したのは間違いないだろう。あいつの家なら広いしシロン達も落ち着いて話せるはずだ。

「じゃあ、行くか！皆、車に…」

「乗れよ」

シュウは、シロンの突然の提案に？はあ？？と言ってしまった。

「早く乗れ、そっちの方が早い。ランもいるしな」

「…！シ、シロン！？」

ずっと無言だったランシーンがシロンの言葉に狼狽える。彼の眼には焦りが浮かんでいるのが分かった。

「なんだ…？キザ夫の所までだからそんな遠くねえぞ。それとも乗せるのが嫌とか？」

シロンは、ランシーンを意地悪く言い、口角を上げニヤリと笑った。

「そ、そう言う訳では…」

ランシーンは俺らの目線が気になったのかこちらを見たが、すぐにシロンの方へ向きなおす。すると、ランシーンはなにか決めたのか溜息をついて言う。

「…分かりました。行きましようか」

「ふつ、満場一致ってことで行くか。シュウ、サーガつれて乗れ。メグもだ。」

金髪の白竜に言われるがままに乗る。彼の背中中はフサフサして乗り心地がとても良い。

……懐かしい匂い。

またこいつに触れられたことがとても嬉しい。温もりが伝わってくる。

マックとトミーはランシーンの上に乗る。ランシーンは訝しげだったが、マックは躊躇なく乗り込み、ありがとうなんだとだけ言いトミーを抱えて座る。

「よし、行くぞ！」

シロンの合図とともに、出発する。ずっと暗い空には一番星が輝いていた。それを見たシュウは不思議と安堵する。

だが、そのとき二頭の竜が何を想っていたのかは知る由もなかった。

Ep.3 ―? (前書き)

読みやすく小分けしてみました。

一方、ここはスパークス家。時計塔から向かったシユウとユウトたちは数分前に到着していた。

到着後、ディーノに手厚く歓迎され、赤いカーペットの広い客間に案内された。部屋には特に目立ったものはなく、数台のソファ―が1卓のテーブル囲んでおり、宿泊用だと思われる今では珍しい籐家具のベッドが2台程あった。ソファ―に全員もたれ掛かるシロンとランシ―ンはシユウの後ろに立っている状態だ。

みんなを此処へ案内するとディーノは彼の両親と息子であるリユドを呼びにいつてしまった。会談を始めるのは全員揃ってからの話なので、一時の雑談をみんな始めていた。すると、シユウは先程の父から電話を受けており、それを終えたところだ。

「シユウ、誰から？会社の人？」

メグが気になって尋ねる。

「まあ、あながち間違いじゃないけどな。父さんからだったよ。」

シユウは父から言われたことを事細かに話す。シユウも今ではしっかりした大人の一人だ、伝言をするコトくらいわからない。

「…へえ、じゃあ、ハルカ先生達も思い出したってコトね…。どうしてこうなったのかしら？やっぱりシロンがきたから？」

メグが俯いてシユウに呟く。

「ああ、やっぱりそうなんじゃね？それぐらいしか考えられないし」

シユウがあつさりと返答したかと思うと、ガラスのテーブルの上にあつたクツキーを一枚手に取り、口に運ぶ。

すると、呼びにいったデイーノがリュドだけを連れて部屋へと戻ってきた。

「やあ、みんな待たせたね」

「あつ、ユウトとトミーだ！」

「よお、キザ夫」

「あら、デイーノさん」

「デイーノなんだな」

「リュド、お前もいたのか！」

「こんばんはなんだな」

何気ない挨拶だが、今となつては何処か違う。昔日を感じさせる。

「シユウ、君はいつまで僕の呼称をそれにするつもりだい？僕も、もう子供じゃないんだからそんなコトに一々反応しないよ」

「してんじゃん」

デイーノから青筋が浮かぶ。

「シユウ…君は一発痛い目遭わないとダメなのかな？」

「キザだから仕方…グウエエー！」

「人の嫌がることやらない！」

恒例のメグチヨップが炸裂する。マックが流石と言って笑い、シロ

ンも昔と変わらない光景に微笑する。

「で、シロン…久しぶりだね。そしてあなたも…」

デイーノは二匹に竜に再会の言葉を伝える。デイーノは二匹を見上げ話を続ける。

「シロンはまだしもあなたまで…あなたはシロンと一つになったのではなかったんですか？」

「…」

ランシーンは俯いたまま沈黙を決め込む。すると、シロンが代わりに話し始める。

「デイーノ、話は後にしてくれないか？ガキたちもいるしな。」

デイーノがシロンの目線の方向に顔を向けると自分達の会話などにせず会話をする子ども達がいた。

「ユウト、これって学校で言ってた奴じゃ…」

「うん、そうみたい。シロンっていうんだとよ」

「シ…シロンよろしく。てか、これってアリ？」

「ああ、ヨロシクな。まあ、アリなんじゃないか。」

リユドが戸惑いながら頷き、すぐに驚きをユウトたちに伝える。

「なあ、いまはこのまま見守るのが一番だと思うぜ」

シロンがデイーノを見下ろして言う。確かに、子供たちにこの話を

今するべきじゃないのかもしれない、デイーノは腕を組んでシロンを見つめる。

すると、後ろからドアが開く音がした。入ってきたのは、デイーノの父ブルーノ、母メリッサだった。そして…

「デイーノ、お客さんだよ」

後ろについてきたのはヘップバーン家だった。ハルカとユル…そしてマリもだ。ハルカとユルがみんなに一礼したかと思うと二人の間からマリが飛び出てくる。

「ユウト！私をおいて一体何してたの…ってこれって！」

ユウトに？ 瀨と呼びかけたが、すぐ後ろにいた変わった生物をみる。それはマリの方へ向く。

「まさか…ウインドラゴン…！！？ キヤアアアア？ ホントに会えるなんて夢のようだわ！」

マリがシロンに抱きついてくる。シロンは突然の出来事に驚きを隠せない。ウインドラゴンという名前を知っただけでも驚きだが、このテンションの高さには更に驚いていた。

「ちょ、ちょっとマリ！ あ、シロンさん…。 えっ、ランシーンも…！？」

「お、おい！ 落ち着けて、ホントにハルカにそっくりだな」

「え！ なんでママのこと知ってるの？」

マリが目を見開いてシロンを真下から見上げる。シロンは落ち着き

を取り戻し説明を始めた。

「ハルカには色々世話になったからな、良い意味でも悪い意味でもまあ、俺が不甲斐ないせいだったんだけどな…。なあ、カワイコちやん？」

ハルカは思わず紅潮する。心では不安を感じていたのは確かだが、同時に喜びも感じていたも嘘ではない。

「シ…シロンさん！私もう50なのよ、そ、そんな呼び方！」

「ふっ、変わんねえな…。アンタとも一度ゆっくり話さなきゃいけねえな…」

シロンがポツリと呟く。マリのはしゃぎ声とそれに反応する子供たちの声のせいか、ハルカには聞こえてなかったように首を傾げていた。

「ランシーン…お前もいたのか」

「…久しぶりです、CEO。貴方も随分なご老体に成り果てましたね…」

ランシーンはユルに辛辣な挨拶をしたが、ユルは特に反応することもなかった。すると、ユルがみんなの方をみて叫ぶ。

「皆様、私はDWCの最高責任者ユル・ヘップバーン。そこにいるマリは私の孫です。今夜は親御さんたちに話があります！子供達には少し席を外してもらいたい」

ユルの声が大きかったせいかな少し怖じ気づく子供たち。

「ええ、おじいちゃん、私もつとウィンドラゴンさんと遊びたいよ
お！」

マリはいつの間にかランシーンの上におり、耳を弄って遊んでいた、
当のランシーンは怪訝な顔をしている。
すると、ハルカがマリを諭す。

「マリ、後にしなさい。シロンさんやランシーンは大人だからちゃんと後で遊んでくれるわよ。」

「えつ、本当！？やったー」

「おい！ハルカ、余計な……」

「…全く、良い迷惑です。」

大喜びのマリ。

一方の二頭の竜はたじろいでいたが、マリの満面の笑みをみたら何も言えなくなってしまうた。

ユルがやりとりが終わったのを確認してメリッサとブルーノに子供たちを頼むよう言った。

「ほら、みんな！お父さん、お母さんたちは大事な話あるからあつちでTVでも観ましようか」

「みんな、昨日録画した『やけに怖い話30周年スペシャル』見ない？」

リユドが提案して、それに乗っかるようにユウトたちがついて行く。メリッサは残された人にお辞儀をして子供達と一緒に部屋から出て行った。

ボタンとドアの音が響く。

「…では、皆さんもう何を話すかお分かりのようですが、早速始めましょう」

ユルはガラス窓の前に立ち、外を眺める。部屋が暖かいせいかな窓が曇り水滴が垂れていた。

「まず、本題から…単刀直入に言います。主に二つある…」

何故、ウィンドラゴン…レジェンズと共に25年前の記憶が甦ったか。そして、これから先、恐らく降りかかるであろう困難にどう対処していくか…。この二つについて話し合いたい…」

皆、固唾を飲みユルの言葉を耳に入れる。彼は『困難』と曖昧な言葉で表現していたが、その結末については誰しもが知っていたのは言うまでもない…。

すると、ユルが皆の方へ振り向く。

「そして、話を始める前に言わなくてはいけないことがある…」

ユルは喋り終えたかと思うと、突然、跪ついて頭を垂れる。

「みんな、あの時はすまなかった！私が…私があんなコトをしてしまい、皆…シユウくん達を傷付けてしまった！本当にすまない…」
「私も、勝手な思い込みであなた達を傷付けた。本当にごめんなさい…」

ユルに続いて、ハルカも土下座する。二人の顔はシユウたちには見えなかったが、そこには悔いても悔いきれない…そんな想いがあった。

すると、沈黙に耐えきれなかったせいか、シユウが諭し始める。

「ユルさん、ハルカ先生、もう過ぎたことなんだしいいじゃないですか。最後に自分の過ちに気付けた、それだけでいいじゃないですか…。だから、顔をあげて下さい」

「ありがとう、シユウくん…。でも、私たちはまだ頑張らなくてはいけないんだ…君たちの力になれるように…」

ユルの目は潤んでいたが、そこには強い決意が感じられた。ハルカも同じようだ。

ユルは立ち上がり、ハルカに手を貸して起き上がらせた。そして、

「みんな、すまなかった。では、話を始めるとしよう」

「まず一つ目、多分、本人に聞くほうが手っ取り早い…シロンくん、ランシーン何か判るかい？」

ユルがシロンとランシーンに目配せする。
すると、シロンが重い口を開く。

「すまねえ、何も分かんねえんだ。けど、もうみんな知っている通りお前たちの記憶は鮮明に残っている。」

ユルが顎に手をやって考える仕草をする。

「ふむ…つまり、前と違って記憶を失くした状態ではないということか。君が甦ったということはサーガもいるんだね？それは何処に？」

シロンが子供達が出て行った扉を指さす。ユルはよく理解できなかったようで、シュウが補足のように自分の息子の名を伝える。

「…！！　そうか…。少しは予想していたがまさかとはね。推測だが『サーガの血脈』というものがあるのかもしれない」

皆が俯く。マックは普段の穏やかな目ではなく、焦りに満ちていた。

「では、次にランシーンは何かあるかい？」

すると、ランシーンは徐に立ち上がると挨拶を始めた。

「お初に目にかかる方もいると思うので紹介をしておきます。私の名はランシーン、種族はウィンドラゴン、以後お見知りおきを…。私が意見する前に言いたいことがあります…」

自己紹介を終えるとランシーンが頭を深々と下げる。周りの皆は何

も言わなかった。

「前は、とても罪深いことをしてしまった…。本当に済まない思
つてます…。きっと、皆さんは私が憎いでしょう、恨めしい…。その
はずだ。如何なる罵声も受ける覚悟です！」

懺悔をするランシーン。彼は『あの時』の最大の敵で、シュウ達心
身共に深い傷を負わせた。それを悔いて悔いて…。そんな目、そんな
口調をランシーンはしていた。
すると、シュウがいきなり立ち上がる。ランシーンが罵りを受ける
のかと思い、目を瞑る。

「…ばっかやろう!!」

シュウの浴びせる罵声、しかし、これには怒気がこもってはいなか
った。シュウが続ける。

「お前が…お前がいたから、世界が、俺らがここにあるんだぜ。俺
は知ってるから…。だから、お前のその言葉信じるからな！よし、こ
の際全部話す！思い出したしな。」

シュウはジャバウォックの中のことを話す。ユルの妻ラドのこと、
ランシーンがジャバウォックと共に宇宙の屑となったこと…。
ユルは真実を聞き呆氣にとられてた。

「そうだったのか…。ハルカ、パパに何で言わなかったんだい？」

「ごめんなさい…。でも、あの後記憶が消えるとは思ってなかったか
ら。あと、このこと話したらパパきつと思いい詰めちゃいそうだった
から…」

ハルカが弁解して、申し訳なさそうに謝った。ユルは溜め息を吐いて、ランシーンに言う。

「ランシーン、私はお前をシュウくん、ハルカが言うとおり信じる…。お前のその言葉に偽りはないな？」

「はい。」

ユルはシュウたちを見回すとみんな首を縦に振っていた。

「よし、和解はしたな。お前の頭脳が味方になってくれるとは心強い。敵に回すと厄介だな。」

みんなから笑い声が漏れる。ランシーンも何処か安堵しているように見えた。

「では、ランシーン。何か言いたいことはあるかね？」

「はい…この復活に何故私までということ、しかも『心』を持ったまま。それについてはまだ判りません。そして、レジエンスの本来の復活の意義…それは…」

「レジエンスウォー…文明の黄昏時か…」

空気が途端に重くなる。レジエンスウォーがまた起こるかもしれない、またあの惨劇が…。

「また起こっちゃうのか…！クソっ、折角抜け出せたのによ！」

シロンが舌打ちをして足を鳴らす。シロンは最悪の状況を一目見ている、そこでスピリチュアルのレジエンスたちに諭されたお陰で滅びの運命から脱却できたのだ。それが水泡に帰す…そんな現実にはシロンは嘆いていた。

「所詮、レジエンスは戦いの為にこの地球に遣わされた生物兵器…。その運命は変え難い。」

ランシーンがそう呟くとシュウが、テーブルを強く叩いて立ち上がり、ランシーンに猛反論する。

「なんでそんなこというんだ！？俺らまた会えたんだぞ、嬉しくねえのかよ…！」

シュウが怒気をあげたが、ディーノがすぐに反論し返す。

「シュウ、嬉しいのは当たり前だよ…でも、ランシーンの言う通りだよ。戦いが終わった後、レジエンスは地球に還ったんだよ…グライダーも。それがもうランシーンの言葉の裏付けだ。」

「違うんだディーノ…そう言う意味じゃなくて…なんていうか嫌なんだよ。」

シュウがディーノと呼ぶのは相当本気になっている時だけだ。しかし、ディーノの言葉も虚しく空へと溶け込み消えてしまった。シュウは、落ち着きを取り戻したのか座って、膝に腕を置いて俯いてしまった。

「シュウ…私もやだ。だって、ユウトがサーガなんて、今でも信じられない。ユウトと同じ目はあわせたくない。私、怖い…」

メグは涙目になって不安を訴えていた。すると、

「大丈夫なんだな」

シュウたちはいきなり声を発したマツクに視線をむける。みんなはマツクの暢気な笑顔に少し眉をしかめた。

「マツク…何を根拠にいつてるんだい」

ディーノが相槌する。マツクは平然と話し続ける。

「大丈夫なんだな。だって、僕たちは前の戦いで運命を打ち破ったんだ。だから、今度もみんなで力を合わせればきつと…いや、絶対できるんだな」今度はCEOやランシーンさんもいるんだから必ずいけるんだな」

マツクの言うことには説得力があり、皆の心を揺り動かした。確かに皆は運命を打ち破った『あの時』の戦友だ…それを何で忘れていたのだろうか。

「ふふっ！さすがマツクね」

「そうだね」

ディーノやメグたちは不安がとけたようだ。しかし、シュウとシロンは未だ苦虫を噛み潰したような顔をしている。それを見たマツクが続いて喋る。

「シュウ、シロン。きつと大丈夫、僕たちはずっと一緒なんだな。きつと、これ乗り越えたら平和にずっと暮らせるんだな」

マツクの言葉は凶星だったのかシュウが顔を上げてマツクの方を震えた目で見える

「マツク…マツクうゝ！」

「そうだな…マツクありがとな」

シュウがマツクに飛びつく。シュウの涙でマツクの上着は濡れていた。マツクはそれを嫌がることもなく笑顔でシュウの背中をそっと撫でていた。

「そうだね、前よりレジエンスへの理解者が多いから余裕を持って行動できるはずだね。僕も早くグリードに会いたい…」

ディーノの遠い昔の思い出が懐かしかったのか重い口が綻んでいった。すると、早速ランシーンがディーノにさっそく朗報を伝える。

「ディーノ・スパークス…火の気配はすぐそこまできている、直に復活するでしょうね」

ランシーンの知らせに喜びを噛み締めていたが、どこか不安げな顔もしていた。ランシーンはそれを一瞥して話題提示をした。

「さて、これから来るであろうレジエンスウォー。私の考えたこのことを決めつけてしまうのは早合点かもしれませんが…」

みんなが啞然とする。シュウが何故か訊くと、ランシーンは息を吸って続ける。

「前の戦いから何年たっているか、わかりますね？」

「25年だ」

シユウは何故か自慢げに答える。

「そうです。25年しか経っていないんです。レジエンズウォーの発生原因…つまり、ジャバウォックの誕生、これは人間の恐怖、憎悪、不安が具現化したものです。嗚呼、これだけのおぞましいエネルギーを創ってしまう人間は実に畏れ多い…」

みんながランシーンの言葉の一つ一つに耳を傾ける。

これでレジエンズウォーへの対策の手掛かりとなるなら願ったり叶ったりだ。

「ですけどね、必要なですよ、それだけのエネルギーを蓄えるのに、時間が…それも最低でも一千年は。それと比較すると25年は短すぎる、それに地球の状態が前より悪化したようには思えない。寧ろ良くなっているようにも思える。では、一体この復活は何を暗示しているのだろうか？ジャバウォックの残存勢力か…それとも新たな敵か…或いはそのままレジエンズウォーか、それはまだ判りません。」

ランシーンは、話を中断するとあることハルカに訊いた。

「ハルカ、螺旋の書はあるか？」

ハルカは少しギョツとしたが、父の書斎の中にあるかもしれないと言った。

螺旋の書とは、所謂、予言書のようなものだ。著作は、スピリチュアルたちでその性格からか拙い文章が多い。しかし、今の状況ではそれはとても良い手掛かりとなる。

「そうですね…、それはとても重要な手掛かりになります。もし、見つけたら大事に保管しといて下さい」

ランシーンはそのまま胡座をかいていた足を解いて立ち上がり、シユウたちを一人一人見つめた。みんないい顔をしている…これが『信頼』されるというものか、とランシーンは沁みじみとした。

「私の意見は、これぐらいです。他のことは調べて解ったら随時報告します。…では、話を終える前に君たちに言っておく。」

ランシーンの口振りはシユウたちには偉ぶっているように聞こえたが、先程から言っていること説得力があるのでたいして気にならなかった。

ランシーンはひと呼吸置くと、自信に満ちた声で言った。

「今日話したことは一旦忘れて下さい。どうせまた全員揃った時にまた話しますから。それより悩みこむより、いまは再会を喜ぶべきだと私は思いますよ…」

ランシーンは微笑むと、シユウは立ち上がって突然提案する。

「よし、歓迎会やるぞ」

「…「歓迎会??」「」」

みんな口を揃えてシユウ特有の突拍子のない提案に驚く。

「ほら、もうすぐクリスマスじゃねえか」そんなときさあ…」

シュウがあれこれ説明しているのを他所にランシーンがメグの傍に座り込む。メグは別にランシーンが来たことに反応はしなかった。ランシーンはメグの後姿を見下ろして質問する。

「あれが世界を救ったサーガですか…とてもそのようには見えませんね」

「あれがシュウですから、本当に昔と変わらないんです」

「……怖くないんですか？」

メグはランシーンを一瞥して備え付けてあつた紅茶を一口飲み、喉を潤して答える。

「私は別にみんながいるから今度もきつと…」

「違います。そういうことはでなく…」

メグは眉をしかめて不思議そうにランシーンを見る。ランシーンその瞳に話を続ける。

「私が…怖くないんですか？」

唐突だった。メグは弱冠驚いたもののすぐに落ち着きそれに答える。

「正直、怖いかもしれません。だって以前は、あなたは私たちの敵だったんだもの」

ランシーンが上を見上げてメグに話を聞く。メグの返答を聞いて、自分がみんなに恐怖心を与えてるかもしれない…そんなことに後ろ

めたさを感じた。しかし、メグが驚きの返事をする。

「でも、私はあなたを信じます。」

「……!!何故?」

「シュウが信じているから。シュウが大丈夫って言ったときは絶対大丈夫なんです。確かに、バカでお調子者で能天気だけど、どうしても信じたくなんです、不思議ですよ。全然まとまってない理由だけど、つまり、それがシュウなんです。」

メグは笑顔をランシーンに向けてシュウたちに方を見る。あそこでは歓迎会についての計画で盛り上がっている。

「さて、私も話に混ざろうかな…ランシーンさんも早く来て下さいね。」

メグはそう言ってシュウたちの方向へ走り去ってしまった。

「信じている…か」

ランシーンは部屋を眺める。

この部屋は眩しすぎる、まだ光に慣れない自分に嫌気が差した。

Erz?

一方、子供達は客間でリュドの提案したものを観ていた。客間には大きなテレビと3人掛けのソファア、そして至つて普通の大きさのテーブルがある。後はただ壁の周りに美術作品が飾つていただけだ。ブルーノは用事の電話をかけに先程部屋から出ていった。ここにゐるのは子供達とメリッサだけだ。

「見たな……呪ってやる！ くけけけっけけけけっけっけっけ！！！」

「ギアアアアア！」

暗い部屋でリュドが先日録画したホラー番組を見るユウトたち。余りも怖さに4人とも抱きかかえあっている。

「リユド、やっぱこええよ！日本のホラーこええええ！冬に見るもんじゃねえ！」

「ホラー好きの僕も流石にぞっとした。てか、ユウト、もう離れてよ…番組終わったし」

「冷や汗ダクダクなんだな」

「あんた達の肝つ玉ちっちやいわねえ、あれぐらいでなにビビってんのよ」

「マリ、足震えてるぞ」

そんな子供達をみて笑うメリッサがある提案をする。

「ハッハッハッ！よし、私が温かいココアでも入れてきてあげるよ。」

「おお、リュドの婆ちゃん気がきく〜」

メリッサはニコツと笑い、厨房へと向かった。

リュドはずっと暗いのも嫌なのでリモコンで電気をつける。

「リュドのお祖母さん優しいんだな」

「うん。僕の自慢のおばあちゃんだよ」

トミーはその言葉にふと疑問を持った。

「そういえば、リュドのお母さんって家では見かけなかったんだな」

「ちよつ、トミー、それは…」

「ダメよ、トミー…」

ユウトとマリが止めに入ったが間に合わなかった。

リュドはピクンとした瞬間、顔から笑いが消えた。そして、何かを決心したようにトミーに語り始める。

「大丈夫、ユウト、マリ。いつかは言わなきゃって思ってたし…。」

番組は既に終わっており、テレビ放送に勝手に切り替わっていた。報道が淡々と流れている。

「僕の母さんは僕を産んだ時に死んじゃったんだよ、父さんから聞いた。」

トミーがリュドの昏いところに触れてしまったと思い慌て、すぐに謝罪した。

「リュド、ごめんなんだな、何も知らなくて…」

トミーが後悔しているのか膝の上に置いてある手が震えている。リュドはそれに気付き、暖炉よりあたたかい手でトミーのそれに重ねる。

「ううん、別にいいよ。でも、僕を可哀相とか不憫とか思わないでね…」

リュドはトミーの右手を両手でギュツと握る。トミーの不安が伝わってくる。

「僕には母さんはいないけど、母親の愛情なんて分からないけど、僕はいま幸せだよ。僕には父さんやおばあちゃん、おじいちゃんがいる。それにユウトやトミーやマリもいるんだ。僕は独りじゃない！…だから、そう思わないでね。」

リュドは続いて、首にかけてあった十字架のネックレスをみせた。十字架の交わりのところには赤いルビーのような石がある。

「これ父さんが渡してくれたんだ。母さんが死ぬ間際、僕に渡してって頼まれたんだって。まあ、つまり形見つけてやつだよ。」

リュドはそれを首から取り外しユウトたちに手渡して見せた。中央の赤い石が赤く燃えているようだった。

「きれいなえ、宝石をみるとロマンを感じるわ」

「リュドは強いんだな…」

「へへっ、そうかな…」

リュドはマツクの褒め言葉に照れる。

しかし、そんなことはよそにテレビからはアナウンサーの
声が無機質に流れている。

『…では、次のニュースです。明日はコブルヒル大火災8周年です。
近くのグリーンウッド墓地で追悼式が開かれます。コブルヒル大
火災は約100棟を全焼、死傷者500名以上、生存者は数名しか
残らなかった悲劇でした。原因は未だ究明中で…』

リュドはこのニュースをみて明日、自分の父がこの追悼式に行くこ
とを思い出した。何でもお世話になった知人が犠牲になったらしい
惨たらしいものだと感じた。その後は、リュド自身もどっかに連
れて行かれる予定である。美術館がいいな、あそこはいま名画が飾
られている、行く価値はあるだろう。

すると突然テレビの画面がプツリと真っ黒になってしまっ
た。

後ろを見ると、メリッサがリモコン手にココアを乗せたトレーを
ウェイターのように持っている。何故かメリッサの口はへの字だっ
た。

「あつ、おばちゃん何すんだよ、みてたのに。」

「あんなニュース、あんだ達が見るもんじゃないよ。それより、ほ
ら、ココア持ってきたよ。」

メリッサが子供達に赤や白やオレンジ、そして青のマグカップを手
渡す。

ユウトは真っ先に白のマグカップを取り、リュドは赤、トミーはオレンジ、マリは青を取った。

「甘くて美味しいんだな」

「ぷはーっ、あつたまるねえ」

「流石、リュドのおばあちゃん！」

ココアの甘美な香りが部屋中に広がる。リュドはメリッサを誇示するかにように彼女を見つめた。先程のホラー番組で冷えきった部屋の空気も暖まりだした。

ユウトはすぐに飲み干してしまい、？ごちそうさま？と礼儀正しくメリッサに言った。シュウの息子だからといって、その辺のマナーはちゃんとしているので心配は要らない。

「そろそろあんた達の親も話を終えた頃だろうね。もうこんな時間だし。」

部屋に飾ってあった今のご時世では稀有であろうシックな鳩時計は10時ちよつと前を指していた。本来なら既に就床している時間だ。すると、タイミングを見計らったのかシュウたちが入ってきた。

「ユウト、そろそろ帰るぞ」

シュウを先頭にメグ、マツクとそろそろ入ってくる。子供達もそれに気付き、メリッサにココアの礼を言ったあと、それぞれの親元へ走り寄っていった。

「ユウト……」

「どうしたの、父さん？」

シュウは首を横に振って？何でもない？とだけ発した。シュウはまだ部屋に残るココアの匂いが妙に優しく感じた。

...to be continued

Ep. 3 ― ? (後書き)

自分でも読みづらいと思い、小分けしてみた。
読者の方にも読みやすくなっているとうれしいのですが・・・

Ep・4 アツイあいつがやってくる 〈I do love roses

今日、父さんと美術館行くんだ。

一緒に外出するのは久しぶりなんだよね。

それにしても、冬にしてはあったかいよね。興奮が収まらないだけだと思っけどね…。

じゃあ、続きは帰ってからで。

(リュドの日記 29/12/21 より)

……。

……。

何処だここは……。

「やあ、ランシーンさん。」

お前は、マイク・マクフィールド……。ここは何処なんだ、教えてくれ。

「僕、貴方を信じていたのに。さよなら……」

おい、何処に行く？ここは何処なんだ！待て……？
……行ってしまった。此処は一体……

「ランシーンさん、ごめんなさい。私、貴方をやっぱり信じ切れな
い……、さよなら。」

「僕もシュウが信じていたから信じていただけ。でも……」

メグ・スプリンクル！

ディーノ・スパークス！

待ってくれ、私も行かせてくれ！！……消えた。何故だ、何故行かせ
てくれない……。

「よお、わるっちょ……ラン」

シュウゾウ・マツタニ……シュウ！

どうして…みんな私を置いていく…！お願いだ、こんな暗いところからは…

「気安く俺の名前を呼ぶなっ…！！！」

…！！？どうして…みんな…

「じゃあな、お前とは良い友達になれるかと思ったのによ。」

シュウ…シュウ…お前は私を信じていたのではないのか…。

「ラン。」

シロン、お願い…一緒に、

「無理だ、お前はまだ皆に赦されてないんだ。」

何故、何故…

「じゃあな、今まで世話になったな…。」

シロン！

「くっ…！離せ！」

絶対離しません！絶対、絶対に…！

折角手に入れた私のシアワセを逃がすものかあああああ…！！

……。
……ろ。

「……ガガ（……きろ）」

絶対に離さない。

「……ガ、……ガガ！（……ン、……きろ！）」

こんな私を暖かくしてるものを絶対に離さない！

「……ガ、ガガガ！（……ン、起きろ！）」

ん？起きろ？

「ガガガガガッ！（ランッ、起きやがれ！）」

耳元の声で目が覚める。

目を開けるとその前には自分の手に首を捕まれてもがいて
いる白いねずみが……さっき自分の元から去ろうとしていた白いねず
みがいた。

「ガガ……！ガガガ……ガガ……。 （ランッ……！起

きてくれ…死ぬ…。」

「グ、フグガッ！（す、すみません！）」

どうやらうつかり時計塔の小窓の縁側で昼寝をしてしまったらしい。私としたコトが…。

時刻は既に昼を過ぎていた。太陽がどのビルにも隠れずに分け隔てなくニューヨークの街を照らす。

まあ、こんな夢を見てしまったのもきつと昨夜のことがあったから仕方ないだろう。あの会談の後に…

――時は14時間程前に遡る。

「すまねえなキザ夫、邪魔しちゃって。」

「別に構わない。これからもうこういうことがあると思うから、その時には僕たちの家を使っていい。…あと、僕はディーノだ。」

マツタニ一家は帰りの準備を済ませて玄関にいた。ヘップバーン家もだ。

すると、シュウはマックたちの住んでいる場所が気になった。車で送ることを口実に訊いてみるか…。

「マツク、お前たち送ってくよ。ついでにどこ住んでるかも知りたいさ。」

「別に要らないんだな。」

マツクはやっぱりと否定した。別に遠慮することはないの
にと思ったが、とりあえず住所だけでも訊くことにした。

「それじゃあさ、住所だけでも教えてくれよ。遊び行くこととかあるだろうし。」

マツクは肯くと、少し辺りを見渡すと何故か床に向けて指
差す。

「ここなんだな。」

「そうか、ここなのか。じゃあ、いつでも会える……えっ？」

「えっ、マツク、ここに住むの？」

シュウとメグが呆氣にとられてた。メグに至っては突っ込
む気力すらない。

「マツク、ここに住むんだよな？えっ、じゃあバーで言ってた『別
で』って…！」

「うん、こういうことなんだな。」

「トミー、ここに住むのか！？スゲエな…」

「僕も最初この家を見た時は驚いたんだな。」

「まあ、僕から説明しよう。」

ディーノが混乱するみんなにこの状況を説明した。

「つまり、マツクの奥様が海外出張で暫く帰れないから、ここに居候するってことね。」

「そうなんだな。」

しかし、当たり前だがこれでは説明が不十分だ。シュウが更に追及する。

「でもよ、キザ夫のところに来る必要はなかったんじゃないか？マツク、一人暮らしたことあるんだから、生活に負担はないだろ。」

マツクは、現役主婦であるメグが羨むほど家事の手際が本当に良い。料理の腕も中々のモノだ。

「ローザだけ海外出張っていうのはズルいかなって思って僕たちもここにきたんだんな。」

「ははっ…そんな理由でかよ。トミーはいいのか？あっちの学校で友達いたんだろ。」

「いたけど、殆どの生徒がワシントンやニューヨークとかの都心に転校しちゃったんだな。僕の友達も殆どね・・・。」

トミーは苦笑してヤレヤレという感じに手を出していた。シュウはトミーに合わせ笑う。トミーがいいのならきつとそれで構わないのだろっ。

ふと、後ろを見るとヘップバーン家がキョロキョロしている。そろそろ帰ろっ。

「…じゃあ、マツク、俺らそろそろ帰るわ。キザ夫もな。」

「また今度なんなんだな。」

「じゃあね、あと僕はディーノだ…。」

シュウはウシシと笑うと、ドアの方へ振り返りみんなを連れて玄関を出て行った。

「…マツク。これからよろしくね。」

「こちらこそなんだな♪」

二人の子どもが見守る中、こちらにもまた別の新しい生活が始まった。

…そして一方、シュウたちはシロンとランシンの上に乗ってDWCの前にいた。

「ホントにここでいいのか？家まで送っていくぞ。」

「ありがとう、シロンさん。でも、荷物置いてきちゃったから少し片付けてから帰りたいの。」

「そうか…。」

ハルカ、ユル、マリを背中に乗せていたランシンは跪く体位になって彼女たちを降ろす。

「じゃあ、また今度会いましょう。またね、シロンさん。ランシンはこれから一緒に仕事するんだから、そこんとこわかってるでしょ？」

「ん、結局遊べなかったよ。」

シロンはマリに微笑し、？明日な？と言う。マリの顔はむくれていたが不服…というわけではなさそうだ。一方のランシーンは少し照れくさかったのか不自然な咳払いをした。そして、ヘップバーン家に別れを告げ、シロンたちはDWCを後にした。

風を悠然に受けて、空を翔ける。夜空には星が爛々と満ちていた。シロンに乗っているのはシュウだけで、あとの二人はランシーンに乗っている。

「シロン、ラン。」

「…なんだ？」

飛行中に突然シュウが問い掛ける。口調は重く抑揚がない。

「…ユウトを頼むぞ。あと、まだレジエンスとかのこと話さないでくれ、俺が時期をみていつか話す。」

「…わかってます。」

「……。」

ランシーンはさり気なくシュウにあだ名で呼ばれていたが特に気にすることなく、シュウの想いを受け継いだ。どうやらメグとユウトには聞こえなかったようだ。しかし、確実に聞こえていたはずのシロンは何も言わなかった。そして、結局家に着くまで何かを言うことはなかった。

暫しの空の旅を終え、家に着く。シロンとランシーンは乗せていたシュウたちを降ろす。何故か家がとても懐かしく思えた。シュウは今日は色々なことが起こったな、とシロンたちに笑ってみせる。

「んじゃ、ユウト。こいつらをカムバックしてくれ！」
「うん。」

「あつ、ちょっと待って下さい。」

ユウトがタリスポッドを掲げようとするランシーンがそれを止めに入った。

「？」

「すみません、少しシロンと二人きりでゆっくり話したいんです。5分程なので……。」

「そうか。じゃあ、終わったら声かけてくれよな。お前ら、ずっとリボーンしっぱなしだと疲れるだろ。」

ランシーンは？はい？と肯いて、シュウはユウトとメグを連れて家へと入っていった。

「で、二人きりで話したいことってなんだ？」
「……。」

ランシーンは黙ったまま閉じられた家の扉をまだ見つめている。

「早くしてくれよ、久しぶりに家に帰ってきたしな。あと、シュウのお袋さんにも……。」

すると、突然ランシーンがシロンの方へ振り返り飛びついてきた。シロンはランシーンに押し倒されてしまう。シロンは仰向けになり、ランシーンに覆い被さられている状態だ。

「ラン……!？」
「……………」

シロンは驚きを隠せず狼狽する。ランシーンの月明かりで煌く髪がシロンに垂れてきており、そこからはコロンのような芳醇な匂いが漂っていた。それがシロンの鼻先を優しく愛撫してくる。

「シロン…これからはずっと一緒です。そう、昔のように…。」
「ラン、お前一体……。」

シロンを見上げる黒竜が口角をあげたが、月明かりで逆光になっておりシロンにはよく見えなかった。ランシーンの吐息が顔にかかる。

「さあ、シロン始めましょうか…。今度こそは離さない。」

すると、ランシーンが優しくシロンの頬を大きな手で摩ったかとおもうと、いきなり口元をシロンの口に近づけてくる!

「……!やめろっ!……!」
「ぐあっっ!?!」

シロンは咄嗟に手をランシーンの腹に突きつけて彼を吹き飛ばす。シロンは立ち上がったが、急な展開に驚き息を荒気ていた。

「……シロン?」
「はあっ、はあっ、いきなり何すんだ!」

ランシーンは呆然として、訳がわからないという様な表情

を顔に浮かべていた。

「何って…昔はよく、」

「昔ってなんだよッ!？」

シロンが大声をあげる。シロンは混乱からか目が泳いでいた。

「まさか、シロン、あなたは思い出していないんですか…？」

「だから、何をだよ!!!」

怒号が響いたが、すぐに闇が静けさを取り戻す。ランシ
ンはシロンに圧倒されるだけだった。しかし、

「…ふっ…はっ、クハハハハッ!」

ランシーンが突然狂った様に笑いあげる。今度はシロンが理解不能
という顔をする。

「な、何が可笑しいんだよ!？」

「ハハッ…すみません、貴方の反応が可笑しくて。」

シロンは啞然として思わず？はあ??と言ってしまった。

するとランシーンが立ち上がって服にこびりついた埃を叩いて言う。

「冗談です。」

「はあ!？」

「全く、貴方、それしか言えないんですか？」

ランシンはクスクスとシロンを笑う。シロンは当然なが

ら納得いかない様子だった。

「おい、ちゃんと説明しろよ！」

「だから、冗談だといっているでしょう。ただ、アナタをからかうのが好きなのですよ。なんたって『単純バカ』ですからね。」

ランシーンがニヤリと笑って見下したような素振りをする。
シロンの堪忍袋が爆発した。

「あ” あん？ランシーンさん、いまなんて言いましたかあ？？」

「まったく、聞こえなかったんですか？『単純安直愚直バカ』と言ったんです。はあ……。」

「増えてんじゃねえか！！」

シロンとランシーンが喧嘩を始めようとしたその時、シュウが迷惑そうにドアを開けて家から出てきた。

「あのー、話をするなら、もう少しボリューム下げてもらえませんか？いま、夜遅いんで。」

シュウは見たこともない様な引きつった笑顔でシロンたちを見上げる。更に半ばキレ気味である。

「あ…ああ。」

「判りました…。」

二頭の竜は思わず弱気な返事をしてしまった。シュウが呆れたように腰に手を当て首を横に振る。

「シュウゾウ・マツタニ…サーガを呼んできてくれませんか？そろ

そろカムバックしたいんで、」

「あー、わかつたいま呼んでくる。…あと、俺は『シュウ』って呼んでくれ！なんか余所余所しいからな。」

「でも…」

「？でも？じゃない！シュウだ、さあ、言ってみい？」

「シュ・・ウ・・。」「

「なんだ言えんじゃねえか。昔のこいつとは大違いだ。」

「ああ？なんだよ、シュウ。」

シロンは自分のこと言われていることに気づいていないようだった。そして、シュウは家の中のユウトを呼びかけたが、なんとシュウの母ヨウコまでもがついてきた。

「あら、シュウ・・。この大きい人達はシュウが以前お世話になった・・。」「

「そうだ、母さんに紹介しなきゃな。」

シュウはシロン、ランシーンの順にそれぞれ紹介をする。
ヨウコはシロンたちを舐め回すように見る。

「えっと、あなたがシロちゃんでああなたがランちゃんね、これからよろしくね。」

「「「（ランちゃん！！！？）」「」」

ランシーンがシロンの方を向くと口を両手で抑え何かを堪えているのがわかった。目には涙が溜まっていた。横にいるシュウとユウトも笑いを堪えているのがよくわかった。

「ぶっ…ふふふ、ランちゃんって！ランちゃんって

、やばい、止まんねえ…クスッ。」

「よかったなあ、ランちゃん！ふひひひっ、腹痛ええっ！」

「うるさい！黙れお前ら！」

「説得力ねえよ！ハハハハッ、やばいツボに入った、クククッ！」

ランシーンは顔を真つ赤にしてシロンたちに怒ったが、それも全て笑いの源となるだけであった。

「…それにしても、シロンは本当に何も…。」

このランシーンの眩きは誰にも聞こえなかった。先走った自分の想いだけが心に飫する。

「ククッ…、って、シロン、お前の首輪からなんか出てるぞ。」

「ん、ホントか？」

シロンの首輪の下の方から何か紐のようなものが出ている。シロンがそれをグイッと引っ張り取り出す。

取り出したものはネックレスのようなものでサファイアのような輝きを放つ宝石が付いていた。

「シロン、そんなもののいつの間に拾ったんですか？」

「いや、知らねえ…。いつの間に…。」

それは蒼く透き通った色合いをしており、見るもの全てを魅了していくほどの美しさだった。それとこれは何かただの宝石ではないような気がした。まるで何かを孕んでいる様な…。

「…おいっ！何すんだ！？」

ランシーンが突如、シロンの手にしたネックレスを分取る。ランシーンは特に何も思っていない感じだった。

「これは私が預かって調査します。いきなり現れたとなると薄気味悪いですからね。これから復活の意図が探れるかも。」

そう言われたシロンは何も言えなくなってしまった。

「じゃあ、宜しくな、ランちゃん」

「シュウ、怒りますよ？」

「ホント仲良いわね」

「そうだね。ハハッ！」

みんなが仄々と夜の空の下で笑い合う。しばらくして、ユウトが竜達をカムバックした。そして、前とは違う家の中へとみんな入って行った。

ーということがその後あったのだが…

他はユウトがシユウに秘密基地の使用許可をもらっていた、あとシユウからレジエンスに関する注意事項を教わっていたぐらいだ。

そして、ユウトが学校にいる間は此処でのんびりと過ごす。ランシーンは以前は囚われていた使命とやらに振り回されていたのが急に馬鹿らしくなった。

「ガガガガア？（ラン、どうした？）」

そして、シロンは本当に『あの頃』を思い出してないようだ。ランシーンは自分が思い出したのならシロンも思い出していると思っただけ。

「フグググガ…（何でもありませんよ…）」

何も知らないシロンが心配してくれることに心が締め付けられる。

昼の太陽が小窓の二匹のネズミを照りつける。冬だということにとても暖かい感じがしたのは気のせいだろうか？

すると、ドタドタと階段が上がってくる音が聞こえたかとおもつと、秘密基地の扉が開きユウトとマリとトミーが入ってきた。

「ここだ！」

「へえ、此処が噂の秘密基地ってやつね！埃っぽさがたまらないわ

」

初めてくるマリは歓喜する。どうやらこの古めかしさが良らしい。

「ユウト、見るんだな！昨日の写真が、」

ユウトが写真を覗くとそこに幼き頃のシユウたちが写っていた。後ろにはなんとシロンがいた…他に赤いヤツ、黒いヤツと毛むくじやらのレジエンスらしきものが増えて写っていた。

「こいつらもレジエンスか？」

「多分そうなんだな。」

「きゃー、みんな魅力的ね」シロンさんもいるわ！あとこの赤いドラゴンも結構なイケメンね…。」

マリが写真を必要以上に執着して見る。ホントに珍しいものには目がない彼女である。

すると、小窓にいたランシーンがユウトたちのそばに寄ってきた。

「ん？何よ、このねずみ。」

「可愛いんだな」

マリとトミーがそれにそれぞれの反応を見せた。ユウトが説明する。

「ランだぜ。」

「はっ？ランシーンさん？彼はもっと大きかったじゃない。」

「・・・ガ?・・・ガ・・・ガガガガア!？」

すると突然シロンが外を見て何かを懸命に言っている。

「ん? シロン、ガガガじゃわかんねえよ。」

「ガガガガガッ、グガッ!？」

「シュウ~~~~~!」

突如シロンが秘密基地の中へと弾き飛ばされ、青い鳥の様なものが突っ込んできた。

「なんだなんだ!？」

「なんか入ってきたんだな。」

「鳥かしら?」

「フガガガ!?(シロン、大丈夫ですか!?)」

「ガガガ・・・(あ、ああ・・・)」

塵芥が舞ったためその突っ込んできたモノの正体が分からないかったが、その影だけは見えた。すると、影がユウトへ飛びかかる!

「シュウ?」

「うわあああ! お前誰だ!？」

「えゝ、もう忘れちゃったの?…デートしたことも?」

「はっ!? デート!? おれそんなことあばば? あばばば」

トミーたちが鳥らしきものを宥める。そして、色々と説明したところで一段落がついた。鳥のようなものは遺憾な溜息を吐い

た。

「…へえ、てことはあなたはシュウの息子なのね。」

「ああ。お前もレジエンスか？」

ユウトが当然の疑問を打つけると、それが立ち上がって自己紹介を始めた。

「私はアンナ。種族はハーピーよ、属性はトルネードね。」

「アンナっていうのか。意外と普通の名前だな、よろしくな。」

トミーとマリもそれぞれ自己紹介をした。アンナも握手をして好意的な態度を見せた。

すると、アンナが白いねずみに気が付いて声をかける。

「あんだ、シロンだね。久しぶり。」

「ガガガ！（おう。）」

「ええ、ホントにシロンさんなの！？じゃあ、黒いほうはラン
シーンさんなのね…不思議だわ。」

「びっくりなんだな…。」

トミーとマリが驚く中、アンナはさらに続ける。

「シュウは元気かい？記憶も戻った？」

「ガガガガ、ガガガガッガガガ。（相変わらずで、何にも変わ
っちゃいねえよ。）」

「そう…良かった！」

アンナは安心し息をつく。するとマリがアンナに聞いてくる。

「ねえねえ、アンナ。この赤いドラゴンっぽいのと、この黒いのと毛むくじゃらのは誰だかわかる？」

マリは壁に貼っていた写真を外して、アンナに見せた。

「これはブレイズドラゴンね。これはグリフィン。そして、これがビクフット。」

アンナはそれぞれに指さして説明した。すると、マリがふと疑問に思ったことを言う。

「ふーん。あ、そうそう、ここにユウトのお父さんやお母さんがいるじゃない？ユウトから聞いたんだけど、ユウトって『風のサーガ』ってヤツらしいの。何か知ってる？」

「あー、俺も知りたいなそれ。」

マリが無知のあまりに直球に問いかける。窓から冷たい風が言葉の辛辣さを中和させるかの様に一陣吹いてくる。

アンナは妥協したのか話し始める。

「そう、あなたが…。サーガってのは…簡単に言うと四大レジェンズであるウィンドドラゴン、ブレイズドラゴン、グリフィン、そしてビクフットのそれぞれのパートナーってとこかな。」

「えー、つまり一緒にいられるってこと！？ユウトが羨ましいわ！」「そ、そうか？」

ユウトは若干戸惑いながらシロンを一瞥した。
すると、アンナがシロンとランシーンをみて呟く。

「あんた達、まだホントのこと言っていないみたいだね。」
「…」

シロンが困ったような顔を見せて、シュウとの約束を語る。

「ガガガ、ガガツガ（あいつがまだ話すなって。）」
「そう、シュウが…。」

すると、アンナが立ち上がって窓に向かう。

「あれ、アンナもう行っちゃうのか？」
「ああ、そろそろお暇させてもらっよ。シュウとか他のレジエンス探さなきゃね。」

アンナがさよならを言い、窓から飛び立とうとすると、ユウトが引き止める。

「待って!!」

「何？」

「アンナと父さんってどういう関係なんだ？アンナはよく父さんのこと知ってたし、父さんも何か色々知っている気がするんだけど。」

「…ユウト」

アンナの背には丁度太陽がかかってユウトにはシルエットがかかっていたように見えた。

「いずれわかるわ…。またね、ユウト。」

そう言ってアンナは飛び去ってしまった…。

ユウトはしばらく呆然していたが、目の前の黒いねずみに呼ばれ我に返る。

「フガガガ？（そういえば、リウド・スパークスはどこですか？）

「だから、ガガガじゃわかんねーよ。」

ユウトが注意する。ランシーンは一つ溜息をつくと机上にあったペンと紙切れで代弁する。

「リウドはどこかって？そういえば、どこだろう。用事あるっていつて学校前で別れたからな。マリ、トミー、何か聞いてないか？」

「知らないわ」

ユウトは、やはりという感じで腰に手をやって考えていた。すると、

「僕知ってるんだな」

「え、マジ？どこどこ？」

「ブルックリン美術館なんだな」

ブルックリン美術館とはニューヨーク市で二番目に大きな美術館だ。年間50万人もの人が訪れ、古代エジプト、古典・古代中近東美術、アフリカ美術、太平洋沿岸やアメリカ、アジア美術、装飾芸術、衣装や織物などが常設展示されている。

トミーがこのことを知っていたのは、リュドの家に居候中の身なので恐らくリュド本人に聞かされていたのだろう。

「ふん、だってよラン。」

ユウトは聞いたからといって、興味を持つ訳もなく発信源であるランに受け流す。

「…。」

「…まあ、リュドがいないから何もできないって訳じゃないし、とりあえず掃除しましょ。」

ユウトたちは特にやるコトも無かったのでマリの提案に乗じた。

「フガガガガ（…火の気が近いですね、）」

日が傾いたせいか日向の場所が変わっている。太陽は丁度掃除道具を取り出す子ども達を照らしていた。ランシーンは、この平穏が何時まで続くのだろうかと様々な思いを錯綜させていた。

「フガガガ（風はまだ吹いている、きっと…）」

「…昔ってなんだよ!？」

ふと、夢のことを思い出しそうになる。あれは、私がみんなを悪く思っているという深層心理が働いたのだろうか？

ランシーンはそれを振払うかの様に子どもの戯れに紛れていった。

Ep. 4―?

一方、此処はブルックリン美術館。先程も言ったが、ニューヨーク市で二番目に大きな美術館だ。いまの期間ではクロード・モネの名画展が行われてる。印象派の先駆けとして有名だ。

そんな美術館内にディーノとリュドがいた。

「うわっ、これすごーい！色遣いが微細だし、壮大だね！」

「これは印象派が広まったきっかけの絵だね。それで・・・」

ディーノがつらつらと蘊蓄を並べる。リュドは一言も逃さぬように耳を熱心に傾ける。

「へえ！そうなんだ。あと、これも・・・」

「リュド。」

突然、別の絵に駆け寄るリュドを止めるディーノ。すると、ディーノは膝について自分の息子の肩に手を置いて言う。

「ごめんよ、リュド。」

「父さんいきなりどうしたの？」

唐突な問いに惑うリュド。ディーノは続ける。

「いつもあまり一緒に居られなくて、こんな時しかこういう風でできないけど」

「...。」

リュドは父を呆然と見ていた。

ディーノは仕事の都合のせいでリュドと面会する時間が限られてしまっている。彼は昔の自分と同じ道を我が息子に歩んでほしくないのだ。

行き交う人の中で二人の親子は見つめ合う。すると、リュドが口角をあげて、ディーノに言う。

「何言ってんの父さん？」

「えっ？」

「僕はいま幸せだよ。だって、父さんが居るんだよ。僕がお母さんいないから寂しい思いしてるとでも思ったの？」

リュドは上目遣いにディーノを見る。

「確かにお母さんがいないことは他人から見たら不憫なんだろうけど、僕はそう思わないよ。だって、父さんが、みんなが居るんだから。」

「リュド…。」

ディーノはリュドをギュッと抱き締める。ディーノは息子の温もりが手に伝わってきて涙が零れる。この子は昔の自分とは違ってちゃんと進むべき道を理解している、そう心に想う。

「父さん、苦しいよ。それにあんまり人前でさ…。」

「あ、ごめん…。」

リュドが、早く行こう、とディーノの手を引っ張る。ディ

ーノがリュドに引かれ、前にのめり出した…その時！！

ズガガガガアアアアアッ！！

「！！！？」

突如、爆破音が館内に響き渡る。後ろからの突風により前に倒れてしまったディーノが驚き後ろを振り返ると、…なんと瓦礫の山だけが積もっていた。

ディーノは少し混乱していたが、状況を判断することはできた。もし、リュドに手を引かれていなかったら…そう思うと寒気がした。

「父さん、大丈夫！？」

幸いリュドに怪我はなく、ピンピンしている。それにしてもいきなりなんだっていうんだ…。

「…父さん、後ろ…。」

ディーノがリュドの指差す方向を向くと先程の瓦礫の隙間から炎がボウボウと燃え上がっている。それは、数々の名画を糧にして強大さを増してきた。

ズガガガガアアアアアッ！！

「爆発だ！テロか！？」

「キヤアアアアアア！！！」

次々と起こる爆発に鑑賞客が悲鳴をあげて逃げ惑う。先程まで平穏な雰囲気は消え失せ、恐怖と戦慄だけが館内に走る。一体何が…。

「って考えている場合じゃない！リュド、逃げるぞ！！」
「う、うん」

爆発が美術館の出入り口付近で起こってしまい、崩れた瓦礫が堂々と外界への道を閉ざす。

仕方なくディーノはリュドの手を繋ぎ、爆音が響く回廊を疾走して非常出口を探そうとする。

「くっ！出口はどこだ！？」

「父さん…！」

リュドが必死にディーノにしがみつく。大丈夫、きっと助か

ズガガガガアアアアアアッ！！

「！！！！？」

目の前で爆発が起こり、爆風で後ろに吹き飛ばされる二人。ディーノは咄嗟にリュドを腕に匿って自身を地面に強打する。

「ぐあっ！」

「父さん！！！」

「リュド…大丈夫かい？」

「うん、僕は大丈夫…でも父さんが、」

デイーノはリュドを立たせて砂埃を払う。周りの様子を見ると、どうやら炎に囲まれ逃げ場がないようだ。

「くそっ！囲まれた・・・！」

リュドが恐怖からデイーノにしがみつく。しかし、周りの炎は残酷にも猛然と迫ってくる。

「助けて…」

（サーガ…）

「えっ、誰…？」

リュドが手を離し猛々しく燃える炎に自ら向かって行く。

「リュド、どこいくんだ!？」

デイーノが止めようとするが、リュドは歩みを止めようとする気配は微塵も感じられない。

(サーガ…サーガ…)

「君は…なんで僕を…」

「この声って……まさか!」

デイーノにも聞こえたこの声には聞き覚えがあった。

その時、リュドの頭上から爆破で脆くなった天井が堕ちてきた!それは確実にスピードを上げて潰しにかかってくる。

「リュド……上だ……!」

「えっ？」

一瞬だった。

上から降ってきた岩は轟音をあげ砕け散る。周りは塵埃に包まれて何も見えなくなってしまったが、暫くすると視界が晴れて

きた。

リユドを探す。いない。

先程、そこにいた息子がいない。

さっきまで笑っていた息子がいない。

たった一人の息子がいない。いない。いない。

しかし、代わりに今まで自分の愛でていたものがあつたところには……………

――灰色で無機質な瓦礫の団塊だけだった。

「え、嘘だろ、なんで、リユド、が？」

ディーノは呆然とする。目からはいつの間にか何かが出ていた。

そして、嗚咽に苦悶しながら声を振り絞る。

「…………リユ、…………リユド…………リユドオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

すると、彼の悲痛な叫びに呼応する様に息子が埋もれていくはずの瓦礫から紅蓮の炎が無機質な凶器を突き破って柱のように伸びていく。そして、柱はある姿へと変ぼうを遂げる。

「…………え。」

だんだんと姿を顕著にしていく。赤い皮膚と隆々な筋肉を露見にしてい

「・・・まさか、本当に。」

そして、黒いジャケット、背中には愛情や情熱の象徴とも思える紅き炎の翼、優しさに満ちた緋色の目……。そして、全貌が明らかになる。

「…ふう、もうこの地に呼び出されたのか。」

「え、グリードー…？」

そこにいるのは確かにあの頃と何ら変わらない薔薇が好きなヤツだった。みんなに好かれており優しいヤツだった。

赤き竜が声に反応し、ディーノへと振り返る。

「…………ディーノか？随分でっかくなっただんな。」

「グリードー！」

ディーノが周りの状況になど目もくれずアツいやつに走って行く。やっと会えた、やっと会えた、ただそれだけを心に抱いて

「おい、ディーノ、落ち着け。」

「ごめん、つい嬉しくて…」

再会に喜びを認める。しかし、ディーノがあることに気が付き我に返る。

「…そうだ！リュドは！？この瓦礫に、」

「こいつか？」

グリードの逞しい腕の中からひょこつと緋い髪の頭が出てきた。リュドである。

「リュドー！」

グリードがリュドをそつと手渡す。顔は煤で汚れていて、怪我は軽い擦り傷程度だった。

渡された息子はずっしりと重かった。ディーノは急に感慨深くなる。

ドゴオオオオン！！

再び爆音が響く。再会や無事を喜ぶ間髪もくれないようだ。しかし、ここは四方八方囲まれてしまっているため出ることは困難だ。するとグリードが突然ディーノたちを抱き上げる。

「グリードー！？」

「天井の穴から逃げるぞ！」

先程崩れた天井から逃げ出そうというらしい。確かに、そこからなら安全に出れる。しかし、ディーノには後一つ心配があった。

「でも、人目に付いてしまうかも……」

「恐らくこの火災の煙で簀隠れできるはずだ！ディーノ、お前ん家向かうぞ。」

「わかった。僕の家は場所変わってないよ！」

「おし、行くぜ！」

グリードローが天井、そして空へと向かう。情熱に満ちた炎が空を切って舞い上がり、目的地へと向かって行った。

「…みーつけた。やっぱり此処にいたのね、とりあえず私の任務はこれで終わりね。次が愉しみだわ…フフフ」

そう、そこに刺客がいたのも気が付かずに……

一方……

「ガッ!!」

「フグッ!!」

此処は秘密基地。ユウトたちは丁度、掃除を終えたところだった。

「ん、OKね！埃は微塵も残ってないわ！」

マリが机に指をやり、埃の有無を確かめる。どうやらもう残っていないようだ。ユウトとトミーは、ふうと、溜息をつけてその場にしゃがみ込んだ。

「やっと終わった…。マリってこんな綺麗好きだったけ？」

「そうみたいなんだ…。」

「何言ってるのよ！私以上に綺麗好きな人は殆どいないわよ！」

恐らく？殆ど？というのはマリなりに謙譲したのだろう。

ホントに彼女の破天荒振りにはいつもヒヤヒヤさせられる。

すると、しゃがみ込むユウトにシロンとランシーンが何やら言いたげにしている。当然ユウトには何を言ってるのか解らないが。

「だっからー、ガガガじゃわかんねえって。」

「ガガッガガガ!!」

すると、トミーが何かを察したのかユウトに教唆する。

「多分、シロンは『リボーン』しろって言ってるんだな。」

「あゝ、そうか。まあ、そうすれば何て言ってるか判るしな。よし、シロン、カムバック！リボーン！」

タリスポッドに白いネズミが吸い込まれ、忽ちに竜の姿へと変貌を遂げる。同様にランシーンもやろうとしたがシロンに止められる。何でも明るいうちは目立つかららしい。

「昨日寝る前に父さんに言われたけど、やっぱり目立つちゃダメなの？」

「まあ、俺たちレジエンスは人間にとってただの怪物にしか見えねえからな。だから、そんな俺たちが平気でこの辺をのさばっていたら大変だろ？」

ユウトは成る程という感じで頷く。シロンが続ける。

「俺らが現れた時にお前らが驚かなかったのが不思議なくらいだ。」
「まあ、驚いたって言っちゃ、驚いたけどよ、まあ、父さん達が近くにいたからそんなに不安じゃなかったぜ」あと・・・そんなに目の前のことウダウダ言っても別に何か変わる訳じゃないじゃん」

シロンはシュウとはどこか違うように思えたが、こういうヤツもいると割り切って受け流し、話を戻した。

「まあ、問題はそうじゃなくてだな…。グリードローが地球にまた甦ったんだ。」

「グリードロー？」

シロンが言おうとしたところをランシーンが口を割る。シロンは少し訝しんだが、そのまま黙り込んだ。ランシーンは集合写真を指差す。

「この赤いヤツが…。で、何処にいるんだ？」

「それはわからねえ。だが、ディーノのそこ行けば判るんじゃないかと思つてな。」

ユウトは何故そうなるのか聞いてみたところ、ディーノは前の火のサーガという話をしてくれた。マリはいつの間にか常備しているメモにシロンの言動を書き留めている。

「じゃあいくか。」

ユウトを先頭にシロンに乗っていく。シロンは全員乗り込んだのを確認し、澄みわたる青空へと飛び立つ。ユウトは手を首から離し、両腕を風のように広げて向かってくる風を全身に受ける。

「あゝ、気持ちいいゝゝ」

「いい風が吹いてるんだな。」

「キヤーキヤー！ウィンドドラゴンに乗ってるーゝ」

みんなそれぞれの感情を風に晒す。ふと見下ろすと、仕事に勤しむ若者や雑談を交わす学生が忙しなく歩き回っている。

「ん、なんだあの煙？」

ユウトが指差す方向に黒煙が龍のように高く空へ昇っている。何か火事でもあったのだろうか？ユウトは昨日のニュースを思い出す。

「コブルヒル大火災の日なのに火事かしら？なんか示唆的ね。」

「小説とかドラマの見過ぎだろ？なあ、トミー？」

ユウトがトミーを見ると、さっきまでの温厚な笑みは消え、落ち着きがなく不安に満ちた表情を浮かべている。顔からは冷や汗が出ており青ざめていた。

「お、おい。トミー、大丈夫か…？」

「…大変なんだな！」

「えっ？」

すると、シロンが火災が起こっている所が美術館であることに気付く。

「おい！まさか、ブルックリン美術館か！？」

トミーはコクンと首を縦に振ると素早く腕時計でリュドの家に連絡を取る。

「早く繋がってなんだな…！」

プツッと音がしたかと思うと、野太く高い声が聞こえる。

「はい、スパークスです。」

「あっ！リユドのおばあちゃん、トミーなんだな！」

トミーは慌てていたが、片言になりながらもリユドの安否を確認した。ユウトが横で心配そうに見守る。

「えっ！それは本当なのかな！？…うん、わかったんだな…。」

トミーが通話を終えたのか、一回深呼吸してユウトたちに内容を伝える。

「……………無事だつて♪」

ユウトたちに安堵が訪れる。トミーは少し涙ぐましい顔をしながら、シロンにもう一度その旨を伝えた。それを聞いたシロンはスピードアップの注意をユウトたちにして？まだ？青い風を突き抜け、スパークス家へと向かった。

Ep. 4―?

ガチャッと部屋のドアが音をたてたかと思うとそこに入ってくる人影が見えた。

「ごめんよ、トミーからの電話だった。あつ、トミーっていうのはマツクの息子さんのことね。今ここに来るってさ、」

「……そうか。」

暗くカーテンを閉めた子供部屋。そこにはまるで永い眠りについたような息子を見つめるディーノと、これから運命を共にするであろうパートナーを見つめる火竜グリードーがいた。

グリードーは横で壁に寄りかかっており、ディーノは椅子に座っている。

「リュドを助けてくれてありがとう。でも、まさかリュドがサーガとはね……。」

「ああ……」

リュドの手には赤いタリスポッドが握られていた。先程は慌てていたのに、このことに気付かなかった。

グリードーは、あの時にディーノが使っていたこの子供部屋をぐるっと見渡す。厳密に言えば違うが25年前と何ら変わらない。それを喜ぶべきなのかどうかグリードーは迷っているようだった。

「変わらねえな。」

「うん。昔、僕が使ってた部屋だよ、憶えてるかな？」

どうやらディーノも同じコトを考えていたらしい。カーテン付のダブルのベッド、草臥れた桐の勉強机、少し傷がついた白金で作られたクローゼットやキャビネット。前と位置も変わっていなかった。

「すごいよね、20年以上も使ってるんだよ。リュドには買い替えてやろうって言ったんだけど、どうしてもこれが良いって言うからそのままなんだ。何故だかは知らないけど、」

ディーノはそう言うとグリードーに微笑して、そして再びリュドに視線を移す。すると、グリードーが徐に足を組んで話し出す。

「こいつはディーノ…お前のことが好きなんだろうな。大きな支えになってあげていられている。」

「そうかな…？そうだと嬉しい。父親らしいこととしてやってないけどね、」

グリードーは足を組み直す。昼過ぎだというのにカーテンのお陰で光がたくさん入ってくることはない。グリードーの性に合わないせいか落ち着きがなく、足を何度も組み直していた。

「グリードー、どうして戻ってきたの？」

「…さあな、俺の推測でないことを祈りたい。ディーノ、お前はどうしてんだ？」

「僕は今、ダックダックトイズの社長してるよ。DWCの援助もあって、それに次ぐシェア率になったよ。まあ、DWCには遠く及ばないけどね、」

ダックダックトイズ、通称DDT。創設者は、ディーノの父、そしてリュドの祖父である。昔は勢力が弱かったもののいまで

はそれなりの勢いがある玩具会社だ。

そんなディーノは淡々と話し続ける。一旦、話し終えたかと思うと再び口を開き始めた。

「君にもリユドのこといつか話さなきゃね。」
「……？」

ディーノが心苦しそうに言う。
グリードローはそれを察したのか、あえて聞こえないふりをした。

すると、インターホンの音がする。メイドがバタバタと音を立てて玄関へと向かっていく。そして、安全を確認したのかドアが開く音がした。行きは一つだった足音が二つになって帰ってきて、この部屋の前で止まる。そして、子供部屋のドアが光の入射を許すのと同時に開いた。

「おじゃましまーす！」
「ただいまなんだな」
「おじゃまし……ってなんか暗いわね。」
「よう。」

ドアからは三人の子供達の顔と一匹の竜の顔が覗く。どうやらさっきのチャイムはユウトたちのものだったらしい。

「やあ、みんな。」
「シロン……。」

ディーノがみんなを歓迎する。グリードローはシロンと目が合ったが特に目立つ反応はしなかった。

「あら、リユド寝てるわね。まさか…」

「ああ、君たちも来る途中で見たと思うけど、さっきの爆発でね。掠り傷程度だから心配しなくて大丈夫だよ。」

マリがそつと胸を撫で下ろす。ユウトたちもほっとしたようだった。

「よお、グリードー、久しぶりだな。」

「ふんっ、たった25年じゃねえか。」

風と火も互いに邂逅の挨拶をする。デイーノは限がいいと判断したのか、別室に移ろうと提案する。確かに、リユドを考慮するとそれが一番だと誰しもが思った。

デイーノはみんなに部屋場所を教える。そしてデイーノはリユドからだけいていた羽毛布団を掛け直し、部屋を後にした。暗転。

・・・別室に移ったデイーノたち、ここはあの再会の日に子供達が居座っていた場所だ。

メイドに出された紅茶を啜るユウト。全部飲みきったかと思うと、突然手を前に出して話します。

「なあ、シロンやランもそうだけどさ、グリードー…だっけ？レジエンスって一体なんだ？」

「……………」

シロンとグリードーは特に返事をする事はなかった。というより、無視を決め込んでいたと言ったほうが表現として正しい。結局、会話のタイミングなど消え去ってしまいユウトのかけた言葉が報いと

なつて帰つてくることは無かつた。ユウトは、少ししかめっ面になつたが氣を取り直して次の行動に移る。

「テレビ観ようぜ、テレビ！」

ユウトがリモコンを取り、薄型液晶で42インチはあるであろうテレビの電源を付ける。テレビからは焦燥感に満ちたレポーターの聲が響いていた。

『速報です！ただいまこのブルックリン美術館で爆発が起こりました。ただいま消防隊が懸命の消火活動にあたっています！現在、原因は究明中で事件、事故の両面で調査を進めているとのことです。このブルックリン美術館はニューヨークで…』

リュドが巻き込まれた爆発のニュースが流れている。さつきは上から眺めていただけだったのでモクモクと昇る黒煙しか見えなかつたが、ニュースで流れている中継映像は明らかな悲惨さを物語っていた。国会議事堂のような威厳を携えていた美術館は爆発のお陰であちこちが崩れて、威厳などは瓦礫と一緒に落ちてしまったようだ。火災はいまもお燃え続けており消火と並行して救命活動も行われていた。

「リュドやリュドの父ちゃんさ、よく助かつたよな。」

「…うん。でも、もしグリードーがいなかつたらそうだったかは分からないね。」

ディーノがグリードーを一瞥する。もし、彼の出現が遅れていたらリュドの絶命は絶対だっただろう。その時は、ディーノも・・・だったかもしれない。

するとランシーンが何かいっている。

「風のサーガ、こいつがリボーンしろって。」

声が聞こえてないのかユウトはぼかーんとしている。シロ
ンは溜息を漏らし、音量を上げてもう一度呼ぶ。

「おい！風のサーガ！」

「ユウト、シロンが呼んでるんだな。」

ユウトは何だという感じにシロンの方向へ振り向く。

「ん？何だシロン？」

「ランがりボーンしろだよ。」

ユウトはシロンに呼ばれたことなど気にしない様子でラン
シーンをリボーンした。

「ランシーン…！お前が何故…。」

「さつきから居ましたよ。それに此処に居ては何か不都合でも有る
んですか、グリードー？」

デイーノは二人の間に走る火花に気付き、彼等を諫め始め
る。そして、グリードーに大まかな説明をした。

「…なんだ、そういうことか。デイーノが言うなら仕方ねえな。」
「ふっ…分かってもらい光栄です。」

ランシーンは顔にかかった髪をを払う。ランシーンは挑発的だった
が怒っている訳では無かったように見えた。

「キヤー？3匹もレジエンスが！」

マリがはしゃぎまくる。グリードーの上に乗っかり、鼻先にある角を触っている。

「うわゝ、痛そー　グリードーさん、熱くないんですか！？」

「アツイぜ。」

「マリ、一人で何やってんだ！俺も混ぜろ！」

「僕もなんだなゝ」

戯れ合う子供たち。デイーノは昔の自分を思い出した。あの時はグリードーぐらいしか理解りあえるヤツがいなかった。その時、グリードーと和気藹々する彼等に嫉妬する自分がいたっけ…。昔のことが走馬灯のように甦り懐旧心に襲われる。リユドにはちゃんとグリードーだけでなく皆と理解し合える人間になって欲しい、デイーノはこの光景からそんなことが思い起こされた。

「全く、グリードーは昔から他人に好かれるタイプですね…。」

「ん？ラン、お前、昔のこいつ知ってるのか？」

「……知るものにも、貴方が一番……。……！！」

「んあ？ラン、どうした？」

「いや、な、何でもありません…。」

動揺するランシーンだが、すぐに心を鎮め、呼吸を整えた。グリードーがこのやり取りを見て不思議に感じる。

「シロン…お前、『あの頃』のこと思い出してないのか？」

「あの頃…？」

「グリードー…！」

ランシーンが慌ててグリードローを止めようとするが、彼はすぐ返事をした。

「なんでもない。気にするな……。」

グリードローも昨夜のランシーンと同様の切り返しをする。しかし、聞かれた本人は気になってしまい仕方ない。

「おい！ランもだが、一体、『あの頃』って……。」

すると、突然甲高い音のインターホンがみんなの耳につく。廊下から足音がスタスタと聞こえてくる。足音はさっきと同じようにこの部屋で前で止み、部屋の扉を開ける。

「ただいまなんだな……。」

「お父さん、お帰りなんだな。」

「やあ、マック……。」

部屋に入ってきたのはマックだった。ファーがついた橙のコートを着て、クリーム色のマフラーを首に巻き付けていた。

「あ、グリードローがいるんだな……！」

「よお。」

グリードローとマックは軽く挨拶を交わしあう。

「マック、何処行つてたんだい？」

「病院に行つてたんだな。」

「具合でも悪いの？」

デイーノが当然の質問をする。しかし、マックは不自然な
応答をする。

「た、たぶん風邪なんだな。」

「たぶんって……。」

デイーノが不思議に感じるのは必然だ。マックは病院に行
ったのだから、病状を知らされているはずである。そうデイーノが
思った直後、トミーが少し周章気味に説明する。

「お、お父さんはちよつと風邪気味で少し熱があるんだな……。」

デイーノはトミーが余りにも血相を変えて言ったので、少し狼狽し
ながらも肯き、話題を決着させた。

すると、鳩時計が突然鳴り出す。時計はジャスト5時を示
していた。

「やつべ！そろそろ門限だ！」

ユウトが今の時刻に気付く。彼等もあくまでも小学生であ
るので門限という子ども特有の制限が義務付けられているのは当た
り前である。子どもたちもまだ遊び足りなさそうに無常に時を刻む
時計を訝しく睨む。

「はあ、もうこんな時間ね。ユウト、リュドの迷惑にもならない
よう早く帰りましょう。」

そうだ、リュドが寝てたんだっけ。ふと、リュドのことを
マリの言葉で思い出し考えを改めるユウト。

「そうだな…じゃあそろそろ帰るか」

そう言うのと、ディーノが帰りの支度を進んで手伝ってくれた。いつもならシウたちに連絡を取ってくれたり、宿泊を勧められるが、今回は特に何も言うことは無かった。やはり一人息子が心配なのだろう。本音は子どもと話相手ではなく息子の看病に徹したかった筈だ。

帰る準備が整い、最後にお土産として赤い袋に包まれたメリッサ特製のクッキーをユウトとマリに手渡す。

横を見ると、シロンがグリードーと何か話している。

「今から、一杯やらねえか？」

「…ああ、いいぜ。」

ユウトがなにかを察したのか気を遣った台詞を言う。

「おめえら、別に先行っていいぞ！」

「…そうか、じゃあそうさせてもらうぜ、風のサーガ。」

あれえ…、素直だな。少し躊躇するかと思ったユウトは呆気にとられていた。

「ランも行くだろ？」

「いいえ、私はパスで…。」

「ノリ悪いじゃねえか。」

ランシーンがシロンの誘いを断る。グリードーが意外そうな顔をした。

「お前が断るとは意外だな。」

「私も行きたいのはやまやまですが、復活の真意を調べなくてはね……心当たりがあるんです。とりあえず、DWCに行こうかと思えます。」

ランシーンは腕を組んでシロンを一瞥する。シロンはなんだという感じにランシーンに振り向く。シロンは全くランシーンの気持ちなど知らんぷりな様子ですぐに飲みに行きたいと気もそぞろのようだった。彼にもいずれ過去を知る時がくる、それは、ずっとあとの物語である訳で……。

「じゃあ、行こうぜ、グリードー。じゃあな、風のサーガ。」

「おう………って俺はユウトだ!」

「わーってるから、じゃあな、風のサーガ。」

アイツ……ワザとだろ……。そう、思ったのも束の間、シロンとグリードーは足早に飛んで行った。残ったのはランシーンとユウトとマリだ。

「ユウト、気にしないでくださいね。あの子はただの照れ屋ですから。」

「まあ、判ってるけどよ。」

ユウトは口をへの字に曲げ不服を露にする。ランシーンはクスリとユウトに笑いかけると、マリの方に向き直る。

「メアリー、DWCに一緒に行きますか?」

「あら、デートのお誘い?」

「ええ、」

マリがランシーンのノリのよさが意外だったのか笑い出す。ランシーンはちよつと照れ臭そうにした。元々、キャラに合わないで彼自身もやるのは少し抵抗があつたのも事実だ。

「ごめんごめん、嘘よ！あなた面白いわね。」

――お前、面白いな！

「……！と、とりあえず早く行きましょう。」

「ユウト、じゃあね！」

マリがランシーンに身軽に飛び乗る。マリはまるでお伽噺にでも出てくるような女騎士に見えた。金髪が風に靡き、夕日が後光の役割を果たしているようで……そう、まるでジャンヌ・ダルクのような。

そして、マリとランシーンは合図を交わすと飛び立って行った。

「ふう……って後は俺だけかあ。じゃあ、俺も行くね、リュドの父ちゃん」とミーの父ちゃん。」

「一人で大丈夫かい？」

「うん、まだ明るいし。」

ユウトは挨拶をすると、ふらりと帰路を歩み出す。

冬の寒さは更に厳しさを増しており、外を歩くのも億劫なほどだ。それにしても、ランに乗っていたマリは何というかカッコよかったなあ、まるでホントのパートナー同士みたい……って、何だよ！

俺、妬いてんのか！？最初に？興味無い？とか言っちゃったし、あとサーガってなんだ？レジェンズってなんだ…？

……って、そんなこと分かる訳無いよな。知ろうとしてないんだから。

――いずれ分かるわ…。

ふと、アンナの言葉が思い出される。いずれ…か、本当に分かるのだろうか……。

いや、駄目だ、自分で知ろうとしなきゃいけない…！ユウトは両頬をパンツと手で叩く。

「ふーん、此処ね…次のサーガのいる街ニューヨークってというのは…」

そう、例え…

「ユウトが羨ましいわー！ランシーンさんみたいなパートナーがいる。私もサーガになれるかしら…。」

「…さあ、それは私たちが決めることではないのでねさっぱりです。」

「

その先が…

「マリ…サーガ。僕が、まもる。」

深い闇だとしても…

「ふっ…炎が甦った。次は水、そして土…。お前の持つ禁断の力を使えばこんなコトも楽々出来る…クツクツクツ、それも我が忠実な部下のお陰だ、しかも人間だぞ。ああ、実に欲深い生き物だ！ああ、なんと醜い…そして憎らしい…我らレジエンスを翻弄する醜い奴ら…。」

「ふんっ、あなたほどじゃないわ！野望に翻弄されて哀れなのは貴方よ！」

「なんとも言う方がいい。そうだ、お前にも肉体をいずれあげよう！あのバイコーンも私のお陰で復活したのだから。」

「…！ふんっ、好きにきなさい…。」

そして、今はまだ誰もこの物語の行く末を知らなかった…。

.
. .
. .
. .
. .
t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

Ep.5 君をずっと見てるから He only wants to b

あなたは何か刺激が欲しいですか？

今の生活に飽きていませんか？

『変化』を求めていますか？

?? ? 軽快なジャズが、心に安寧をもたらす。

?? ? 貴方に生きるための心の糧を提供します。

?? ? 今宵はBARで夜の一時を過ごしませんか？

「ふんふんふん」

?? ? 鼻歌混じりにグラスを磨き続けるのはこの『ワニの穴』のマスターことMr.エドである。今日も此処に来る物好きな客を仕事をしながら待ち続けている。

?? ? カウンターは顔が映るほどに綺麗で、周りの装飾も雰囲気壊さないようにきちんと配慮された色彩と配置になっている。

?? ? ここの一番の特徴は、やはり今の時世から置いていかれたようなシックな空気である。傍^{はた}から見れば異端な存在である事は間違いない。

?? ? そんなバーを営んでいるエドはバーテンダー歴25年目。

?? ? そうなったきっかけはサラリーマン時代に着ていたスーツの胸ポケットに入っていた一枚の紙片だ。

『店に帰ってくるまで頼むぜ。by D.C.』

?? ? そして、その時は特に疑問も持たずにこの紙片に誘われ

てこのバーの前に来ていた。中に入ると、見覚えのある様な無い様なそんな普通のバーであつたが、一つ不自然なことがあつた。

「それは、何故か新調されたバーテンダーの制服がカウントーのど真ん中に置いてあつたことと電灯が点いていたことだ。」

「制服を手にとるとなんと服のサイズは自分のそれにピッタリだつた。まるで、自分のことを知っている人物に作為的に行動させられている…そんな気さえた。」

「しかし、当時、失業中の身であつたり、特にやることも無かつた。厳密に言えば、前は何かあつた様な気がするが今はそれが忽然と消えてしまつていた、という方が正しい。」

「そして、このような複雑な事情もあつたので、こうしてバーテンダーの仕事を始めて今に至ると言つ訳だ。」

「しかし、最近、変わったことがあつた。つい昨日のことだ。」

「突然、25年前の空白の時間が戻つて来たのだ。」

「レジエンスのことや皆と過ごした思い出が一気に頭の中へと甦つてきたのだ。勿論、相棒であるファイアジャイアントのこともだ。そして、今まで謎だつた紙片についても理解することができた。『by D.C.』と言うのは、恐らく此処の本来のマスターであるあの方だろう。」

「それにしてもいきなりレジエンスのことを…。ファイヤードは一体何処に…。」

「きっと俺たちの様に行き倒れてるんだぜ…。」

「リーオンさん…。」

「この赤い髪とストライプのバンダナを額に巻いたライオンの様な風貌をしているのはマンティコアのリーオンだ。」

「彼は、シロンの復活したのと同時に共にこの地球に甦つたらしい。しかし、そこは見知らぬ所であつたらしく途方も無く彷徨

徨い続け、やつとのことで此処のバーに辿り着いたという。

「……？ その時は空腹や体力の限界といった感じで襲れていた。他のG・W・ニコルのメンバーとはまだ再会していないと言うが…。」

「それにしてもエドさんがマスターしてるとはね。まあ、俺たちあまり面識無かったし。てか、これうまつ！」

「そうですね。リーオンさんが此処にいるということはあの方もいるのでしょうか？あつ、おかわり要りますか？」

「……？ リーオンはエドに出されたパエリアをむしゃむしゃと貪り食っている。既に5杯目で相当腹を空かせていたようだ。」

「ダンディか？まあ、店を任されているアンタなら気になるのは仕方ないな。俺が復活した原因はシロンの出現だし、ストームの四大レジェンズが復活すればダンディも現れるんじゃないか？」

「はあ…。」

「……？ あやふやな思考が頭の中を巡っていく。しかし、考えても無駄な事は明白な事実であった。今は目の前にいるレジェンズがダンディに復活の可能性を示唆していることが唯一の希望であり、期待であった。」

「リーオンさんも早くメンバーに会えるといいですね。」

「そうだな、せめてグリたんぐらいは…。」

「……？ すると突然、入り口のドアがバタンツと開く。エドはリーオンがレジェンズで在るので一般人が来たかと思いビビりまくってしまった。」

「あつ、すみません。今日は貸し切…。」

「んっ？誰…」

「此処も変わってねえな。んっ、アンタ……それに…」

「リーオン！！」

?? ? 突然の再開。

?? ? 予期してなかったことに皆驚きを隠せなかった。リーオンは思わず震える。

「おい、リーオンどうした！？震えてんぞ！」

「ぐ……ぐ……ぐ……」

グリたあああああああああつああん！！！！！！

リーオンが大声をあげグリードーに飛び付いて来る。しかも号泣して…。

「お、おいっ、リーオン！いきなりなんだ！？」

「うわああああん！グリたん、会いたかったよおおおおお！！」

「その呼び方すんじゃないやねえって何回言ったらわかんんだよ！」

?? ? へばり付いてきたリーオンの頭を殴り飛ばす。リーオンは謔言のようにグリードーの名を呼びながら目を回してしまった。

「……？ グリードーは一瞬でもこんなリーオンを心配したのが恥ずかしくなった。」

「はあ…、なんでコイツはこんなにも変わんねんだ…？」

「ホントにお前達仲いいよな。」

「……？ シロンがボソリと呟く。グリードーはシロンをジロリと睨んだが、特に否定を含んだ言葉は言わなかった。」

「……？ それにしても、リーオンがいたことにも驚いたがシロンはもう一つ気になることがあった。」

「てか、なんでアンタが此处にいるんだ？」

「いや、私は…」

「……？ エドは若干怯えている様だった。いくらレジエンズへの理解者であっても。」

「……？ すると、グリードーに鉄拳をくらったリーオンがムクつと起き上がり説明を始めた。」

「おいおい、そんなコワイ目つきでマスターを見んなよ。俺っちが説明してやつから。」

「……。（お前の方が目怖いけどな…。）」

「……？ シロンたちはとりあえず席に着き、リーオンから詳しい事情を聞いた。聞き終わると、シロンは成る程と言いい相槌をうつ。」

「そういうことが…、確かに俺の復活がリーオンの復活の原因になってるならその考えは合ってるかもな。」

シロンは肘をついて一つだけ溜息をする。確かにレジエンズの復活

は四大レジエンスが大きく関わっているのかもしれない…。シロンは先程出されたスウィートⅡダンディを啜る。

「まあ、結局どうなんだろうな……。……って、これ美味えな…ダンディが作ったのと変わんねえぜ！」

「はい、レシピを見ながら一生懸命練習しました。気に召されて光栄です。」

「？　？　スウィートⅡダンディをもう一杯頼むシロン。どうやらシロンの口に合ったようだ。」

「？　？　しかし、美味しそうに飲むシロンとは裏腹にグリードーは一回口を付けただけで黙ってスウィートⅡダンディに映る自分の顔を見つめていた。」

「おい、グリードー…飲まねえのか？」

「シロン、話はなんだ？」

「？　？　シロンはグクリと少したじろぐ。肘がカウンターに当たりグラスの中身が揺れる。」

「……昔の俺ってなんだ？」

「なんだ、またそのことか…」

「『また』ってなんだよ！痛てっ！？」

シロンは興奮の余りカウンターをバンツと叩いて立ち上がるうとしたが、今度は頭を天井にぶつける。グリードーは特に気にする事なく質問に答え始める。

「俺は何も知らねえよ。」

「チッ…お前もランと同じかよ。」

?? ? 店内はシロンたちを他所に相変わらず落ち着きを保っている。シロンの沸き上がる激昂もこの雰囲気のお陰で鎮められているようなものだ。キャンドルはチラチラと灯りを煌めかせてシロンたちを照らす。

?? ? すると、グリードローは暫しの沈黙の後、半ば諦めて言い始めた。

「じゃあ、ランシーンに訊いた方がいいんじゃないか？俺より訊きやすいだろう？お前ら仲良いんだからよ。」

「なっ…何でだよ！さっきも言ったが、あいつには何故だか知らんが断られてるんだ。そんなに追及できねえよ…。」

「……。」

?? ? すると、グリードローが徐に立ち上がって入り口に向かう。どうやら帰る様子である。

「おい！まだ質問に答えてねえぞ！逃げんのか！？」

「違いし、知らねえって言ってるんだろ？あ”あ？」

?? ? グリードローはしつこいシロンの言及に思わず怒りを含めて答えてしまい、悪党のような目つきでシロンを睨む。

?? ? しかし、シロンは狼狽えることなく挑発に乗りファイティングポーズをとり始めた。エドは店の中でおっぱじめると思っている。

「おお、やんのか？」

「……はあ、まったく。」

?? ? グリードローは今日で何回溜息を付いただろう数えていた。

シロンの気さくな性格が仇となって出ている。というか、遠慮が無い
というか何というか…

「もし、俺が知っていたとしても多分話さねえ。ランシーンに訊け。」

「何？ やっぱり、お前…」

「それじゃ、俺は帰るぜ。ディーノともう少し話しておきたいから
な。リーオン行け。」

「お、おい！」

「？？？ バタンツと帰りの音が響く。」

店内に残されたシロンは唯々呆然としていた。

「？？？ 結局、昔ってなんなんだ？ シュウより前のサーガのこと
か？」

「？？？ 確かに、グリードーたちにはそのことの記憶はあるが俺
には無いよな…。それとも、もっと昔……。」

「？？？ 軽快なジャズが、心に安寧をもたらす。」

「？？？ さつきまであつた激昂がとうに冷めていていることに気
付いた。」

「？？？ んっ？ 今ふと、シュウに会いたくなった。何故だろうか？
？？？ 皆にツンケンされて『寂しく』でもなっただろうか、と
心で自分を自嘲する。」

「……いや、そうなのかもしれない、さつきから不思議な違和感、表
現が不自然だがそんな感じの何かが心に渦巻いている。」

「？？？？？ それが何より自分の知らない過去があつたこと証明だと
思った。思いたかった。」

「？？？ ？ シロンは電灯に落とされた自分の影を見つめ、遣る瀬
ない気持ちになった。」

「？？？ みんなが忌避するシロンの過去、後に彼はそれを知るこ

ととなる。

?? いや、知ってしまふ。

?? ? それはまだまだ先の話である。

「」?

?? ? 口笛を吹きながら、夕暮れの道をまだまだ幼い足で歩き家へと向かうユウト。見慣れた景色もキャンパスに描いたような美しさだ。偶には一人でこうしてみるのも悪くない。

?? ? しばらく、美しい景色に見惚れながら歩いていると子連れの親子が見えた。

?? ? ショッピングの帰りだろうか。色とりどりの野菜を大きな紙袋に入れて両手で抱く様に持っている婦人と片手にカラフルなキャンディーを手にした3、4歳の子供が自分とは逆方向に向かって仲睦まじく歩いている。

?? ? 段々と近づいていくと二人の話し声が耳を掠めた。

「ねえ、おかあさん。さつき行った砂浜になんかね、こゝんなに大きな毛むくじゃらなものがいたんだよ！」

「あら、それはきつと浜辺の妖精さんなのかもね？きつとあなたに会いに来たんでしょうね。」

??? 妖精???? よくお伽噺には九分九厘登場するという妖
のことだ。

??? 登場するのは白雪姫や何やら幼児向けの本がやたら多い。
そのためか、本に使われる挿絵には何とも可愛らしく愛嬌のある透
明な羽根が生えている幼女の姿をしている。

??? でも、自分は実際のところは違うと思っている。

????? これは、授業の一環で滅多に行かない図書室に行った時
に偶然見つけた本にあった挿絵を見て思ったことなのだが:

??? とりあえず、思い描いていた可愛らしく愛嬌のある幼女
の姿をしてはいなく、寧ろその正反対の位置に存在する様なもので
あったことは確かだ。

??? これ以上はインパクトが強すぎて説明しようにもできな
い。まず、あの本を何故これから未来を築いていく子ども達が集う
小学校に置いているのか理解できなかった。

??? 今すぐ絶版にしろ、と心から本当に思った。いや、マジ
で。

「でね、それでさ.....」

「うんうん、そうね.....」

??? 未だに親子の会話が聞こえる。

??? まあ、どうせそんなもの架空の世界とか、結局は誰かの
想像で虚構な存在だ。『現実では有り得ない』と...

「ただいま!」

「おう、ユウト、お帰り。」

「おかえり。ユウト! もうこの人と知り合ったの?」

「お邪魔してまーす」

だど?????つい先日まではそう思っていた。

「ア……ンナ？」

「ふふん？」

?? ? 既に父シユウは帰宅しており部屋着に着替えていた。そして、リビングのソファーに一日の疲れが出たのかぐったりと凭れていた。そして、彼の向かい側には今日の昼に秘密基地で見た青い鳥が違和感なく座っていた。

「ユウト、もうアンナと知り合ってたなんてよう。お前も隅におけないな！」

「シユウ、やめてよ？」

?? ? そう、いま目の前に居るのは『レジエンス』という所謂怪物とかそんなお伽噺に今にも出てきそうな奴ら。

?? ? しかし、イメージしていたものとは違って本で見たようなこの世ものとは思えない邪な容貌はしてはいなかった。

?? ? それよりも何より違っていたのが中身、つまり精神面。

?? ? 人間を見境無く襲いかかるような性格だと思っていた自分是一種のカルチャーショックを覚えた。なぜなら、凶暴なのは確かに肯けるが、なんというかとても人間味に溢れているというか、感情表現が豊かというか、そんな感じだったからだ。意思の疎通も問題無くこなせる。まあ、あの白ねずみは厳密に言うとは違う気もするが…

「シユウ、デレデレしない！」

「してません！お願いですから、その御手でチョップは勘弁して下さい」

さい！」

「ふふふ、相変わらずね」

「??? 自分はいいつらの存在のおかげで『非日常』の意味が良く分かった。

「??? 別にそれが嫌という訳でもない。皆と一緒に居るのは楽しいし、特に不便なところが出るということも無いし。『非日常』になった言うより、『日常+α』と言った方が適切かもしれない、まあ、何かが変わったこと自体に変化は無いけど。

「ユウト！暇してるんだったらさっさと風呂入っちゃって！」

「はい。」

「ユウト、アンナと入れ！」

「…父さん、大丈夫？」

「??? シュウが息子の冷たい(?) 反応に愚痴垂れる。異性と一緒に風呂に入れと親が勧めるのはちょっと教育上良くないと思ったのはユウトだけではないはずだ。

「ユウト、冗談だよ。まったく、最近父さんに冷たいぞ！どっかの誰かさんみたいに！」

シュウがメグをチラッと見る。メグは溜息をつきながら包丁を片手に野菜を刻んでいる。

「冷たいじゃなくて、良識があるって言ってちょうだい…。」

「はいはい。…そういえば、ユウトさ、シロンどうした？」

「??? そうだ、シロンのこと言うの忘れてた。確か、あのバーに行ってるんだったよな…多分。」

「なんか、グリードーっていうレジェンズと飲みに行ったらいいけど。」

「グリードーもいるのか!?(…ってことは火のサーガがいるってことか…ディーノの奴は知ってるのか?)」

「? ? シュウは少し考え倦んでいたが、何かはつとしてもう一つ質問した。」

「ランはどうした?」

「なんか調べ事してるみたいだよ。復活とか何やらって言ってた。」
「ほお、そうか。」

「? ? シュウは軽く相槌をうつ。前から思っていたが、父さんも何かを知ってるような感じだった。」
「? ? よし、ここはやってやるか。11才児のそれなりの決意ってやつを…」

「父さん、母さん。それにアンナも…。」
「んっ、どうした?」

「? ? とは言ったものの流石に改まってこうするのは少し緊張する。ユウトは深呼吸を数回繰り返し続ける。吸った家の空気は緊張を解す役割を果たしてくれているように思えた。そして、五回目の深呼吸を終えて真剣な眼差しになる。」

「父さん、母さん、そしてアンナ。話があるんだけど…」
「お前から話すとは珍しいな。なんだ?言ってみろ。」

「? ? シュウはソファから立ち上がり、ユウトの方へ歩み寄

る。そして、膝を立てる様にして息子と視線を合わせる。

「？　？　しかし、ふざけた反応を示すと思っていたユウトは思わず驚いてビクツとなってしまう。シュウはただ真っ直ぐユウトの双眸を見つめる。シュウは自分がこれから何かを話そうとしていた事を知っていたかのように冷静沈着、そして覚悟した目をしていた。全てを見透かされているようなこそばゆい気分になった。

「俺……！」

「……。」

「俺……もつと、シロンのことを知りたい！レジェンズのこともつと知りたい！」

「？　？　言った。言ったぞ。」

「？　？　緊張が一気に解れ少し呼吸が乱れたがすぐに落ち着いた。？　？　シュウはそれを聞いて少し呆気に取られていたが、すぐに笑みへと変わっていった。

「いいんじゃないか？」

「……！」

「お前の『やりたい事』なんだろう？じゃあ、好きなようにやればいい。」

「？　？　確かにそれはユウトの期待した答えだった。しかし同時に否定される答えだとも思っていた。

「？　？　ユウトは依然として驚きを顔に浮かべていた。

「昔からお前は特に何かに興味を持ったりしなかったからな。というか、初めてじゃないか？」

「そうかもね。」

??? シュウとメグはお互いに見つめて笑い合う。

??? ? そう、自分には特に何かが好きとか嫌いという概念が無かった。食べ物好き嫌い無し。昆虫も好き嫌い無し。そして、それは人においても通ずる。

??? ? だから、何かに興味を持つことなど今までに無かった。クラスの皆が新作ゲームや新しいアクセサリーで盛り上がる中、一人で昼寝していたぐらいだ。

「お前が初めて興味を持ったことだ。好きなようにやってくれ。」

??? ? ユウトはメグとアンナを交互に見る。二人とも笑顔で肯定してくれた。

「ありがとう…」

「なんで、礼言うんだよ！何かに興味を持つのは当たり前なんだから、別に父さんたちに言う必要も無いんだぞ。」

??? ? シュウとユウトが笑い合う。やはり親子というだけあって良く似ていた、顔も、笑い方も。

「みんなー、夕飯の用意出来たわよ。アンナも食べていって。」

??? ? みんなが食卓を囲む。今日のメニューはブレッド、グラタン、チキンライス、そして新鮮な野菜を使ったサラダだ。

「んっ！メグさん、美味しい！料理上手だね！」

「そう？良かった！」

?? ? そう、何ら変わりない。いつものように食卓を囲み、いつものように喜んだり、泣いたり、悲しんだり。何ら変わらないんだ。

?? ? 確かに、少し変なのかもしれない。レジエンスと人間、能力や姿形を全然違うけど…。

?? ? みんな笑ってる。

?? ? もう、それだけで良いと思った。

?? ? 『非日常』がいつか『日常』になっていくそんな気がした。

「はあゝ、疲れたゝ！」

聞き覚えのあるフレーズを呟いたのはハルカ・ヘップバーン、まだまだ美人な社長秘書。彼女は他社からの契約や諸々の書類処理に追われているところだった。

適当な始末書などは部下に任せればいいが、こういう会社の利潤などの重要書類はこういう秘書や高位の位置にいる人がやらなくてはいけない。その量は意外と多く、DWCのような大手企業の会社なら尚更である。高貴なイメージを持っている方はすぐに考えを改めて欲しい。

「んゝ、疲れたゝ！」

二回目の呟きと同時に、おもいつきり背伸びをする。ずっと座位だったので肩が凝って仕方がない。

「お風呂入ろうかな・・・。」

今は7時ちよつと過ぎだ。このペースだと日付を跨いでしまうのは必至だ。仕方ない、風呂入った後にマリンに連絡しよう。

ハルカは入浴の準備をしてエレベーターに乗り込む。

実は、ここDWCには結構な広さの大浴場がある。恐らく、綺麗好きなランシオンが自分自身も入れるように昔造らせたものだ、それほど広いのである。あの時は色々と血迷っていたから気が付かなかったが、秘書になった時に父に教えてもらった。

大浴場だけでなく一大家族は住める広さの部屋が揃ってる。

書斎、キッチン、ベッドルーム数部屋、客間数部屋など色々ある。

以前乗ったエレベーターで行けるが、普段はその階は私の家族以外は使用不可となっている。だからと言って、私たちもあまり使わない。使うのはこういう徹夜の日ぐらいだ。

都心の夜景をエレベーターから望む。無機質なビル群が織り成すイルミネーションが煌々として夜を照らしていた。上空で輝く月や星たちが自分の役目を奪取されたようで哀れに見えてしまう。

夜景を眺めて空想に浸っているとエレベーターの着いた音が鳴った。重い扉が開くと同時に、風呂場の匂いが鼻に纏ってくる。普段使わないとは言っても、何時でも入れるように可動しているのだ。これぞ、DWCクオリティ。

「ふふ」

脱衣所に入り、鼻歌混じりに衣服を脱いでいく。

そして、全てを脱ぎ、流線の体躯を晒す。

50才とは思えないスタイルで今の若年層と比較しても劣らないほどだ。成熟した胸、薄らと割れている腹筋、そして艶やかな肢体は男性を魅了し、女性には憧憬を覚えさせる。

バスタオルを体に纏い、洗面道具一式をもって大浴場へと入場していく。ああ、恋の病以外なら何でも治せるといふ秘湯（ユル談）に早くこの身を溺れさせて日頃の煩雑な思いと疲労を共に流したい。

「へえ〜！それで、それで、他は！？」

おや？

ふと、聞き覚えのある…というか聞き慣れ過ぎた声が耳につく。まさか…まさかね…

音を立てないように大浴場の中心に立っている大きな柱に身を隠す。そして、声のした方向を密かに柱の陰から見ると、

「・・・！（うつ・・・やっぱり・・・）」

まさかとは思ったが、やはりマリが中央付近の広めの湯船に気持ち良さそうに浸かっている。

あの子、いつの間に此处への行き方知ったのかしら…。教えた記憶は無いんだけど…あつ、もしかしたらパパが？！まあ、そんなことはどうでもいいわ。とりあえず、マリのところへ…

「そんな慌てないください。一つずつ教えますから。」

待て。

今の声って…自分の聞き間違いというか見間違いでなければ、って、ええええええ！？何でなんで！？

・・・なんで、ランシーンがいるの！！？

同じ浴槽に人間サイズのバスタオル一枚を腰に巻いたらンシーン、そして同じくそれを体に巻いたマリが浸かっていた。

ちよつとあの二人何してんの！ていうか一体どうしたらこういう状況に…

「早く教えてよー！」

「ふふふ、落ち着いて下さい。何事も落ち着きが無ければ良い状態になりません。まず、深呼吸して…」

「すう…はあ…。こんな感じ？」

「そうです。そして、体の力を抜いて…」

なんかヤバイ！この雰囲気ヤバイ！

行かなきゃ！！

ハルカは柱の陰から身を乗り出して叫ぶ。

「ちょ、ちょちょちょちょっと待ちなさあああああああ
！！！！！！」

「！！！！！！！！」

突然の叫びに入浴中の二人が目を見開いて驚く。浴室なので反響し、いつも以上の音量になる。

「あ、あああんた達、わ、私の目が無いのをいい事に、な、なな何してんの！私の目が黒いうちは絶対…」

「ねえ、ママ。」

娘があまり危機感の無い顔をして問い掛ける。マリ、早く逃げて！コイツは…

「深呼吸しよう！ほら、こういう風に…。そうすれば、落ち着くってランシーンさんが言ってたよ。」

「マリ！何いってんの！アイツは…」

「ハルカ、落ち着いて下さい。」

あんたには言っていないわよ！なんでマリはこんな平然としてるの！？どんな脅しを…

「ママ、どうしたの？私、レジエンスについて教えてもらってただけだよ！」

「わかったから、もうアイツには………えっ？レジエンスについて…？」

「うん、そうだよ。」

えっ、レジエンスについて？？マリがレジエンスについてランシーンに、ランシーンはマリにレジエンスを、マリがレジエンスでランシーンについて、はれほれはれはっははっはこけけっつけ？

「まったく…。」

数分後、なんとかハルカを落ち着ける。そして、ランシーンと距離を置いてハルカは同じ浴槽に入る。そして、ランシーン

はここに至るまでの経緯いきさつを話した。

「……はあ、成る程ね。で、ホントウに何もしてないんでしょうね！？」

「してないとさつきから言ってるじゃないですか。」

疑いの眼がランシーンを睨む。

ランシーンは折角の大浴場もこれのせいで狭く思えた。

「私も一応、大の大人ですよ？年下、しかも身も心も未熟な子に手出しなどしませんよ。」

「へえ、意外ね！あなたはそういう堅物な性格だから、てつきりそんな自分から解放してくれる甘えてくる年下の方が好みだと思っていたわ。」

ランシーんに嫌味っぽくいうハルカ。ランシーンはただ微笑だけをして、汗と蒸気で濡れた顔を両手で拭う。マリは相変わらずランシーンに纏わり付いて離れようとする気配はなかった。

「マリ、そんなにランシーンのこと好き？」

「好きだよ、さつきまでいろんなこと教えてくれたんだよ！あつ、別にランシーンさんだけじゃなくて、シロンさんやグリードーさんも好き！」

ハルカが余計なことを喋っていないかと勘付き、ランシーンを横目で一瞥する。ランシーンは、それを見てハルカが何を言いたいかわかったのか首を横に振る。

「はあ、まあいいわ。もうこうなっちゃったんだし…」
「そこまで言われるとは酷いものです。」

もうこうなつたのもきつと何かの因縁かもしれない。この場で一応、話をして見るのもアリだ。風呂は素が出ると言っし。ハルカはそう思い、マリに早く風呂から上がつてと注意する。

「え、私、もつと一緒に……って、まさかママ……」
「ち、ち、違うわよ！早く出なさい！」

マリは舌を出して戯けた顔をして風呂から出ていった。まったく、ませた娘だ。

そして、大浴場にはハルカとランシーンの二人だけになる。さつきまでマリが騒いでいたせいか静寂が幾分か増した様な気がした。

「ふう…元気な子ですね。」
「あなたに言われる筋合いは無いわ…。」

ハルカはランシーンをチラリと見る。

いつもはシロンと違って服を着ているランシーンだが、今回は風呂にいるためバスタオルを腰に巻いてるだけだ。

黒いイメージのあったハルカはランシーンの体が意外に白いことに驚く。胸板、肩、腰回りと背中の中黒い模様と翼以外は殆ど白かった。とは言っても、シロンと比べると配色のせいか黒みを帯びていた様に見える。

体つきはシロンと比べて筋肉質で、結構ガツチリしていると思う。シロンの腹部と比べて、引き締まっており、柔らかそうな綺麗な筋肉をしていた。

こんなにもシロンとは違うのに、何故か隣にいる彼は白い彼と重なって見えた。

「何ですか？ジロジロと…。」

「な、何でも無いわよ！」

思わず顔を赤らめてランシーンから目を背ける。急に今まで自分が考えていたことを思うと恥ずかしくなった。

しかし、ランシーンはそれに食い付こうとする事はなく別の話題を持ち出した。

「あなたにそっくりですね。」

「え？」

「メアリーのことです。」

「ああ…、そう？」

「ええ、とても。」

確かにマリはあの頃の自分とそっくりだ。

レジエンスが好きで、とても好きで毎日レジエンスのことを考えているだけでワクワクして、ドキドキしていたっけ……

だけど、本物のレジエンス、そう彼等が現れて一つ夢が叶ったような気分になったし、とても嬉しかった。

だけど、好き過ぎて『裏』の部分まで視えてきてしまった。レジエンスの出現の意図、文明の黄昏時、そしてレジエンスウオーと色々な嫌なところが明白になっていった。好きなものが世界を破滅の道へ追いやるなんて皮肉なことだとずっと思い悩んできた。

嫌いになろうとした。

でも、出来なかった。

だって………今まで好きだったんだよ？

拳句の果てには、道を間違えてしまふ始末だ。苦しいならそんな物無くなつてしまえばいい、そして皆も苦しむのなら尚更だと考えていたっけ…。今思うとなんて利己的な考えなのだろうか。その後、自分が苦しむことすら理解っていなかったくせにね。

そして、シュウくん達のお陰でこの地球、そして私たちは救われた。そう、救われた…。

「ん？…泣いてるのですか？」
「…っ…っ…っ…」

すすり泣くハルカを見たランシーンは困惑する。こういう状況にはあまり慣れていないというのが正直なところだ。ランシーンは、とりあえず理由を訊いてみることにする。

「どうしたんですか？」
「あなた…泣いてる女性が…居たらいきなり理由訊くわけ？まず、大丈夫とか、そういう風に心配するのが普通よ…っ…。」

ランシーンは思わず狼狽える。寧ろ、悪態をつけるくらいなら心配無用と感じたくらいだ。

ランシーンが言葉に迷つてると、ハルカが嗚咽を漏らしながら何かを呟きだした。

「…怖いの。」
「ん…？」
「怖いよ。これからどうなっちゃうのか…。」

レジェンズにまた会えたことは嬉しかった。だけど、またあんな事が起きるなんて思うと怖くなった。レジェンズウォーと

かそついうことじゃない！

今でも、夢に出てくる。

昔の私が。

苦悩する私が出てくことが怖い！

そして、何よりも…

自分にそっくりなマリが自分と同じ道を歩んでしまわないかということが怖い！

あなたにはこの気持ちが理解できる？

今まで『心』が無かったあなたには理解できる！？

「理解ります。」

「！？」

「私も今怖いです。」

以前、私は未来を視る術がありましたが、全く視えない時がありましたね？あの時、私は体の震えが収まらずにいました。そして、何かに押し潰されそうな…そのような感覚に襲われていました。」

ランシーンが風呂に沈めてあつた両手を上げる。微かに震えているのが此方から見てもわかった。

「でも、今は『心』を持ちどのような気持ちか曖昧ですが理解ります。」

それは、きつと先が視えない不安、恐怖：そのような感情です。

そして、それはジャバウォックに身を挺した時に感じていたものと多分同一のものでしょうか。」

そうだ、ジャバウォックの力の根源は恐怖・憎悪などのあらゆる負の感情だ。

私の母がジャバウォックに囚われていたのは恐怖を感じていたからに間違いない。

そして、母の代わりに私が犠牲になろうとしたが、その時、ランシーンが突如現れ、私の代わりに自らの体をジャバウォックに委ねたことは記憶の中に鮮明に残っている。

そうか、ランシーンを躊躇無く飲み込んだのは彼の中に『恐怖』が芽生えていたからか…

「それだけではありません。今までレジエンスウォーの？末は全て決まり切っていました。今回は違います。前例が皆無ですからね。予測出来ないことがこれだけ不安なものだとは思っていませんでした…」

「……」

ハルカはただ俯くだけで未だ黙ったままだ。

「でも、だからこそ人は立ち向かうんでしょうね、運命ってものに。」

「あなた、変わったわね…」

ハルカが口を開き始めた。ランシーンはそんなハルカを

見下ろし少し安心する。

「よく言われます…。」

すると、ランシーンは立ち上がり、そして、大浴場の入り口へ向かっていった。

「ランシーン、もう、出るの？」

「はい、結構な時間入っていたんで逆上せそうですよ。」

「そう…、今日は泊まっていきなさいね。」

「そのつもりです。」

ランシーンはハルカに笑みを浮かべて、脱衣所へと向かって行った。

そして、取り残されたハルカはまだ体を洗ってないことに気付く。

「体洗って、少し湯に浸かってから出るか…。」

なんだ…、あの人と変わらないじゃない。

不器用だけど、意地っ張り、負けず嫌い、でも、慣れない言葉で励ましてくれる。シロンさんと何ら変わらないじゃない…。

「で、でも、油断は出来ないわ！まだ素性を全て知った訳じゃないし…。」

はあ…疲れた。もう、暫くは考えるのやめよう。味方を疑うだけ無

駄無駄。変なコトになったら、それはその時だ。

「でも、良かった…」

今日はすごく爽やかな気分だ。さっきまでの陰鬱なテンションなどどこかに行ってしまったようだ。

ハル力はもう一度入り口を見るが、既にランシーンの影はいなかった。

「とりあえず、ありがとう…。」

ハル力は顔に久し振りに満面の笑みを浮かべた。
今日はいい夢が見れそうだ。

Ep.5―?

「はあ、スッキリした。」

時刻は深夜2時半。既に大半の人は寝静まっている時間帯だ。

冷たく暗い廊下をギシギシと軋ませて歩いているのはマリ。どうやら、トイレに行っていたようである。

「やっぱ、夜は冷えるなあ。」

手を擦りながら寝室へ繋がる廊下を歩いて行く。途中には、研究室や書斎、そして資料室と様々な部屋がある。全体の広さは自宅と比べても引けをとらない程だ。

そして、突き当たりを左に曲がるとドアが半開きになって白い光が漏れていた。

「ママ…かなあ？」

マリは部屋へと近づいていく。確か、仕事があり余って徹夜になるって言うてたっけ。

部屋の前まできて、中にいる人物に気づかれない様にとそりと覗き込む。

「……………！（あつ…ランシーンさんだ！）」

部屋の中に居たのはランシーンだった。そういえば、リユドの家を発つ前に何か調べ事があるとか無いとか言ってた様な・

・・・。何しているかは気になるけど忙しそうだから放っておこう、
とそう思った時、

「何か用ですか、メアリー？」

「あ、気付かれてた…？」

「そんな、凝視されていれば嫌でも気になりますよ…。」

マリは少し照れながら、ドアを開けて入ってきた。どうやらラン
シーンは人一倍気配を感じれる様だ。

「それで、こんな夜中にどうしたんです？」

「私はただちよつと、トイレに起きただけよ！」

「ハハハッ、レディーに訊く質問では無かったですね、すみません。」

ランシーンは別にマリの登場に迷惑している素振りはし
ているような感じではなかった。マリもランシーンに合わせて笑う。

「ランシーンさん、調べ事してるの？」

「はい、そうです。」

ランシーンは大きな本を机に置いて横にある別の本と照
らし合わせている様だった。よく見ると、ランシーンは結構な大き
さの椅子に座っており、机もそれに合わせているといった感じた。
とはいっても、人間もちゃんと使える高さであるので、小さい自分
でも使おうと思えば使える。

「ふーん。で、順調なの？」

「…実は、行き詰ってしましてね。」

ランシーンは掛けている縁のない眼鏡を右手の指で抑えて考え込んでいた。マリは眼鏡を掛けたランシーンをじっと眺めた後、続けて質問する。

「何が判らないの？」

「……」

ランシーンは見せるを迷っていた様子だった。やはり、子どもには判らないと見くびっているのだろうか。

「ちよつと、子どもだから『どうせ判らない』とか思っ
てないでしようね!？」

「ち、違いますよ!…わかりました。でも、誰にも言わないで下さいね、」

「大丈夫、大丈夫♪」

ランシーンが渋々、本とそれを解読したと思われるもの書かれた紙を取り出す。本には、ルーン文字であるものが書いてあり、横の紙は恐らくランシーンの筆跡である解読文が英語で筆記されていた。

『風が切れ、水は砕け、火が呑み込まれ、大地の呻き声が無くなる。そして、光は捻れ、闇が裂けし時、封印されし禁忌、此処に再誕す。』

「何これ？」

「それがさっぱりでね。全くもって判らないんです。」

すると、マリがいきなり机の上に立ち上がり、ランシーンを見上げて指を差す。マリの突然の行動に、ランシーンは思わず仰け反ってしまう。

「な、何ですか…?」

「気晴らしよ!」

「………えっ?」

「あなたに今足りないのは気晴らし! そんな切羽詰まってやらないで気楽にやらないと判るもんも判らないわよ!」

ランシーンは依然として驚いており、この状況すら判らないといった様子だ。ランシーンは深呼吸をして一先ず落ち着く。

「はあ… まあ、確かに気晴らしは必要ですね。脳のリフレッシュは思考能力の活発を再度起こしますからね。」

「そうそう! 私も本読んで理解できない時は、ユウトたちを呼びつけて遊ぶと突如、閃いたりするのよ!」

「じゃあ、空中散歩しますか、一緒に。」
「えっ?」

数分後、

「きゃああゝ？高いゝ！風が気持ちいいわあああああ！
！」

「ちよつと落ち着いて下さい。」

漆黒の翼を背に夜空を翔る。先程まで照らしていた光は既に殆ど消えており、月や星たちが優勢を取り戻していた。

ランシーンの色は黒。夜空は立派な保護色となって下界にまだ走っている車には視えることは無かった。

ランシーンの背には白いパジャマを着たままのマリ（しかも裸足）がいて、薄着だが、興奮のあまり寒さは感じていない様子だった。

「やっぱりこの感覚は病み付きになるわゝ！」

「そうなんですか？」

「あなたたちレジエンスには判らないかもだけど、人間は空に憧れていたのよゝ！」

マリの蒨蓄が始まる。ランシーンは一つ一つに相槌を打って、嬉しそうに話すマリを見る。マリが一体どのようににレジエンスと関わっていくのかはまだ不明だが、このような純粹に自分達を好いてくれる子どもたちを戦いに巻き込むかと思うと心が痛んだ。

「それでね、……んっ、あれ何かしら？何か海岸にいない？」

「ん？」

本当だ。何かが海岸で倒れている。白くて、何か毛が生えているような……、どっちにしろこの距離では判断しかねぬ。

「行ってみましょ」

「えっ、本気ですか？まあ、いいですけど……」
「れっつー！」

その倒れているものにランシーンが近付いて下降する。そして、ランシーンがマリを背から降ろすとマリが躊躇無くテクテクと裸足で走って行く。

「何これ？」

「ちよっと迂闊に近付いてはいけません！」

マリはランシーンが珍しく大声を出したので、驚きながら白い物体から距離を取る。

すると、一瞬、白いそれがピクツと動く。

「ねえ、今動いたよ。」

「じっとして下さい。いま行きますから。」

ランシーンがマリの元へと急ぐ。そしてランシーンも白いものをしげしげと見る。

「……………ん。」

「あつ、なんか声したよ!」

「メアリー、気を付けて下さい。」

ランシーンがマリを腕で抱き寄せ、白いものを警戒する。マリも心配そうにそれを見つめる。すると、それが手を付いてムクつと立ち上がった。

「・・・・・・・・マリ・・・・・・・・?」

「マリいいいいいい!!」

「キャア!え、ちょ、ちょ、待って!」

「お、お前は!」

突如、ランシーンの腕からマリを引き離そうとする白いもの。流石のマリも突然過ぎて目を回す。ランシーンは必死にマリを庇う。

「マリー!マリー!守る、守る!」

「落ち着いて下さい!」

一向に収まる様子に至らない。ランシーンもどうしようもなくなっている。
すると、

「うるさああああああああああい！！！！！！！！」

しーん。

マリの雄叫びと共に騒ぎ声は一瞬にして消え失せた。そして、深夜に相応しい静寂が戻ってくる。

ランシーンに抱かれているマリは、いきなり大声をあげたので息を切らしていたが、ランシーンに教わった深呼吸をして落ち着きを取り戻した。そして、白いものをぎろっとする。

「あんた！」

「えっ、ボク？」

「そうよ！少しは、落ち着きなさい！ほら、こういう風に！」

ランシーンから教わったのと同じ手順で白いそれに伝える。

なんとか、それは落ち着き始める。すると、突然脈絡も無く話し始めた。

「ボク、ズオウ。マリ、サーガ。」

ズオウと名乗り、何か青い物体をマリに差し出す。

「そう、あなたズオウっていうのね！で、私はサーガ……………」
えっ？

「サーガだと…！」

いきなりの告白にマリは少し困惑していたが、ズオウの差し出した青い物体……水のタリスポッドを受け取る。するとズオウが少し不安そうな面持ちでマリに訊ねた。

「マリ…抱いていい？」

マリはちょっと驚いた。

ランシーンを少し見つめて、確認を取る。ランシーンは少し間を置いてコクリと頷き許可をした。マリは再び、ズオウを見つめる。その瞳には邪気は一切感じられなく透き通っていた。それに嬉しかった。なにより自分になりたかったものになったのから。

「いいよ」

「わーい！」

マリはランシーンから離れ、ズオウに飛び込む。ズオウもそれと同時に抱き締める。

「ふかふか！あなたビックフットでしょ？よろしく、ズオウ！」

「マリ、サーガ！（僕が、絶対守る…。）」

出会いに喜ぶ二人。横にはこれからの憂いが更に募ったランシーンがいた。

「メアリーがサーガ…、何故だ…！一体、何が起きている!？」

過去を追い求める瞳。

未来を見つめる瞳。

現在を喜ぶ瞳。

それぞれの夜が過ぎて行つた。

．．．．．to be continued

『良い匂い!』

『さあ、リュド、みんなでケーキ食べましょ!』

『うん!』

ん……この声…、誰…?

「……………んっ、」

???　カーテンの隙間から漏れる陽の光に目を覚ます。

???　そして、今居る場所は馴染みの自分のベッドであることに気付いた。

そうだ、僕は博物館で……、助かったのか……?

???　夢でないか確かめるために頬を抓る。……痛い。

???　此処は現実のようだ。初めて生のありがたみを実感したような気がする。

「・・・・・・・・。」

「？　？　　そういえば、さっきみた夢は何だったんだろうか。女の人の声がして自分の名前を呼んでいた。何か懐かしい気もしたが…。」

「？　？　　暫くベッドの中で考えてみたが、自分の中にはそれに関係する記憶はいくら探しても見つからなかった。」

「？　？　　リユドは考えるだけ無駄と思い、考えるのを諦める。そういえば、今は何時だろうか。学校なら急がなくてはいけないかもしれない。」

「？　？　　リユドは、仕方なさそうにベッドの反動を利用してまだ目覚めていない体を無理矢理立ち上がらせる。すると……。」

「よお。」

「うわあああああああ！！！！」

「？　？　　リユドは『出オチ』という単語を学んだ。」

「じゃあそろそろいつてきまーす！」
「いつてくるんだな。」

リュドとトミーは身支度を済ませ、玄関で二人の父の見送りを受ける場所だった。もちろん、リュドは先日手に入れたタリスポッドも持っていく。

「リュド、本当に大丈夫かい？」
「うん！特に具合も悪くないし、あと、起きてあんなコワイもの見せられたら病気なんてすぐ飛んじゃうよ！」
「リュド坊っちゃん、酷いですぜ・・・。」
「まあ、リーオンは顔が怖いしょうがないよね。」

リーオンはディーノにまで言われてしょんぼりしてしまった。何故、リーオンがここにいるかというのは前回の話の流れを掴んでいるのなら解るだろう。

そして、リュドたちは玄関を出て行った。

「急ぐんだな！」
「うん！」

トミー達がダツシュで学校へ向かう。

何度も言うが登校時間との熾烈な争いはいつものことなので彼等にとって変哲もない。

そんな余裕からリュドがトミーにある物を走りながら見せる。

「トミー、これ何だと思う?」
「ん?」

彼の学校に持っていくバッグパックから出てきたのは、赤いものがついた腕輪のようなものだった。

腕輪には不思議な紋章に赤い石が嵌められており、腕をいれるであらう主体部分は黒光りしていた。

「ブレスレット?」

「多分、そうだと思うけど…。起きたらベッドの中に紛れてたんだ。でも、さっき腕にいれようとしたら、ちよっとキツくて僕には入らなかったんだよね。」

「ふん、とりあえず、ユウト達にも見せてみるのがいいんだな。」

リウドはトミーに肯く。

紛れてたという状況はトミーに疑問を持たせたかもしれない。それを見つけた自分ですら驚いているのだから。とりあえず、ユウトでなくてもランシーンならわかるだろう。

そんな淡い期待を抱きつつ走り続け、なんとか5分前に学校に着いた。リウドは思いっきり、教室のドアを開ける。

「よお、リウド、トミー」

「おはよ」

「ガガガッ」

「フゲグ…」

何と珍しいことだろうか、ユウトとマリが登校時刻までに居るとは…、よく見るとユウトの頭の上にはシロンとランシーンがちょこんと乗っていた。

「あれ、二人とももう来たの？」

「ああ…。それより、リュドは怪我大丈夫なのか？」

「うん、大したことないよ。」

ユウトたちもそうだが、昨日の爆破事故（事件？）の被害者が居るというのに教室は普段の安寧が無常に流れている。最近のトピックにはどうやら興味が持てないようだ、もしくは何も知らないだけか……。

反対に自分はレジェンズという奇想天外な出来事にまだ少し混乱している。白い竜やらライオンやら…そして……紅いタリスポッドから出て来た炎の竜。今日、父に『グリード』のことを聞かされた。父はどうやらグリードのことをとても好いているようで、それは逆も然りであった。自分も仲良くなれるのか正直不安ではあるが、父であるディーノが出来たのなら、その息子である自分もできる筈だ。

そんなこと思いながら席に着くと、マリが此方に近づいてきて何かをリュドの目の前に突き出す。

「じゃじゃーん！」

「いきなり何だよ…って！これタリスポッドじゃん！」

マリは少し得意気になり、後ろを振り向き髪を靡かせる。そして一拍置いてタリスポッド入手の経緯を話し始めた。

「昨日、ランシーンさんと夜の空中散歩の途中でね、ビックフットのズオウに会ったのよ！私がサーガっていつから驚きよね。」

「ズオウってその…ソウルドールだっけ？それに入ってるやつ？」

「うん！」

マリが青いタリスポッドに嵌っているソウルドールを指さす。これも父ディーノから聞いた話だが、ソウルドールとはレジエンスが入っている水晶体のことらしい。ユウトが言っていた「リボン」という掛け声を合図に具現化する何とも不思議な物体だ。あ、……。そう言えば、不思議な物体なら他にもあった。

「そうそう、ねえ、ユウトたちはコレ何かわかる？」

リウドが先程のバックに入っていたブレスレットらしきものを取り出して見せる。ユウトとマリも同様に不思議そうな反応をしているのは明らかだった。

「ランシーンはわかる？」

「フガガ……」

「ランシーンさんも判らないみたいね、」

リウドはやっぱりかというような遺憾な溜息をつく。

「そっか、まあ、考えても仕方ないよね……」

リウドはそれをバッグにしまう。すると、チャイムが鳴り響き、周りのクラスメイトが不満そうな声を上げて続々と着席していく。

「そろそろ、先生来るから私達も座りましょう。」

マリの言葉と共に、ユウトたちも席へ座る。ユウトは既に睡眠との臨戦態勢をとっている。すると、教師がドアを急そうな音を立てて開ける。

「皆さん、お早うございます。では、先ず出席を…アレックス君、」

放課後の予定ばかりが頭を駆け巡る。そう思いつつも、まだ今日が始まったことを感じせざるを得なかった。

チャイムが鳴った。

教師が一息ついて教科書を机に当てて揃える。そして、号令を行い重そうな教科書を脇に抱え教室を出て行った。その瞬間、生徒たちは暗かった表情が明るくなりそれぞれの友達と会話を始めた。

そう、みんなの大好きなランチタイムが訪れたのだ。これはいつもの業間休みと違い時間が長めだ。みんなは持参の弁当やコンビニやらで買った弁当を片手に友達と喋りながら中庭の木陰へ向かったり、一方で教室に残っている者もいた。

ユウトはリュドたちを誘い、中庭の木陰に急ぐ。

「今日はあつたかいよなー。」

「今日は珍しく小春日和並の暑さだって、」

木陰から空を眺めると、雲が悠然と流れていた。雲の遊泳は見ていて飽きない。そして、ユウトはメグが作った弁当を頼張る。リュドたちも食べ始めた。

「おい、シロン、勝手に取んな！」

「ガガガアガ！！」

「二人ともケンカはやめなよ。ほら、僕のサンドイッチあげるから

さ、」

リユドがシロンとランシーンにとランチボックスからハムとレタスが挟まれたサンドイッチを差し出す。シロンは礼を言い、一目散にかぶりつく。ランシーンもシロンと同様にした。

「ユウト、少しぐらいあげたっていいじゃない。」

「誰だって食ってる時、横から奪われたら嫌だろ！あゝ、少し減っちゃったぜ…。」

「僕のあげるんだな。」

「おっ、サンキュ！」

トミーがユウトに特大のハンバーガーを手渡す。すかさずシロンも飛びついたがユウトに摘まれる。

「お前なあ、前触れも無く飛びかかるな！リユドからもらったやつあるだろ！」

「ガガガガッ！！」

「わかったから、放課後買ってやるから…」

ユウトたちのやり取りにリユドたちが笑い合う。まだ出会って数日しか経ってないがこの光景も『日常』なりつつあった。すると、ランシーンが何かに反応をみせる。

「フガッ！？」

「どうしたんだ、ラン？」

ズガガガガガアンッ！！

突然、尋常ではない音が地面に響き渡る。座っているユ

ウトたちも地面が揺れているのが感じられた。すると、中庭の中央部が突如、罅割れ突起し始める。

「きゃあ！」

「地震！？！」

周りにいる子ども達もフラつき覚束なくなっている。中には、泣き始めてしまう者までいた。

すると、地震が数秒続いたかと思うと先程地割れした部分から砂塵が舞い上がってくる。すると、ウトたちには特に珍しく無くなったものが現れた。

「ふう、何事だ…まだ、あれから25年といったところか……」

「え…レ、レジエンス…？」

「てか、知らない人に見られちゃまずいって言ってなかった？」

そのレジエンスは、黒い羽毛に覆われており、巨大な羽を広げていた。

すると、マリが何かに気付く。

「ねえ、確かあれってアンナが言ってたレジエンスじゃない？名前は一……」

子どもたちは地震と突然起こった非現実的な出来事に暫く呆然としていたが、段々と状況を認識してきていた。そして、徐々に顔が強張っていく。

「ば、ば……、化け……！」

「キヤアアアア……！」

辺りは一気に騒然となり、顔が青くなった子どもたちが怯え逃げ惑う。逃げようとしたが、足が竦み上がり唯々震えているものもいた。ユウトたちはやっとこの状況の危うさを把握する。

「マジでやばくないか!？」

「みんな、誤解だ!僕たちの話を……」

「どけっ!」

逃げる生徒にリュドが突き飛ばされる。ユウトが咄嗟に手を取りリュドに安否を確認して起こし上げる。ユウトは他人を思いやる余裕はあったものの、コレほどまでの危険な状態に陥るとは自分自身も思ってもいなかった。どうやら、シロンの言うとおり自分達は変なのかもしれない。

それにしても、こんな状況一体どうしたら!?

はい、皆さん、落ち着いて下さい」

突然、学校の古びた拡声器を通して声が聞こえてきた。みんなは、化物の存在を気にしつつも立ち止まってしまった。

我々はDDTの副社長バーニー・ブルックマイヤーと申します。

只今、開発中の玩具のホログラムが誤作動してしまいました。皆さんには多大な御迷惑をおかけしまして、誠に申し訳ありません。

今から、復旧作業に入るので生徒や職員の方は学校に入ってください。

た・だ・し!ユウトくん、リュドくん、トーマスくん、メアリーさんは校庭に残るように」では、皆さん楽しい時をお過ごし下さい、
ちやあ」

「ホログラム……ってことは偽物なの？」
「らしいぜ、ビックリした。やっぱ化物なんていないよな」

生徒らは拡声器からの声のおかげで落ち着きを取り戻す。
彼らは指示通りにぞろぞろとそれぞれの教室へ戻っていく、ユウト
たちを除いて。

「なんで、俺に残るんだ？」
「さあ？」

「お久しぶりね、あなたたち。」
「……」

目の前にいたのはバニー・ブルックマイヤー、呼称はB
B。紫の縦ロールがやけに長い化粧の濃い女だ。ヴァイオレットピ
ンクのブレザーを直接素肌に羽織るという大胆なファッションで社
員の間では密かにネタにされている。彼女の左右には部下の「」た
ち、ジャック・ジョンソンがいた。二人とも同姓同名なので、みん
なからは「J1」「J2」と呼ばれている。

「久しぶり、おばさん。」
「誰が、おばさんって……？」

「副社長、やめて下さい。年甲斐も無く子どもの挑発に乗るなんて
……」
「そうですね、副社長。今仕事の最中ですよ、それにありのままを
言ってるじゃないですか。」
「二人とも、仕事の後、面貸しなさいよ？」

「Ｊ」たちはＢＢの顔に青筋が浮かぶのがハッキリとわかった。一生懸命弁解していたものの、ＢＢはそれに耳を貸すことはない。

「ところで、これってあなたたちの仕業？」

「は？」

ユウトたちは今ここで起こったことを事細かに説明した。説明し終わると、顔を少し顰めながらユウトに顔を近づける。縦口ールがユウトの顔面を撫る。

「まあ、とにかく私達が在庫調達でここに来たから何とかなったけど、いなかったら今頃大変よ。」

「ははは……」

ユウトたちもこう言われるのは少し不本意であったがＢＢが言った通り、結局自分たちは何も出来なかった。もし、彼女が来てなかったら状況の悪化だけが進み、生徒たちが動揺に誘われて逃げ惑う姿を眺め続けていただけたらう。下手すれば国際問題になりかねない。

しかし、まだ問題は全て解決した訳ではなく……

「で、私さっきから気になっていたんだけど……」

マリがユウトより前に出て、先程、地割れから出て来た生物に近づく。マリが近づくと、それは少し蔑視するかのように彼女を見つめる。

「ホログラムじゃないのよね？ねえ、あなたグリフィンでしょ？」

「……！！！！何故そのことを？」

マリは？知っていた？とだけ言う。すると、それは周りを少し眺めた後、再びマリを見つめる。

「ふむ、そうか。とりあえず、私は土のサーガを探さなければいけない。」

「ふ〜ん、サーガって土もいるのね。」

「お前たちはサーガのことも知ってるのか!？」

すると、ユウトが？お前たち？という言葉に反応し、黒いものへ双眸を向ける。

「お前たちじゃねえよ、俺はユウトだ！ユウト・マツタニな！」

「私はメアリー・ヘップバーン。」

「僕はリウド・スパークス」

「トーマス・マクフィールドって言っただな。」

黒いものをは皆の名を聞き啞然とした。すると、何かを確信したのか徐に口を開き始める。

「マツタニ、ヘップバーン、スパークス、そしてマクフィールド…、お前たちは、風のサーガ、シュウゾウ・マツタニを知っているか？」

ユウトは既視感のある展開に驚きはしたが、流石に慣れてきている。この言葉で、自分の父はレジェンズたちに様々な感銘を与えたことがあると確信した。

「ああ、俺の父さんだぜ。」

「ふむ、やはりな、あやつより落ち着いた面持ちだが似ている容姿はしているな……」

「それ誉めてるのか？」

「ここで会ったのも何かの縁えにしの導きであろう。私の名はガリオン。先程、そこにいる者が言っていた通り種族はグリフィンだ。」

ガリオンは立ち上がり虚空を眺めて黒い翼を広げる。どうやら飛行体勢に入ったようだ。

「あれ、もう行くのか？」

「ああ、私が此処にいるということは近くに土のサーガがいるということ。私達レジエンスは運命共同体とでも言うべき非常に密接な関係なのだ。」

もし、ガリオンの言う通りならばシロンやランシーンと自分も同じなのだろうか、とユウトは思惟する。

「んじゃさ、こいつ、シロンやランと俺もそうなのか？」

「シロン……ウィンドラゴンか、何故お前はその名を知っている？」

ユウトは自分が風のサーガであることを説明する。ほかにこれまでの成り行きもアバウトに話した。

「なるほど、そういうことがあったのか……。そして、ランシーン……お前も甦ったのだな。」

「……フググ、」

「しかし、一体、土のサーガはどこにいるのだろうか……」

「ねえねえ、」

「何だ、トーマス……」

「トミーでいいんだな」提案なんだけど、とりあえず僕の父さんマツクのところに行ってみるといいんだな。父さんが昔、君のサーガ

だったことは聞いてるんだな。リュド、いいよね？」

「僕は別にいいよ。」

トミーが応急措置としてスパークス家にいるマツクの元に行くことを勧める。この世界の人間でガリオンをよく知っているのは、マツク以外にはいないだろう。しかし、ガリオンは後ろに振り返り誘いを断る。

「すまないが、遠慮させてもらう。」

「ど、どうしてなんだな？」

「マツク…前のサーガにあの戦いの記憶を思い出させたくない。」

「戦い…？」

すると、突然リュドのタリスポッドが異常に揺れ始める。リュドはいきなりのにビックツと驚く。

「グ、グリードー、どうしたの！？もしかして、リボーン？」

リュドは、周りを一旦確認する。BBたちのおかげで学校から覗きにかかる人は見当たらなかった。そして、タリスポッドを空に掲げ、合言葉を叫ぶ。

「グリードー、リボーン！」

タリスポッドのソウルドールから火炎が渦巻き、本来の赤い竜の姿へと変貌する。リュドは改めて自分が凄い力を得たことに気付く。ちなみに、ユウトは登場のエフェクトの違いに少し妬いていたのはここだけの話である。

「よお、ガリオン、久しぶりだな。」

「25年しか経つとらんぞ。」
「ふっ…まあ、そうだな」

どことなく気さくな雰囲気が一匹の間に流れている。やはり、レジエンスにも友達とかそういう関係があるのだろうか。

「よし、ガリオン。とりあえず、リュドやディーノの家行け。」
「しかし、このままだと周辺の人間に目立ってしまうぞ。それにあまりマックには会いたくないのだ。」

グリードは、腕を組み目を閉じて考え始めたが、数秒で何か閃いたのか手をポンと叩く。

「そうだな…じゃあ、俺のタリスポッドに入れ。」

「!!!!!!グリードー、お前は私を莫迦にしてるのか!?それに私は行くと言も言っていないぞ!」

「仕方ねえだろ、それじゃあこの雲一つない青空をその黒い姿でビッグアップルと謳われるニューヨークの上空を飛ぶのか?」

「そ、それは…、そういう問題ではない!デリカシーというものがないのか!?私は、これでも女だ!」

ユウトたちはこの時初めてガリオンの性別を知った。この風貌では仕方ない気もするが…。

ユウトの横ではマリがメモ魔と化していた。メモには? レジエンスにも男女がいる!?!と走り書きされており、赤いペンでアンダーラインが引かれていた。

すると、グリードーがガリオンに近づき、ガリオンの頭に手を置く。

「そんなことは知ってる。」

「じゃあ、何故そう言った？」
「何故だと言われてもな……」

ガリオンが大きな瞳をグリードーに近づける。グリードーは後ろに少し後退りしたが、すぐ体勢を持ち直す。そして、一拍置いて鼻を搔いて口を開き始めた。

「まあ、お前だからだよ。」

「はあ!？」

「そんな驚くなよ、赤の他人を入れるかよ。特に女は以ての外だ!」
「つ、つまり、それって私のことが……」

「あつちにはお前の婚約者フォルデイス王もいるんだからよ。そんな焦って、ここで問題起こされちゃ困るだろ?」

「……!」

その時、ガリオンの顔が歪んだことに気付いたものはいただろうか。ガリオンは顔を俯かせる。まるで、グリードーにいまの自分を見せたくないかのよう。

「ガリオンって結婚するのか?てか、レジエンズも人間と変わんねえな、国とかもあるし、ましては恋愛とかもあるのか。」

「あ、ああ……そうだ。」

「ガリオン、俺のタリスポッドに入れたこと言うなよ。そんなこと言われたら、俺なんてすぐブタ箱行きだからな……」

グリードーがリュドにカムバックを促す。リュドは二匹分も入り込めるのかという不安を持ちつつもグリードーの言われた通りにする。グリードーとガリオンが光となってタリスポッドに吸い込まれていく。多少、大きくなり歪にはなったがなんとか入り込

むことができた。

「はいったね……」

「太くなっただけだな……」

『グリードー！どこを触ってるのだ！不埒者め！』

『仕方ねえだろ！家に着くまで我慢しろ！』

ソウルドール内から響く会話は案の定であったが、とりあえずこの騒動は一段落着きそうだ。

傍らで見守っていたBBも安堵の溜息をつく。

「とりあえず、一安心ね。私たちも業務に戻りましょうか。」

「ですね。」

「そうですね。もうちょっと休みたいですけどね。」

JJらもBBに続く。彼らも社会人の一人だ。本来ならこんな所で油を売っている余裕はない筈である。

「僕も一旦、家に戻ってグリードーたちを置いてくるよ。」

「僕も行くんだな！」

リウドとトミーはBBたちに別れを告げ、走りながら家に戻って行った。BBもユウトたちに注意をして自分の持ち場へと戻って行った。

「さうで、私たちは教室に戻りましょう！さっき聞いた情報をまとめなきゃ？」

「ホント、メモ好きだな！」

「勿論、ユウトにも手伝わせてあげるわ？」

「な、なんでだよ!」

ユウトの手を引っ張り、彼の意思に反するかのように教室に戻っていくマリたち。しかし、途中でユウトはいつものことだと諦め、マリに連れてかれることにした。コレ以上、グダッていてもどうしようもない、また理不尽な説教を食らうのはまっぴら御免である。

すると、マリが急に振り返る。何か気になることがあるようだ。

「なんだ? また何か見つけたのか?」

「いや、ちよつとね」

「?」

「さっきガリオンさんが言ってた? 戦い? って何だろうって思ってた」

そうだ、さっきそのようなことを言っていた気がする。

『……あの戦いの記憶を思い出させたくない……』

さっぱり分からないが、きっとレジエンスに関する事なのだろう。機会があったらシユウにでも訊いてみようと思った。

「さあな、」

「もう、ちゃんと話聞いた上での返事よね?」

「つたりめえだ。ほら、授業遅れるぞ。シロンたちもいくぞ。」

「わかったわよ」

「ガガガッ!」

また一段と騒がしくなりそうだ。ユウトはそう思わざる

を得なかったが、決して不快なものではなかった。

「フググ…（とうとう四属性が復活したか。何か不穏な気配がする…気のせいだといいが…）」

憂鬱そうに空を仰ぐランシーン。

そう、いつまでこの空が続くかはまだ誰も知らなかった。

―？

「んじゃ、二人とも喧嘩せずに大人しく待っててね。」

「なんだな。」

「余計なお世話だ！」

「リュドくん、トミー、いつてらっしやいなんだな！」

リュドたちが家に着き、グリードーとガリオンをリボーンする。二人は窮屈な場所にいたせいか気まずい雰囲気だ。リュドたちは気がかりだったが、マックが大丈夫だと言ったので彼に任せることにし、再び学校へと戻っていった……と思ったたらリュドだけが家にＵターンしてきた。

「忘れ物か？」

「ちよつと近いかも。はい、これ！」

「ん、指輪？」

「ハハッ、グリードーたちにはそれぐらいの大きさだね。」

グリードーはリュドから手渡されたものを手の中で転がして不思議そうに眺める。

「僕たちはブレスレットか何かと思ったけど、まさに帯に短し襷に長しっていう状態。指輪にはしてはでかいし腕輪にしては小さいんだよね……」

「そうか……」

しかし、グリードーにとってはそんなことはどうでも良かった。彼は別の何かを感じていた。グリードーはもう一方の手で

それを掴み左手の三本ある指の内の真ん中に嵌める。

「うわっ、見事なまでにフィットしたね！」

「グリードー、かつこいんだな！」

「ガリオン、どうだ？」

「グリードーには勿体無い代物だな。」

「相変わらず口の減らねえ奴だ……」

指に嵌めると同時に、体の中に不思議なエネルギーが巡って行く。それは単なる力と違い、懐旧の念を唆られるものであった。

「不思議だな……懐かしい感じがするとか何というか……」

「じゃあ、きっとグリードーのものだね！持ち主も見つかったことだし、僕は学校に戻るよ。」

リウドはグリードーたちに手を振り、再び学校へと戻っていった。

すると、それと同時に別室からディーノが出てきた。

「あれ、グリードー、帰ってたのかい？」

「よお、ディーノ。リウドが学校へ抜け出して俺たちを送ってくれたんだ。仕事はいいのか？」

「今日はBBさんに任せてるよ。僕は別にやらなくていいって言っただけだね……だから、今日は一日暇だね。ていうか、後ろにいるのって……」

「ガリオンなんだな！」

マックが嬉しそうにディーノに紹介する。ディーノはマ

ツクの気持ちがよく分かった。

「やっぱり…ガリオン、久しぶりだね。」

「ああ、ディーノ・スパークス。お主の息子は火のサーガらしいな…」

「うん、何の因果だろうね…。そうだ、グリードー、そのことも関係してるんだけど話があるんだ。」

「あ、ああ…」

グリードーはリュドを看病している時のディーノを思い出す。きっと、今から話すことはあの時に言っていた？いつか話さなきゃいけない事？なのだろう。

「マックたちにはすまないけど、席を外してもらいたいな。マックと二人で少し散歩でもしてきたら？少し振りに会えたんだから話したい事もたくさんあるんじゃないのか？」

「しかし、この風体では…」

「大丈夫だよ、開発中のホログラムとでも言っておけば何とかなるって。」

ガリオンはディーノの楽天的な発言に意外性を覚えた。それとも、その嘘を貫き通す自信の表れだろうか。どちらにせよ、今のガリオンには分からない事である。

「そうか、ではマックいくとするか。」

「はいなんだな」

マックはガリオンの背に乗り、玄関から共に空へと飛び立っていった。

「じゃあ、僕たちも部屋に行こうか…」
「ああ…」

ディーノは長く赤いスーツを靡かせ、グリードーと共に部屋へと入っていった。

「いい気持ちなんだな♪」
「ああ、そうだな」

ガリオンたちは一時の空の旅を終え、アメリカの象徴である自由の女神像の上で風に当たり、ガーリックハンバーガーを片手にニューヨークの景色を眺めていた。ガリオンは科学化されている街と何も無い青い空を見比べているようだった。

「マックよ……」
「ん？」
「私に会ってあの頃の記憶を思い出したか？」
「うん、もちろん…」

マックはガーリックハンバーガーを一口嚙り、一緒に買ったコーラを啜る。これはガリオンの大好物でもあるが、彼女の記憶を思い出させた重要なアイテムであったことも強ち間違いではないだろう。

マックは数十秒、昔を思い嗜め口を開く。

「確かにガリオンが思ったように悲しい事や辛い事も一杯あったけど…」

「…」

「それ以上に嬉しいことも楽しい事も一杯あったんだな…」

ガリオンは心を見透かされたせいか目を丸くする。マツクはそんなガリオンにニコツと笑顔をだけを向ける。ガリオンはマツクの持つ力を再認識した。

「そんな僕も正直怖いんだな。またあんな戦いになって皆が悲しむ姿なんて見たくないんだな。でも、今回は25年前とは違った形で…前よりハッピーエンドになれると信じているんだな。」

「そうだな…。すまぬ、マツク、つい弱気になってしまったな…私らしくもない…」

マツクとガリオンは見つめ合い、互いの想いをもう一度確認し合った。そして、ガリオンはマツクの言葉信じて決意を新たにした。

「そういえば、先程から気になっていたのだが…」

「何かな？」

「この空気が前より浄化されているのは気のせいかな？見る限り、25年で科学が進歩したように思えるが…それなのに何故空気がこんなに澄み渡っているのだ？」

「それはきつとカーボンエキステンジのおかげなんだな」

「カーボン…炭素かな？それが一体…」

「カーボンとは言ってるけど、実際はCO₂のことなんだな。性能は二酸化炭素を酸素に還元出来る機械なんだな。これのおかげで地球温暖化が抑制されたし、前より皆が元気になったんだな。」

ガリオンは自分達の願いを人間が叶えてくれたことに驚く。やはり、人間は侮れないとガリオンをひしひしと感じる。

「フツ、それを創り出した人物は偉大だな……」

「あつ、ガリオンはまだ知らないっけ？」

「ん？」

「それを創ったのは、シュウなんだな。」

「シュウ……風のサーガか！？」

「そうなんだな。」

ガリオンは啞然とする。当時のシュウしか知らない彼女はあのおちゃらけた性格からは微塵も予想出来なかった。

ガリオンは興味を惹かれたのかマツクに質問する。

「風のサーガが……シュウゾウ・マツタニがそんなことをやってのけるとは……私には想像しがたい。あの明らかにバカであった風のサーガが一体どうやって……」

「話すと長いから省略するけど……ある日ね、国際連合環境計画、通称UNEPの地球温暖化に関する会議が生放送で行われたんだんだな。僕はシュウが出るっていうからテレビの前でみてたんだな。で、議決しようとしたときなんだけど……」

「えー、議決はこれで良いですね？」

「駄目だ、」

『DWC代表のシュウゾウ・マツタニ氏、異論があるのかい?』

『そんなものでは、何の解決にもならない。』

『もう少し言葉使いを弁えた方がよろしいのではないですか?』

『…そうですね、すみません。では、私の見解を言いさせてもらいます。その対策じゃ何も変わりません。』

『では、貴方はどうしろと言うのです?』

『国連の予算のトータル半分を地球温暖化対策に回す!そして6ヶ月間、アメリカ全土の州、市全ての消費税率を30%にまで引き上げることを認めて欲しい!』

「マツクよ!それはいくらこの地球の文化に疎い我らレジエンスですら無謀な事だと判るぞ!!そうなってしまうては、他の機関での対策が疎かになり、下手をすれば秩序が乱れてしまう!」

「ガリオンの言う通りなんだな。でもシュウはやっぱり諦めることは知らないんだな…」

『お前は物事を考えてきちんと発言しているのか?』

『もちろんです。約半年ですが、国民には生活をできる限りの制限させてもらいます。その集まった税金と予算の半分を使って、此方で開発中の二酸化炭素を酸素に還元出来る装置の全世帯設置を行います。』

『それでどうなる？』

『この装置はスペースシャトルなどで使われている水酸化リチウムの二酸化炭素の吸着と植物の行う光合成を応用したものです。そして、大気中のCO₂濃度によって起動を自動調整してくれます。』

『ふむ、今まで難航していた光合成の研究の成果を上げるとはね…』

『お褒め頂き有難うございます。さて、理論上ですが、この計画が成功すれば…』

「…すれば一年で約10%のCO₂濃度の減少になるんだな。まあ、アメリカ国内だけだね」

マックはずっと喋っていたので喉が乾いてしまった。コーラをもう一口飲み喉を潤す。

すると、ガリオンが体勢を崩し、マックに再度質問する。

「それで、成功したのか？」

「うん、色々あったけど成功したんだな。議決がそれになった後、計画当初は暴論だの何なのって、バッシングされたこともあったし、誹謗中傷も激しかったんだ。マッタニ家は一時、離婚の危機すらあったんだな。擁護していた僕たちも巻き込まれかけたけど…」

「乗り越えて成功した…というわけか…」

「うん！」

ガリオンはガリックハンバーガーを手に取り口の中へ

と放り込む。

それを食べながら、シユウを初めとする人間の力は侮れないと、つくづく思うガリオンであった。

「あー、もうこんな時間だね。日が暮れてきたよ。さっきまで昼過ぎだった気がするけどね。ディーノたちも話がきつと終わってる頃だし、トミーも帰ってるかもしれないんだな。」

「では、行くとするか…んっ？」

ガリオンはふとマックが昔と比べて違うことに気付く。
もちろん、体格とか性格とかそんな安直なものではない。

「ガリオン、どうしたんだな？」

「んっ…いや何でもない。さあ行こうか。」

マックがガリオンに飛び乗り、行きの道順に沿うように空を翔る。

「風が気持ち良いんだな…」

「ああ…（何だ、さっきの不信感を唆ったものは…」

確かに視えた、マックの服の裾から覗いた…深く茶色に変色した傷跡が…）

「ガリオン、夕陽が綺麗なんだな」

「あ、ああ…本当に美しいな。」

ガリオンはマツクの腕の傷を見ぬふりをし、至って穏健なマツクに調子を合わせた。

「（この25年で何があったのか…マツクには何れ聞かねば…）」

ガリオンは速度を上げ、家路へち羽を広げた。

―？

「デイーノ、それは本当なのか？」

「…うん」

薄暗い部屋で密会をするデイーノとグリードー。話は小
一時間程度だったが、グリードーは突然の告白に惑っているようだ
った。グリードーは腕を組んで、先程、リュドから貰った指輪を肘
に当て不安定なリズムをとっていた。

「リュドには言っていないのか？」

デイーノは黙って頷くだけだった。グリードーは呆れと
憂いに混じった溜息を吐く。尻尾の先からでる炎がチラリと揺れ、
陰影が不定形に姿を変える。

「何故、俺に話した？」

「……」

「俺が代弁するとかいう淡いを期待しているなら無駄だ。こればか
りはお前自身の意思に懸かっている。いずれにしてもあいつが傷付
くのは…」

「…わかってるさ」

デイーノは部屋を回るようにゆっくりと歩く。グリード
ーはただそれを目で追うだけで何もしない。デイーノは数分歩き回
った後、立ち止まりグリードーに顔を向ける。

「グリードー、リュドのことこれからよろしくね。あの子もお前

のこと好きだし、」

デイーノは無理強いされた笑顔を作る。グリードはそれに？ああ？とだけ言い、頷く。

「父さん、ただいまー！」

「ただいまなんだな」

リュドたちのまだ声変わりのしていない甲高い声が玄関から響く。どうやらリュドたちが帰ってきたらしい。

「子供たちが帰ってきたよ。明後日はクリスマスパーティーだし、その準備もしなきゃね。勿論、グリードも手伝ってね。」

デイーノはそう言い残すと足音をカツカツと鳴らして部屋を出ていった。

「デイーノ……」

そして、ドアをボタンと閉め、デイーノはそのままドアに凭れかかる。

「はあ…話しちゃったな。僕ってやっぱり卑怯だな…」

「父さん」

「リュドのお父さん、ただいまなんだな。」

「おかえり。」

「ねえ、父さん、聞きたいことがあるんだけど、トミーがさ……」
「え、なんだい？」

「これが僕のウエストポーチに入ってたんだんだな、」

「それは…」

「トミーも…」

数分後、マックとガリオンも家に帰ってきた。

マックは久し振りにガリオンと話せたのかとても満足そうにしていた。

「おかえり。」

「ただいま、なんだな。」

「お父さん、これ見てなんだな！」

帰って一息つく間もなく、トミーがマックにある物を見せる。

「どうして、トミーがそれを…」

「ガリオン、僕が土のサーガなんだな！」

トミーは嬉しそうにガリオンに駆け寄る。彼の中にも、皆はサーガになったのに自分だけそれになれていないことに劣等感があつたのだろう。本当に…相当嬉しそうにしていた。

「ガリオン、これからよろしくなんだな♪」

「あ、ああ…」

ガリオンはマックの様子を窺うため彼をチラリとみる。

「ガリオン、トミーをよろしくなんだな！」

ガリオンはマツクの笑みが妙に痛々しかった。マツクはショックではないのだろうか。もしかして不安を感じているのが自分だけなのだろうか、そう思うほどだった。

不安を頭に渦巻かせていると、それを察したのかグリードーがある提案をする。

「なあ、ガリオン、一杯やらねえか？」

「ああ、だが…」

「別に頼まなきゃいいんだ、メインはそれじゃねえしな…」

「そうか…わかった。」

「グリた〜ん！！」

ディーノの後ろから突如ガリオンが飛び出してきた。普段でも怖いというのに不意に出て来られては絶叫物だ。

「ガリオン、次にその間抜けな呼び方したら…わかってるな？」

「怖い顔すんなよ！っていうか、俺も行っていいか？ガリ姐さんとも話したい気分です！」

「その下品な呼び方はやめんか！」

「俺はいいが、ガリオンは？」

「お前の親友だ。まあ、躰がなっていないが、拒む理由は無いだろう。」

マツクとディーノは無言の承諾をグリードーたちとガリオンに向ける。久し振りに語らってこい、という意味が読み取れた。そして、グリードーを先頭に飛び立つ。もちろん、目指すは――

「いらつしゃいませ…」

「よお、マスター！…ダンディはまだいないのか？」

「はい、まだ復活してないのでしょうか？」

「いや、リーオンから聞いたが、ストームのビッグフットが復活したからきつともういると思うぜ。まあ、とりあえず座らせてもらう。」

グリードーに続いて、左隣にリーオン、右にガリオンが座る。エドは、店のドアに掛けてある開店の表示を閉店へと変えた。そして、ガリオンは初めてくる店をキョロキョロと眺めていた。

「中々、気品の溢れる落ち着いた店だな。」

「ありがとうございます。すみません申し遅れました、私はエドと言います。」

「私はガリオンだ、よろしく頼む。」

二人の挨拶を他所にグリードーたちはエドに注文する。リーオンは先日食べたパエリアとスウィートⅡダンディを頼み、グリードーはテキーラの石油割りという奇怪な注文をする。

「グリードー、少しは自重した注文にしないか…。お前の好みが露呈されとるぞ。」

「たまに飲みたくなるんだ。これのブランドはうめえんだ。そうだ、ガリオンにもスウィートⅡダンディを出してくれ。」

エドは素早くシェイカーを振り、そしてガリオンにスウィートⅡダンディ、リーオンとグリードーにも注文されたものを差

し出す。ガリオンは少し如何わしそうにそれを数秒見つめた後、手に取り口の中へと流しこんだ。

「美味い…」

「お褒めの言葉ありがとうございます。こちらスウィート＝ダンディは誰の口にも合うように試行錯誤された『ワニの穴』の至高の品です。開発者はダンディさんですけどね。」

「味にうるさいお前にも合って良かった。」

グリードーはガリオンの方を向いていた訳ではないが、嬉しそうに自分の酒を一口啜る。

「じゃあ、本題に……」

バタンッ

突然、入り口のドアが開く。そして、何かがドタッと光る床に倒れこむ。

「すみません、いまは閉店で……」

エドは倒れたそれに警告するが、返事がない。しかし、どうやら俯せに倒れたのは人ではないらしい。一目見てわかった。体中に蒼い毛がはえており、赤いダルダルのスウェットの様なものを着ている。よくみると、所々、創痕が目立ち赤みがかっていた。

「レジェンズか？おい、大丈夫か？」

グリードーが倒れているレジェンズらしきものを仰向けにする。顔が明らかになったのを確認したグリードーは驚愕する。

「ん…」

「ウォルフィー!?」

「うーたん!」

数分後、傷付いたウォルフィーをカウンターの奥にある控え室へ運んだエドが戻ってきた。

「おい、ウォルフィーは大丈夫か!？」

「傷は少し深かったですけど、処置しましたんで安静にしていれば大丈夫ですよ。まあ、タリスポッドの中が一番安全ですがね……。」

「ひとまず、様子を見ようか、後でディーノの家に送っていく。リーオン、ウォルフィーの傍に居てやってくれないか？」

「お、おう…」

リーオンはカウンターの裏に回り、ウォルフィーの居る控え室へと急いでいった。

「…お前は行かなくていいのか？」

「あまり大勢で行ったら、ウォルフィーを起こしちゃいかもしれんな。それに、今はそんなことは関係ないんだ。」

「…さっきの続きを聞かせてくれ、」

グリードーはウォルフィーの居る部屋を脇見し、そして覚悟を決めるためか、グラスに残った酒を一気に飲み干す。普段は酒に強いグリードーも今日はいつも赤い顔を更に赤くさせていた。

「では、ガリオン、何故俺たちは甦ったと思う？」

「さあな、レジェンズウォーがまた勃発するかもしれないと今のと

ころはそれしか言えない……。」

「何故、新たなサーガが出た？それも、前の戦いに関わった人間の身内だ。」

「答えはさつきと同じだ。いまは情報が少な過ぎる。」

「じゃあ、もう一つ質問だ……。」

「……この25年で何があった？」

「ふんっ……我々の復活がこの25年の間の出来事に関与したとも言うのか？少なくとも、地球の状態は前より良好だ。あのシュウゾウ・マツタニが良い働きをしてくれたらしい。」

ガリオンはスウィート＝ダンディを飲み干す。エドはガリオンにもう一杯勧め、ガリオンは快くそれを受ける。

「25年だ、俺たちレジエンズにとっては生涯の数%にも満たねえ……。しかしな、人間にとっては大きな時間だ。」

「……」

「デイーノ、シュウ、メグ、マック……こいつらもサーガだったといえども所詮、『人間の一人』。現に、デイーノは社長になって当時

のDDTをDWCに次ぐ勢力まで成長させた。シュウもメグと結婚している。マックもそうだ。…みんなガキだったのによ。」

グリードールの尻尾の炎がちらつく。エドがその話を聞いていたのかは分からないが、唯々グラスを磨き続けていた。

「俺が言いたいことわかるか？」

「……」

「みんな、変わっちまったんだ…」

ガリオンはこの言葉で昼のマックを思い出す。

……裾から覗く、茶色に変色した傷跡…

「ふっ、そうかも…しれないな…」

こうして二人の25年振りの酒の時は終わった。

別に、リウドやマックの話はしていない。しかし、それを聞いた時、25年の重さを感じた。

時の重さを…。

皆、『大人』になっただけだ、生きていれば悩みも増える。

二人は、そう思うことにした。

「はあっ…はあっ…」

「残念、行き止まりのようですね。」

「クソっ！レインアロー！！」

「ふんっ、こしゃくな…ダルク！」

「何っ！？ダルクを高速回転させて、攻撃を打ち消すって…」

「さあ、早く来い！お前は既に、自我を保ってるのが精一杯な筈だ…そのエメラルドのように光る眼が何よりの証拠だ。」

「うるせえ！！お前らの野望に呑み込まれるのはゴメンだ！！俺には…行かないやいけねえところがある！！！」

「アブゾル…」

「ぐあっ！力が…抜けていく…?!」

「アブゾルは相手の体力を奪う技です。あまり使いたくありません

でしたがやむを得ませんでした…」

「俺は……まだ堕ちねえ……こんな……ところで……んっ！ああああああああああああッッ！！！！やめろおおおおおおおッッ！！！！！」

「ハハン、もがき苦しむ姿は人間もレジエンスも変わりないんですね。仕方無いので、洗脳を強めてみました。」

「やだ……だっだああっだああああああああああああアアアアッッ！！俺は俺は人間なんて憎くない憎くないんだああああああああ！！！！」

「役に立ってくださいよ、我らの御主人のためにもレジエンスのためにも、」

ねえ、『ワニの穴』のバーテンダーのダンディ・クロコダイルさん……？」

蝙蝠が暗闇が広がるかのように飛び去る。飛び去った場所に残っていたのは、静寂と一輪の黒い薔薇だけ。

飛び去った蝙蝠が街中に拡散して飛んでいく。一瞬だが、月が蝙蝠に隠れて見えなくなる。

すると、蝙蝠が飛び去った場所に違う影が現れる。それは黒い薔薇を拾い上げた。

「確実に闇が強まってるわね…あなたはと思う？」

「クヒヒヒ、我らの好物ではないか…」

「でも、私たちは希望のためにここニューヨークに来てるのよ？」

「関係ない、我は闇が多く喰えればそれで構わない、クヒヒヒ、」

「はあ…風のサーガたちは一体どこに居るのかしら…折角、遣われてきたというのに。こんな女の子に余り徒労をかけさせないで欲しいわ。」

一人の少女が夜空に向けて薔薇を投げ捨てる。すると、薔薇は暗闇に溶けて消えてしまった。

少女は月を見上げて、自分の使命を志すだけだった。

...to be continued

―？（後書き）

一応、投稿済みの読みやすいように小分けしてみました。というか、
自分が読みづらいつらいつたのですね・・・
E p . 7 はもう少しお待ちくださいね ^^

「ん……朝か……」

?? ? 小鳥の囀りで目を覚ますランシーン。

?? ? 深夜に及ぶ調査の途中で椅子に座ったまま寝てしまい朝になってしまったようだ。

?? ? 今の時刻を知るために机に置いてあるリング型のデジタル時計を確認する。

「12月25日、8時32分か……。確か今日は……」

?? ? 座位のまま寝たせいか肩が凝っている。ランシーンは肩を回して少しの体操をした。ギシギシと鳴る肩を気にしつつも立ち上がる。すると、その拍子に机上にあった数枚のメモが落ちてしまった。

「……」

?? ? ランシーンはメモを拾い上げる。それには数字が記載されていた。筆跡を見る限り、彼自身のものだ。

?? ? メモにはこう書いてある。

12/20	...	7	hours
12/21	...	8	hours
12/22	...	9	hours
12/23	...	7	hours
12/24	...	8	hours

「偶然の産物か…。何故、私がこれを調べようと思ったんですかね、クフフフ…」

「??? ランシーンは乱雑に落ちているメモをもう一枚拾う。それは先日マリに見せたものと同じものだった。」

「風が切れ、水は砕け、火が呑み込まれ、大地の呻き声が無くなる。そして、光は捻れ、闇が裂けし時、封印されし禁忌、此処に再誕す。……。」

「??? 窓辺に寄って空を見上げる。東日がニューヨークの空を見下ろし朝を知らせ、忙しく歩き回っている通勤者や学生に活力を与える。ランシーンは他人事のようにただ人々を眺めていた。」

「5000年前に封印された忌まわしき力…可能性は大きいですが…。とりあえず、シロンたちの元に行きますかね…」

「??? ランシーンは散らかった物を片付け、暗い部屋を後にした。」

「よし！キザ夫ん家行くぞー！」

「ホント、ハイテンションね。まだ時間まで全然よ！」

「準備手伝いに行こうぜ！仕事も今日だけ休みとったしさ！！なん

ていうか童心に帰るぜ！」

「ずっと童心でしょ！」

「??? 何故、シウがこんなにも気が昂っているのかというと本日12月25日はクリスマスだからだ。毎年、シウを含むいつものメンバーでスパークス家に集まってクリスマスパーティーを行う恒例行事である。今回は特別にヘップバーン家も参加する。しかし、サスケやユルは仕事の都合で参加できないそうだが、楽しんでいと言っていた。クリスマスとレジエンスの歓迎と一緒に祝えないのは遺憾だが仕方がない。」

「よっしゃ！ユウト行くぞー!!」

「ユウトならいいわよ。」

「え？」

「ユウトはマリちゃん連れてディーノの家に向かったわよ。」

「??? 喜びを直に共有出来る人がいないことに嘆くシウ。」

「メグ、お前も少しは喜べよー！俺だけがバカ騒ぎしてるみてえじゃねえか！」

「そりゃ、私だって楽しみよーほら新しい他所行きの服を買ったのよ！このドレス似合う？」

「お前さ、仕事関係の披露宴とかに付いてく訳じゃないんだしもつとカジュアルな感じでいいんだぜ……」

「??? しかし、メグは話を全く聞いてないようだ。新調したエレガントなピンクのドレスを両手に小躍りしている。シウは腰に手をやり、やれやれという感じで苦笑していた。」

「じゃあ、俺は先行ってるぞー！」

「ちょっと、ドレスで歩けって言つの？待って、ミートパイとアップルパイとピーチパイを持ってかなくちゃ、さっき出来たのよ。」
「パイばっかだな……」

？？？ 黒のダウンコートを着たシユウが外に出る。そして、車の側でポケットに手をつ込んで、携帯電話で何か連絡を取り始めた。シユウは念のため腕時計と携帯電話の両方を持っているが、腕時計は仕事用、携帯電話はプライベートと分けている。とは言っても、前者は『DWC開発商品』という名目があるため社員の一人であるシユウが持っていないというのは沽券に関わる訳で……。以前、腕時計が連絡として主流と言ったが、決して携帯電話が廃絶したという訳ではないのでそこは勘違いしないで欲しい。携帯電話、PCなどは今でも十分役立つメディア機器である。

「じゃあ、出発すんぞ！つーか、ちょいDDTに寄らせてくれ。」

「いいけど、何するの？」

「まあまあ、楽しみにしてろよ。」

メグは気になりつつも？あっそ？と空返事をしてシートベルトを締める。

シユウはそれを確認し、アクセルを踏んで、枯れ木の間を走り去っていった。

「??? 一方、ここはスパークス家。」

「クリスマスパーティーの準備が昨日に引き続き行われている。」

「ユウト、ちょっとその赤い玉取って、」

「ホイホイ」

「??? リュドとユウトは大広間の隅に置いてあるモミの木、所謂、クリスマスツリーを造っていた。」

「ここ大広間は、100人は余裕で収容できるキャパシティがある。ユウトたちは合計しても100人などという数字には到底及ばないが、今回はシロンたちレジエンスという珍客がいるためこの部屋を使っているという訳だ。」

「リュド、俺にもやらせろよ!」

「ダメダメ!これは絶対僕にやらせて!一年かけて考案したデザインがあるんだから!」

「??? リュドはそう言ってクリスマスツリーのデザインを描いた紙を脚立に乗りながらユウトの顔に突き出す。」

「へいへい、」

「よし、ユウト、その綿とって。」

「

「??? ユウトは渋々、リュドの言う通りにする。ユウトは、リュドがいいならそれで構わないと自己完結することにした。」

「……？　そして、リュド指示の下に作業を進め、小一時間後にそれを終えた。」

「ふう、終わった！」

「おお……。」

「……？　リュドがプロデュースしたおかげかクリスマスツリーは随分大層なものとなった。光沢のある赤、青そして緑の玉が絶妙な色遣いで配置され、コットンはまるで白波のように玉たちを弄び、煌くモールたちはそれを強調するかのようについにコットンに纏っていた。キャンドルや電飾が点けば、美しさはより際立つものとなるだろう。今は、光ファイバーとか、プラスチック製のものが多いというのに……見事としか言えない。」

「リュド、スゲー……」

「コレだけは上手く出来るって自負してるからね！　数少ない自慢が出来ることだね！」

「……？　確かに、リュドは基本的に何でも出来るハイスペックな人間だが、それを鼻にかけることは稀である。だからこそ、ユウトはその自信が本物であることはすぐに理解できた。」

「わー！　このクリスマスツリーキレイね！」

「スゴいだな！」

「……？　何処に行っていたのかマリとトミーがクリスマスツリーの傍に寄ってきた。ユウトは声に気付き、マリの方に向き直ることに啞然とした。」

「マリ……その格好はなんだ？」

「じゃじゃーん！皆大好きなサンタ服よー！」
「なんだな」

「？　？　マリはくるくる回ってサンタ服を披露する。女子用なためワンピースのような造りになっている。」

「まあ、マリつばくて良いと思うぜ。」

「なによ、『私つばい』って？」

「なんていうか自分が良いと思ったものは他人も好きだだだだあ
あつっ！！？？」

「ほら、言いたいことあるならいいさーい」

「？　？　マリがユウトの耳を引っ張る。もちろんだが、ユウトの耳は耐え難い痛みが走る。ユウトは必死に堪えてマリに弁解しようとした。」

「はい！可愛いです！素敵です！」

「あら、そう？」

「？　？　マリは抓んだ耳を放し、サンタ服のまますぐそこにある椅子に座り、足を組む。」

「まあ、私が言いたいののはこれが似合うかどうかじゃなくて、ただユウトがどう思ったことを『下らない御託並べずに』言っただけだったの！」

「『下らない御託』って何だよ！『下らない御託』って！」

「？　？　おお、ユウトが珍しくマリと喧嘩してる。リユドは何故か微笑ましそうに見ていたが、トミーはその様子をきちんと確認していた。」

「つたく、なんだか騒がしいな…」

??? ? すると、マリが出て行ったところからシロン、ランシーンそしてグリードールとリーオンが入ってきた。シロンは怪訝な顔をしてユウトたちを覗き込む。

「マリが顔真つ赤にして部屋から出てきたが…なんかあったのか？」
「うん、別に何でもないよ！」

「うお、これが噂のクリスマスツリーってヤツですかい、リュド坊ちゃん？」

「うん、僕が創ったんだ！ねえ、ユウト！」

「あ、ああ…」

??? ? リュドが何事もなかったかのように振舞う。一方のユウトはマリの態度が理解できずに懊悩していた。

「そんなことよりさ、グリードール、ウォルフィーっていうレジエンスは大丈夫なの？」

「まだ、覚えてないんだ……」

??? ? ウォルフィーは、あの後、スパークス家にグリードールとリーオンが運んで戻ってきた狼中年である。傷は少し癒えたが、その時から今まで目を覚まさず眠っている。呼吸はしていたので、生きていることは生きているが…。

「そっか、今日中に良くなるといいね。今回はグリードールたちレジエンスの歓迎会も兼ねてるし。」

??? ? リュドは微笑してグリードールを見た。ウォルフィーは彼の親友の一人だ。リュドは、機会があったら、どのような出会いを

「…ん、何の音ですかね？」

「なんか聞こえるか？」

「あ、ホントだ。一体何が……」

「リッパ……！！！！」

「うおおい!？」

「風のサーガ!?おい、ズオウ落ち着け!」

「たあああすうふうけえええてえええ〜〜!」

234

「?? ? ユウトは間抜けな声で助けを求めるが、みんな暴れるズオウを危険視して近づくことができないでいた。すると――」

「ズオウ、止めて！」

「?? ? みんなドアから聞こえた叫び声に振り返った。なんとそこには先程までここにいたマリであった。」

「でも、マリ……」

「『でも』じゃないわ！人や物を振り回しちゃダメよ。」

「?? ? ズオウは凋落してしまったが、素直にマリの指示に従い、ユウトを床に下ろす。ユウトは一時的な煉獄を味わい、すっかり目を回していた。」

「おえ……クラクラして気持ちわりい……」

「ユウト、大丈夫？」

「?? ? マリがユウトに肩を貸す。」

「マリ……いきなりどうしたんだ？」

「ただズオウに愚痴っただけよ。だけど、大袈裟に捉えてたから、心配になってここに来たの。」

「?? ? ユウトは相槌を打つ。二人が普通に会話するのを見ていたシロンは少し眉をしかめた。」

「はあ、心配して損したぜ……」

「子供とはそういうものですよ、フフフ……」

?? ? スッキリしないがムードが落ち着いたようだ。すると、メリッサが広間に巨体を揺らしながら、今にも折れそうなヒールで入ってきた。

「リュド、お父さん帰ってきたよ。」

「リュド、おか…」

「やあ、皆さん！ちゃんと準備していますかあ！？」

?? ? デイノそしてシュウとメグがやってきた。シュウはいつも以上に興奮しているようで、メグが怪訝そうな顔をしてるのが遠目で見てもわかった。しかし、メグの顔が直ぐに驚きに満ち溢れる。

「ズオウ！ズオウよね！？」

「ん…！メグッ！」

?? ? メグはズオウに走り寄って迷いなく抱擁した。ズオウも飛び込んできたメグを大きな腕で優しく包む。

「ズオウ、会いたかった…」

「メグ…」

?? ? マリは二人の反応に戸惑っていたが、シュウがマリに耳打ちをする。

「あいつらは前のサーガとそのパートナーなんだ」

「えっ、そうなの！？」

?? ? マリはその事実には驚愕したが、あの二人の睦まじい様子

を見てみると、それにも納得することができた。ディーノはメグを見て微笑したかと思うと、タイミングを見計らって話を切り出す――が、

「リユド、今日は君に……」

「ユウト！お前にプレゼントだ。すっごい役立つものだぜ！」

？？？ シュウはそういうと黒が基調で青の縁が目立つ箱型の機械をユウトに渡す。ユウトはそれを手に取り表、裏と確認する。上を見ると、3つの筒状の穴が空いていた。

「何これ？タリスポッドに似ているような……」

「おお、勘が良いな！それはタリスダムって言うんだ。ソウルドールを3つまで入れられるんだけど、それでリボーンするとな――
んっ！？」

？？？ シュウが危つく言おうとしたところをディーノが手でシュウの口を塞ぐ。そして、ディーノが小声でシュウに忠告する。

「んっ……んっ！んんん！」

「シュウ、落ち着け。エレメンタルレギオンのことを話したら必然的に子供達にレジエンズウォーのことを話さなきゃいけないぞ
！」

「ん……」

「それに僕の台詞を取るな！」

？？？ ディーノはシュウが落ち着いたのを確認して手を離れた。シュウは何故か偉そうにディーノの肩をポンと叩いて、心配無用なことをディーノに明確にした。

「ん〜と、何だっけな忘れちまったなあ！ハハハハ！」

「でも、父さん、俺3匹もレジェンズ持っていないよ？」

「まあ、多い方が良さだろう！」

「？　？　シユウは笑って色々と誤魔化すが、ユウトはそうしたこととお見通しだ。しかし、ユウトはあえてそこに突っ込むことはしなかった。

「じゃあ、次は僕からリユドに…」

「ほいつ、リユドにはこれだ！」

「？　？　シユウはリユドにもタリスダムを渡した。ユウトのは違
って赤の縁となっている。

「ありがとう、ユウトのお父さん。」

「礼には及ばねえよ！」

「シユウ、僕、本当に怒るよ？」

「？　？　シユウは悉くデイーノを無視し、遂にはタリスダムの説明を始めた。

「お前らの持つてるタリスポッドには『属性』っていうのがあって
だな…」

「？　？　シユウがいたらだとタリスダムの説明をする。一方でシ
ロンはただそれをじーっと見つめていた。

「あいつ、変わったな。」

「何を今更…シユウも大人になったんですよ。」

「ああ、なんていうか実感が湧かねえぜ！俺にはあいつらは昨日

まで小せえガキンチョのように思ってたのによ。」

「？　？　シロンは腕を組んでシュウを見つめる。このように『人に説明する』という動作は当時のシュウにとって非常に苦手な動作だった。それはシロン自体も目の当たりにしていることであって、シュウ自身も自覚していた。しかし、別れから25年の年月が経ち再び出会ったこの時には既にそんなことは彼にとって容易なそれに変化していた。シロンはそんな事実には妙に困惑していた。

「へえ、どんなレジエンスも入れられるのか。じゃあ、シロンとランも同時に入れられるってことか。」

「それは『風のタリスダム』だしな、中は快適だと思うぜ。リュドのは『火のタリスダム』だ。」

「？　？　ユウトはシュウに礼を言った。ディーノは愉快に笑ってるシュウを見て不服と呆れの混じった溜め息を吐く。

「はあ、グリードー、ウォルフィーの様子でも見に行こう！」

「ん、ああ……」

「おい、キザ夫、どうした？」

「何でもない！それに僕はディーノだ！」

「？　？　ディーノはグリードーを連れて外に出て行ってしまった。シュウは疑問した表情でユウトを見るが、彼は苦笑するだけだった。

Ep.7 僕らの出会いがプレゼント♪Happy Merry Xmas♪

これから小分けして連載していきます。

一ヶ月も空けてしまう時もあるんでw

とりあえず二週間のごとの更新が目標ですf^_^(:)

I? (前書き)

* 流血表現あり（微量だけど）。苦手な方は注意！

「？」

「全く、シユウにはほとほと呆れるよ！」

「フツ…でも、お前たちは傍^{はた}から見ると仲良しにしか見えねえぜ。」
「うつ…、ま、まあ、否定はしないけどさ、うん。」

「？　？　？　デイーノはグリードーにシユウの愚痴を零しながらウォルフィーの部屋へと向かった。そして彼を起こさないように静かにドアノブを回す。」

「ぐっすり眠ってるね…。」

「ああ、」

「？　？　？　ウォルフィーは特に異常も無く熟睡しているようだ。デイーノは側にあつた籐家具の椅子をベッドに寄せて座った。」

「それにしても、いきなり傷だらけでバーに来たって…妙な話だね。」

「

「ああ、恐らく相当離れた場所に復活した、もしくは…。」

「もしくは？」

「もしくは、誰かに襲われたという可能性もあり得るはない。」

「？　？　？　デイーノは背もたれに体重をかけながら、手を顎にやり考え込む。グリードーの考えも一理あるが後者の考察には若干同意し難い所があつた。」

「最初の考えは納得出来るけど、次のは微妙だね。一体、誰がウォルフィーを襲つたのさ？まず、人間は除外出来ると思うし…。」

まさか、レジエンズ？

「その場合はその可能性が高いな。」

「？　？　グリードーは頂垂れた声で答える。」

「敵対するレジエンズが居るってこと？　ジャバウオックが関係しているのかな…」

「それもあるが、可能性は低いだろう。レジエンズウォーは約一、二千年単位で繰り返されていた。それはジャバウオックの力の根源である人間の負の感情が充填期間みたいなものだ。しかし、今回はたった25年しか経っていないからな。とてもじゃないが、ジャバウオックは復活すら出来ないかもしれないな。」

「？　？　グリードーは苦笑混じりでつらつらと自分の考察を述べる。デイーノは思う。もし、グリードーの考察が正しいとすると――
――新たな敵対勢力が現れた……ってことか？

「ん…、ああ…」

「あつ、グリードー！　ウォルフィーが起きたみたい！」

「本当か！？」

「？　？　ウォルフィーがやっと起きたようだ。デイーノは安堵したが、話し声で起きてしまったのなら申し訳ないとも思った。ウォルフィーはベッドに手を付き体を重々しく起こす。」

「ウォルフィー、大丈夫か！？」

「ん…？　グリードーか？」

「ああ、そうだ。」

「そうか、俺は大丈夫だが。頭が痛えな…、ガンガンする。ここは

どこだ？」

「……？ ウォルフィーは虚ろな目で部屋を見渡すと、ベッドの上で寝ていることに気付く。そして、この場所はどこか既視感があることにも気付いた。」

「ここは、ディーノ坊ちゃんの御屋敷……」

「そうだよ、ウォルフィー大丈夫かい？」

「……？ ウォルフィーは聞き覚えのある声のする左の方向をみると、心配するディーノが見えた。」

「ディーノ坊ちゃんですかい？」

「久しぶり、25年振りだね。」

「随分、大きくなったんですね……」

「まあ、一応大人にはなったつもりだよ。子供も居るし……」

「……？ ディーノはウォルフィーが無事なようで安心した。グライダーも勿論そう思った。しかし、次の瞬間事態は一変する。」

「ウォルフィーも気分が良くなってきたら、広間に来てよ。今からクリスマスパーティーをするんだ。」

「そうか……じゃあ俺もすぐに……うっ？！」

「……？ ウォルフィーが突然、頭を抱えて苦しみ始める！」

「ウォルフィー、大丈夫！？」？

「ディーノ坊ちゃん……ハアっ、離れて……！！！？ぐああ……！！」

「……？ ウォルフィーは鳴咽を漏らすと共に、左手が挙げられ爪をディーノに振り下ろす！」

「……！」

「……？ 水つばい音と共にディーノに赤い液体が跳ねる。しかし、それは……」

「……大丈夫か、ディーノ？」

「グリードー……君、僕を……」

「……？ ウォルフィーの振り上げた鋭い爪はグリードーが間一髪で手で抑えた。そのせいで、爪がグリードーの手に見事に食い込んでしまっている。」

「……グオオオオオオツ……！」

「ウォルフィー、どうしたんだ……！」

「グリードー、様子がおかしいよ……！」

「……？ グリードーはディーノを自分の背後に隠れさせる。ディーノはグリードーにしがみつきウォルフィーを心配そうに見つめる。」

「ウォルフィー、その目はなんだ……！」

「エメラルドみたい……！」

「……？ すると、ディーノの背後でガチャリとドアの開く音がする。ディーノの心に不安が過る。」

「父さん、ウォルフィーのためにおばあちゃんがリゾットを……」「リユド……！」

?? ? リュドがウォルフィーの様子を見に来たようだ。何とタ
イミングの悪いことだろう。

?? ? そしてウォルフィーがそれに気づき、グリードーから爪
を抜き、血を滴らせながらグリードーの脇をすり抜けリュドに飛び
掛かる。

「グガアツツ!!」

「ぬぁ!？」

?? ? リュドは反射的に仰け反り、メリッサ特製のリゾットを
犠牲に攻撃をギリギリのところで躲す。リュドにとって突発的な出
来事の何物でもない。後ろに尻餅を着くのと同時に持っていたタリ
スダムが床に落ちる。ディーノはそれを見て閃いた。

「リュド!タリスダムでウォルフィーをカムバツクしろ!」

「え…う、うん!」

?? ? しかし、我を失ったウォルフィーは目を翡翠のように光
らせてリュドへと鋭利な爪牙を容赦なく向けてくる!

「ウォルフィー、カムバツク!」

「グガガアアアアツツ…」

?? ? リュドの鼻先まで近付いた爪が砂塵へと変わる。そして
肢体も砂へとなりタリスダムへと吸い込まれ、ソウルドールと化し
た。

「…入った。」

「はあ……」
「……」

「……？　？　ディーノは溜め息を吐いてへなへなと腰を抜かす。グリードも冷や汗を拭い取った。どうやら、事なきを得たようだ。」

「おーい！」

「……？　？　すると、シュウたちが騒ぎに気付き此方に来た。勿論、他のレジエンスも一緒だ。」

「大きな音がしたけど、何かあったのか？」
「実は……」

＊

「へえ、あの狼中年がねえ！」

「……？　？　シュウたちは広間に戻り、いま起こったことを説明した。シュウは腕を組んで親身に聞いている。」

「何とかタリスダムに収めたんだけど……。今、リボーンしていいかはわからないな。」

「タリスダムはレジエンスのリカバリーのプログラムを組んでるか
ら大丈夫だと思うぜ。」

「……？　ディーノはシュウの言葉にポンと手を叩き、成る程と肯く。早速、ディーノはリュドに指示を出す。」

「開発主の息子がそんなでいいのか？」

「うるさいな、うつかりしてただけだ！リュド、ウォルフィーをリボンしてくれ！」

「……？　リュドはディーノの言う通りに再びリボンする。そしてウォルフィーが砂塵から実体化する。そして、グリードが近づいて安否を確かめる。」

「ウォルフィー、大丈夫か？！」

「ん…俺は一体……」

「うーたん……！」

「……？　リーオンがウォルフィーをあだ名で呼ぶ。リーオンはウォルフィーの無事に感涙してしまっていた。」

「お、おい！リーオン、どうしたんだよ？何泣いてんだ……」

「うーたん、俺すげえ心配したんだぜ…うわあああん……！」

「……？　リーオンは遂に号泣に至った。ウォルフィーは状況を理解していたと言う訳ではないが、リーオンの背中をさすった。」

「すまねえな、リーオン。皆もすまなかった、俺が迷惑かけちゃったみてえだな。」

「いやあ、良かった良かった、狼中年！」

「……？　シュウは陽気にウォルフィーの全快を喜ぶ。しかし、ウ

オルフィーはシュウのことをじーつと見ていてだけで反応はしない。

「ん、どうした？ ぼーっとして？」

「あんた誰？」

「はっ？ シュウだよ、シュウ！」

「？ ？ ウォルフィーは啞然とする。

「風のサーガがなのか！？」

「そうだよ！ まあ、『元』が付くけどな。今はユウトがそうだな。」

「？ ？ シュウがユウトを前に出して紹介する。

「よ、よろしく」

「おお、よろしくな！」

「？ ？ ユウトはまたレジエンスが増えたと複雑な思いでいた。

ガリオンの一件以来、レジエンスの存在が必ずしも喜ばしいことではないことがわかった。しかし、自分がサーガという肩書きの意味は未だに分からない。

「？ ？ ユウトがそんなこと思っているのもいざ知らず、シュウは息を吸って喚起をする。

「よし、みんな、クリスマス&歓迎パーティーの準備の続きすつぞ！」

『おーーーーー！』

「？ ？ 皆は準備を始めた。シロンたちレジエンスの力もあつたので準備はとも捗った。そして、夜7時を回る頃には準備はほとんど片付いてしまった。

「ふう、やつと終わった…」

「よし、みんな、グラスを挙げて！」

?? ? みんな飲み物の入ったグラスを挙げて乾杯の用意をする。

「クリスマス、そして、お前たちレジエンスに出会えたことに乾杯
！！！」

『『乾杯！！！！』』

?? ? 歡喜の宴が始まった。

?? ? 数十分後、パーティーのテンションは既に最高潮に達していた。

「でよ、ホントその女しつこくてさ」

「グハハッ！お前、モテるもんな！」

「うーたん、今度、モテない俺に一人カワイコちゃん紹介しろよ！」

「ふっふっふ、仕方ねえな、親友の好だぜ……。俺がこんなことするなんて絶対無いんだからな！」

「ははー、ウォルフィー様ー！」

「あいつら、ただの飲み仲間のオッサンたちだな……」

「ホントそうだね。でも、三人で飲み交わしたのは久しぶりなんじゃないかな。」

「ハハッ、そうかもな！」

??? G・W・ニコルの三匹はすっかり酒に酔って中年らしい会話を繰り広げている。その様子をシュウたちは微笑ましそうに見つめていた。

??? 一方、ユウトたちはというと、

「マリ、あんま暴れんな！俺が落ちる！」

「シロンさん、もっとー！」

「ったく、おめえらもうガキじゃねえんだから、大人しくしてろ！」

??? ユウトたちはシロンと戯れあっていた……というより、シロンで遊んでいた、と言った方が正しい。

「まあ、僕たちはまだ子供だし、気にしないでよ！」

「リュド、お前はそんなキャラだったのか…あのディーノと似ても似つかない性格だな！」

「よく言われるよー！」

??? しかし、シロンも段々と疲労の色を見せてきた。シロンは助けを求めるかのように、横で壁に凭れているランシーンとハルカに目配せする。

「おい、お前らも…」

「あら、シロン、とても楽しそうですね」

「シロンさん、マリのことよろしくね」

「お前たち…！いつかブツ殺……っくぐああ!？」

??? シロンはトミーがいきなり首に掴みかかったため、後ろに転倒する。幸い、誰も怪我はなかった。

「くそっ…」

「うわああ、ごめんなんだな！」

「？　？　すると、ランシーンが子供達のやり取りに一瞬微笑したかと思うと、ゆっくりと歩きだして部屋を出、そして外に出て行った。ハルカもそれを見て追いかける。」

「どうしたの？」

「ハルカ……」

「？　？　ランシーンは曇天を仰いで何かに憂いを感じているようだった。ハルカはハイヒールの音を態と立ててランシーンの隣に行く。」

「暖房で少し逆上せた？」

「いや……」

「じゃあ、どうしたの？」

「……眩しかっただけです。」

「？　？　ランシーンは腕を組んで翼を折り畳む。そして、再び視線は灰色の空へと移された。」

「やっぱりまだ躊躇いがあるのね？」

「……私には不慣れな環境です。周りに他者などいませんでしたから。息苦しいような、心地良いな……」

「でも貴方は普通に皆と話せてるじゃない。普通に他人の話を聞けるし、普通に冗談も言える。それはとっても素晴らしいことよ。」

「？　？　ハルカは笑顔でランシーンに答える。ランシーンは彼女の言葉の一言一句を噛み締めようとしたが全部味の無いものにしか感じられなかった。」

「私は皆に認められているのでしょうか……」

「さあね、私からは何とも言えない。正直、私も同じ気分よ。それは貴方がよくわかつているでしょうけど。」

「……」

「でも、シュウくんが赦してくれた。それはきっと甘えかもしれない。でも、私にとっては本当に心の荷を下ろしてくれる言葉だったわ……」

「？　？　？　シュウの言葉は確かに気を楽にしてくれた。でも……」

「でも、私は……」

「あつ……」

「？　？　？　ハルカが急に空を見上げて声を上げる。ハルカの視線の先を追うと……」

「雪……」

「……」

「？　？　？　灰色の空から白くて冷たくて……それは儚く舞い落ちてきた。」

「初雪ね……」

「ハルカ、」

「？　？　？　ハルカは？　どうしたの？　と言ってランションを見る。」

「私もこの雪のように……」

美しく…

「白くなれますか？」

彼のように…

「子供達の声が騒がしくなる。どうやら彼等も降雪に気付いたようだ。」

「なれるんじゃない？だって今日はクリスマスよ。」

「え？」

「神様が一つや二つの願いぐらい叶えてくれるわよ。」

「フツッ、子供騙しですね…」

「いいじゃないの、子供騙しでも。信じることは自由なのよ。」

「子供の賑わいが夜空に訝する。そこにただ白い雪だけがそれらの仲介をしてくれた。」

「私はいつか気付いてもらえるだろうか？もし、神がいるのなら聞いて欲しい。私は…」

「聖夜の夜に降った雪、それは人が願うことでしか満たすことできない何かに似ていた。雪の数だけそれがあるように思えた。しかし、容赦なく雪は降る、容赦なく降り続けた。」

...to be continued

―？（後書き）

ストーリー的に次回から展開していきます。段々とほのぼのした空気に疑問が出てくるんで（笑）

「らん、らん、らん、らんらんらんらんらん」

「・・・・・・・・・・。」

「ふああ……」

「・・・・・・・・・・。」

「あんた、ちよつと近い！」

「・・・・・・・・・・。」

「ん、照れ屋でちゅね。どう思いますか、御主人様？」

「だから、ベタベタ触ってんじゃないわよ！DM変態野郎が！」

「うぐっ！はああ、はあ、あ、ん、もつと？」

「お前達、王族の目の前で何をしているんだ？」

「・・・・・・・・・・。」

「お前たち少しは黙らんか！御主人様に迷惑ではないか！なあ、ジエラス。」

「知らん。」

「あんたが一番ウルサイ！」

「そうだ、そうだ！うぐっ！」

「僕はただ歌ってたただだよ！まあ、君の汚い声に掻き消されちゃったけど、」

「なんだと！」

「ふああ…寝みい…」

「おい、エルクート、フォルス、キルビート、ペリスン、ジェラス、フォン、ルデイ。」

「……」

「そろそろ、お前たちの实力を見たい。儂を満足させてくれるのかどうかを……」

「任せてよ！僕たちは伊達に貴方の力を望んだ訳じゃない。」

「ふん、そうだな。」

「ふひひひ、どんな奴らか……」

「私たちに任せてよ！」

「……やつと会えるな、」

「強い奴か？」

「勿論、向こうの力はそれなりに有るだろう。儂の作戦の一つを台無しにさせたんだからな。」

「ふん……楽しみだぜ。眠気も醒めるってもんだ……」

「やり方はお前たちの自由でいい。しかし、決して倒すようなことはしないでいい。お前たちの实力を測るだけだ。」

「御主人様、私が行っても宜しいでしょうか？」

「キルビート、お主は以前敗れているな…大丈夫か？」

「以前とは違う、それは言えるわ。」

「ふん、それじゃあまず火を頼むぞ、期待している。そうだ、あと一つだけ注意をしておく……」

「……ふつ、分かったわ。任せて下さい。私がグチャグチャに
してやる。二度と立ち直れないくらい！」

――彼らが出会って早三ヶ月

春うらら。

春と言えば入学式。

春と言えば卒業式。

春と言えば……

「花見よ！」

「また、始まった……」

「僕は賛成！」

「いいんだな」レジェンズの皆と一緒に花見したいんだな！」

？？？　サーガの子供達は時計塔内にある秘密基地に集まって雑談を交わしていた。今年の春は従来より少し暖かめのようで、開花前線がいつもより早いのだ。そのことにいち早く気付いたマリは早速この残り少ない春休みを花見に使いたいと考え、今に至る。

「なによ、ユウトは相変わらずノリ悪いわね！」

「だってこいつらいるんだぜ？」

？？？　ユウトはテーブルの上に座ってドーナツを貪るシロンを指で抓つまむ。

「ガッ！？ガガガガッ！！」

「こいつだぜ？」

「フグ……」

「別にいいじゃない。ランシーンさんもいるんだし。」

「まあ、俺も嫌って訳じゃないんだけどな……。」

「……？ ユウトはシロンをテーブルの上にまた置いて、テーブルの上に肘を置き溜め息を尽く。」

「またよく分からないこと考えてるの？」

「……まあな、」

「……？ ユウトは約三ヶ月前に起こった学校での出来事に未だに困惑していた。」

「……？ レジェンズの登場は子供達にとって突拍子も無く非現実的な出来事だったに違いない。しかし、それは彼等だけでなくこの世界に住む一般人全員も同様な考えをするだろう。」

「ユウト、考え過ぎだよ！僕はグリーードと一緒に花見したいな」

「皆がそう言うなら……わかったよ……、やりますよっと！」

「流石、ユウト！」

「……？ よくよく考えれば、今までレジェンズに関する事件なんて起こっていない。これから起こるとしてもそれはきっと自分達が起こしてしまったものに違いないから自業自得という言葉で片付けられる。」

「……？ マリはユウトの承諾を受けて大喜びする。」

「よし！今夜、午後9時にセントラル・パークの正門前に集合！」

「何で夜？」

「ズオウたちレジェンズが人目に触れちゃダメでしょ！」

「あー、そうだったな…」
「じゃあ、解散！」

*

「おかわり！」
「はいはい。」

??? 只今の時刻は午後8時、シユウは夕食を貪る。今日はフランスパンとクリームシチューだ。シユウはフランスパンを指で千切る。パンはバリバリと音をたてて中の繊維から分離した。その瞬間、断面からフランスパン特有の塩っぱい香りが漂う。そして、シユウは千切ったものをシチューに付ける。シチューの持つ温度がパンに染み込んでくる。そして、付けたシチューを零さぬように口に入れる。口内にシチューのまろやかさがフランスパンの淡泊な味にマッチングしている。流石、メグ。料理の腕は落ちるところか更に俺を唸らせる。

「やつぱ、お前の料理は美味えな！んゝ、うみええー」
「もう、そんな一氣にがつつくと喉に詰まるわよ。もっと上品に食べなさい！」

??? メグは蛇口の栓を閉め、最後に洗った皿を横の洗浄棚に立てる。青い一本のストライプが引いてある白いタオルで手を拭い、椅子に座ってシユウの飲んでいたグラスを取って残っている牛乳を飲む。

「ふう、そう言えばユウトが花見行くんですって。」

「ふうん、ふいつついくんだ？」

「一時した後、」

「ぶっ！？げはっ、げほっ！！…今から！？」

「ちよつと汚いわね！はい、ティッシュ！」

「うう…サンキュー…」

「？　？　？　シユウは吹き出したモノをティッシュで拭き取る。メグは溜め息を尽きつつ話を続ける。

「別にいいじゃない、子供達だけじゃないんだから。」

「、と言うと？」

「レジエンスも一緒ってこと！」

「？　？　？　シユウはティッシュを纏め、ゴミ箱にポイッと投げ捨てる。ゴミはポトッと音を立てて中に入った。

「ナイッシュ、まあ、それなら安全だな。夜なら人目も無いし、夜の桜なんて滅多に見れないからな！」

「そうね。私たちも昔見たよね…」

「あれから、もう12年か。時つてもものは早いな。」

「うん…」

「？　？　？　すると、ユウトが二階からバタバタと音を立てて階段を降りてくる。腰にはタリスポッド、肩には二匹のネズミがいた。

「父さん、母さん！行ってくる！」

「おう、行ってこい。シロン、ラン、ユウトを頼むぞ。」

「ガガガッ！」

「フグッ」

??? ユウトはドアを開け、颯爽と夜の街へと出て行った。ドアがバタンと閉まる。

「ほお・・・」

「どうしたの？」

「いや、あいつあんな遅しかったっけ？」

「そう？まあ、もうすぐ6年生だしね。」

「流石、俺の息子だ！うー、御馳走様、さて、俺は風呂でも入るか！」

??? シュウはテーブルに手を付いて立ち上がり、バスルームに向かう。

「全く、調子のいいコト言っちゃって！」

「調子のいいコトついでに俺と一緒に入るか？」

「断つとく。本当に、シュウなんだから・・・」

「俺は俺だよ。当たり前だ。」

??? シュウはニカッとメグに笑った。彼女も同じように微笑み返した。

*

「・・・・・・」？

「リュドとトミー、遅いわねー。」

「マリ、寒くない？」

「大丈夫よ、ズオウ。」

「？　？　只今、午後9時10分。集合時間を10分オーバー、そして記録も更新中。集合場所セントラル・パーク（Central Park）はライトアップしており、夜でも適度に明るくなる。とは言っても、こんな夜中来る人は流石にいないようだ。一方の既にリボンされているシロンは大きな欠伸をかます。

「ふあああゝ…眠くて仕方ねえぜ。それにしても、花見ってなんだろう？ 美味しいのか？ なあ、風のサーガ？」

「花見つてのは、桜を見て景色を楽しむ行事だ。」

「桜ってこれか？ このピンク色した、」

「？　？　ユウトは肯いて、溜め息を尽く。花見に無知なのは仕方ないとして、すぐ食べ物に考えが転じるのはどうかと思う。一緒に暮らしてきて分かったが、シロンの食い意地には手に負えない。

「シロン、相変わらず食い意地が張ってますね。手に負えません・・・・。」

「食えるだけ食って、運動して寝る！ これだけ出来れば俺は別になにもいらねーよ。」

「？　？　ランシーンはユウトと見つめあって呆れのアイコンタクトをする。

「？　？　すると、夜道から声が聞こえる。

「おーい！ 待たせてごめーん！」

「みんなー！」

??? ? リュドとトミーがやっと来た。リュドはグリードーにトミーはガリオンに乗ってきた。グリードーとガリオンは翼で高度を調整してふわりと着地する。

「すまねえ、待たせたな。」

「遅れてすまぬ・・・」

「よいしょっと、グリードーありがとう！」

「ガリオンもありがとうなんだな！」

??? ? 平然とした態度を装ってるグリードーたちにシロンが眉を顰める。

「おい、何で遅れたんだ？」

「リーオンがうるさくてな・・・、置いてくのに時間が掛かった。」

「リーオンって怖い顔の癖に寂しがり屋だね。僕最近気付いたよ。それともそれ故に寂しがり屋だったりして・・・」

??? ? そのあとの話によると、リーオンはウォルフィーがなんとか落ち着けたらしい。何故、置いていったのは色々と理由があるんだと思う。顔とか声量とか。

「じゃあ、みんな揃ったわね！んじゃ・・・」

「・・・レッツゴー！！」「」

??? ? マリの掛け声ともに、足を進める。しかし、

「あんらー、皆仲良さげねー」これが崩れ去ると思うとワクワクし

「ちやう？」

「??? 彼等の上空に居たのはキルビート。以前、グリードーが滅ぼしたはずのキルビートだ。しかし、彼女の体毛はネクロムの象徴であつた漆黒ではなく、エメラルドのような翠に変色していた。その輝かしい姿はキルビートにとって皮肉以外の何物でもない。」

「それにしても、この姿は落ち着かないわね。ご主人様ももっとフアッションに気を配った方がいいんじゃない？」

「??? 輝かしい姿はどうやらユウトたちには気付かれていないようだ。」

「まあ、いいわ。あの子たちには気付かれてないみたいだし・・・、それに今回はウォーミングアップだしね。脅す程度にしておきましようか・・・。」

「??? キルビートはそう言うと、闇に溶けて消えてしまった。そして、彼らは何も知らずに桜並木を進んで行った。」

Ep・8 春の桜が切なくて ｝ Falling cherry blossom

キルビートは公式だと性別不明ですが、個人的には女だと思います。女ですよね。え？女ですよね？^^；

「？」

「うわー！きれーい！」

「綺麗なんだな！」

「すげえ……」

「……？ 一陣の風が吹き、桜の花びらがヒラヒラと舞い落ちる。ライトが桜に当たったり、当たらなかつたり、その繰り返しはスパンコールの輝きと似ていた気がする。そして、仄かに漂う匂いも不思議と落ち着きを齎^{もたら}してくれる。」

「美しい……」

「……ああ、」

「地球にこんな情景があるとは……」

「ふっ……」

「桜、キレイ！」

「……？ レジェンズたちも感嘆せざるを得なかつた。中には桜は日本特有のモノだと思っっている人もいるかもしれない。しかし、それはとんでもない勘違いだ。この美しさは既に海外でも見られている。すると、リュドは歩きながら呟く。

「父さんがいつてたけど、昔はもっとこれが見れたんだって。」

「へえ……」

「今は開発とかで全体的に見れば自然は減っちゃってるらしいよ。」

「……？ ユウトたちは桜の美しさ魅了されつつも足を進める。コンクリートと足が擦れあいザッ、ザッと砂利の音がする。ここセン

トラル・パークは現在南北3・8km、東西0・7kmの広さだ。
リユドが言っていた通り、以前はもう少し広かったらしい。前に父
さんが縮小を嘆いていたことは自分の記憶の中に鮮明に残っている。
??? 歩いて二十分ぐらいが経ち、やっとセントラル・パーク
の中央区域ルザボア(The Reservoir)にある大きな
湖に着く。すると、シロンが何やら呟く。

「ここか・・・」

「シロン、知ってるのか？」

??? ユウトが返す。

「ああ、前にな・・・」

「へえ・・・」

??? ユウトたちは湖の近くまで行く。

??? そして、シロンは湖面だけを凝視していた。多分、父さ
んのことを思い出してる、ユウトはそう思った。だって、此処を知
っているということはそうだとしか考えられないから。そして、ユ
ウトもシロンと同じように湖面を見る。

「見て！月が湖面に映ってるわ！周りの桜も情緒があっていいわね。」

「なあ、マリ・・・」

「ユウト、どうかした？」

??? ユウトは地面を一瞥して答える。

「帰らねえか？」

「えー！？何ですよ！まだ来たばかりじゃない！」

「俺もパス、」

「シロンさんも?!」

??? ? ユウトは急に帰宅を提案した。マリは何事と思い、詰問する。

「え、本当に?なんでよ?ちゃんと理由教えてくれなきゃ納得できるモノもできないわ。」

「なんていうか苦しいんだ……。桜見てると不思議とそう思う。散つてく姿寂しいような悲しいような……。でも、それだけでも無いような……。」

「あら、ユウトもそう思う?」

「え……」

??? ? マリは立ち上がって湖面に浮かんでいる桜の花弁を両手で掬い上げる。そして、それを崩して再び湖に花弁を返す。

「私もそう思う。だって、咲いたかと思ったらすぐ散つて、下に落ちてくだけ。多分その儚さがこんな気持ちにさせるんだと思うの。」

「……、」

??? ? ユウトは座ったままマリの横顔を見つめる。マリの言っていること正直よく分からなかった。でも、きっとそうなんだろう。何より今はそう思ったほうが気が楽だった。

「そうかもな。」

「シロンさんもそうなんでしょう?」

「……、」

グギョ
ルルル
ルウウ
ウ…

「すまん、腹減った。」

「ねえ！皆見てえ！！月が雲に隠れてるよお！」

「?? ?リユドは何かを察したのか、横にいるトミーを膝で小突いて返答を強要する。トミーは少し困惑したが、彼も何かを察したよう
うで、

「ほ、本当なんだな！月がとっても雲に隠れてるんだな！むしろ、雲が月の前に躍り出てるんだな！」

「シロン、」

「あっ？」

「そういうのを俗にAirBreakerというらしい。覚えておけ、」

「はっ？」

「???? ? ? ? ?」

「ガリオン、それ何語だ!？」

「はあ、何なんだこいつ」

「アハハッ！シロンさんらしくていいじゃない！」

「ハハハ！……マリ！あれっ!？」

「どうしたのズオウ？」

「??? ?ズオウが何かを指差す。それは湖の方向を指していた。すると一瞬、辺りが陰る。恐る恐る彼等は空を見上げると……」

「は？い？坊やたち、お花見は楽ちんでまちゅか？」

「……誰？レジエンス？」

マリが目を細めて空に現れた謎の生物を凝視する。ユウトはただ座

って呆然としていた。

「お前は誰だ!？」

?? ? シロンが叫び散らす。

「あれ、忘れちゃった？私よ、以前貴方たちと戦ったキルビートちゃんですよ？」

「キルビート……、……あいつか!？」

「やつと思い出してくれたの、ありがとうね！」

?? ? キルビート。シロンたちにとっては忌々しい思い出しかない。前のレジエンズウォーの際に、敵として対峙したやつだ。様々な手法を使って、彼等を弄んできたが、ついにグリードールによって滅ぼされた――筈だった。

「キルビートオオオ!何故、生きてる!!?あん時、俺が倒したはずだ!!」

「グリードール……?」

?? ? グリードールは忌々しい存在に怒りをぶつける。それを横で見えていたリウドは新しい彼を目撃してしまった。すると、マリが疑問に思ふ。

「あなた、レジエンズ?」

「マリ、ボクの後ろに隠れて!」

「ズオウ、どうして……」

「マリ!こいつらは敵だ!ちゃんと隠れてろ!」

「??? シロンが注意を促す。キルビートは一人一人を眺めてある異様な存在に気付く。」

「あんれえ〜?そこにいるのはランシーンちゃまですか?」

「キルビート……!」

「??? ランシーンとキルビートが睨み合う。以前の戦いでは味方同士だったというのにそんな面影は感じさせない。いや、もはや味方ではなく、ただの共犯者だっただけなのかもしれない。悪役とは大抵そういうものだ。」

「貴方はもういいんですかあ?この人間を野放しにして。自分で言うてましたよねえ?人間を……」

「それ以上その減らず口を叩くと……怒りますよ?」

「??? ランシーンはもう一度その鋭い眼光をキルビートに突きつける。」

「随分、感情的になりましたね〜。でも、それって悲しいことよね・……。さて、本題に入るわね」

「本題とはなんだ……」

「ごめんなさいねー、今日はランシーンちゃまじゃなくて、その紅い髪の子とそっちカツコイイ紅いあなたよ〜!」

「??? キルビートはリユドたちを睨みつける。そして、そういうとさつきよりも上空に舞う。そして、公園内全てに響く嘶きをする。シロンが未だ茫然としているユウトを呼びつける。」

「サーガ、こっちこい!」

「う、うん!」

「いきなさい、我が僕^{しもへ}キマイラ、ゴブリン！」

??? ? キルビートの合図と共にキマイラとゴブリンが一匹ずつ出現する。しかし、この二匹少し様子がおかしい。

「エメラルドに瞳・・・ウォルフィーと同じだ！」

「キマイラ、ゴブリン、攻撃！」
「グガアッ！」

??? ? キマイラとゴブリンが一斉にリュドとグリードー目掛けて襲ってくる！グリードーはリュドの前に立ち、攻撃態勢を整える。すると、

「クロスブロウザン！」
「グガアアア！！！」

「・・・！？ガリオン！」

??? ? ガリオンが横に入り、大技を繰り出す！ガリオンの技を喰らったゴブリンは悲鳴を上げて吹っ飛ばされて湖に落下する。

「グリードー、大丈夫か？」
「ああ・・・」

「ガルルルウ・・・」

??? ? まだ残っているキマイラが唸ってこちらを睨み付ける。どうやら理性など何処かへ行ってしまったようだ。ガリオンも同様

にキマイラに敵意を見せる。

「一体何なのだ、あの翡翠色の眼は！？あれではただの獰猛な獣だ・
・・・」

「さあな。とりあえず今はそんな悠長なことは言ってられないよう
だ。」

「よし、私が・・・」
「待て。」

「？？？ ガリオンが前に出ようとしたその瞬間、グリードーがガ
リオンの肩に手をやって止める。」

「どうした？」
「俺が行く。」

「？？？ グリードーはガリオンの前に出て、戦闘態勢をとる。」

「ガリオン、お前も俺とあの馬の因縁ぐらい理解してるだろ？」
「大丈夫か？」

「ああ、心配するな。俺が負けと思うか？」
「ふっ・・・」

「？？？ グリードーは会心の笑みをガリオンに向ける。彼女も笑
い返し、彼に頼ることに決めた。」

「グガアアア！！」
「いくぜ！フレイム！」

「？？？ フレイムを放つグリードー、しかし、キマイラは機敏に
避けてグリードーに猛然と向かい、腹に体当たりする！」

「ぐっ！」

「グガアアアッッ!!」

??? ? グリードーは一瞬息を詰ませたが、すぐ立ち直りキマイラの腰を掴み身動きを取れなくする。

「ふんっ、こんなもんか？」

「人間憎イ…人間殺ス…邪魔者は排除スル…！」
「クソっ、こいつら…!？」

??? ? グリードーはキマイラの発した言葉に、一瞬狼狽えてしまった。そして、その瞬間を突かれ、キマイラの騎手が杖を振り上げる！それはグリードーの左胸へと確実に向かう。

「!」

「グリードー!!」

??? ? ガリオンの叫びが訝する。グリードーは突発的に眼を閉じた。しかし、数秒経っても彼は胸に痛みを感じなかった。彼は恐る恐る瞼を開く……すると、彼の目の前に信じられない光景が映る。

「グリードー……大丈夫……？」

「リュ……ド……」

??? ? グリードーの目の前にいたのはキマイラの頭に立ち、自らの胸の前にリュドが立っていた。リュドの目前に杖が突きつけられギリギリで止まっていた。

「ふーん、なるほどね……」

「ふん、それじゃあまず火を頼むぞ、期待している。そうだ、あと一つだけ注意をしておく……、サーガには手を出すな。」

「何故ですか？」

「サーガとレジエンスの力は侮れない。しかし、これには利用価値がある。それに、いま殺しては儂の作戦は成功に程遠くなってしまふ。あと、他のレジエンスを使うなら儂に言え。処置をしておく。」

「？　？　？　キルビートは命令を頭の中で反芻する。そして、ある決断に至る。」

「キマイラ、撤退するよ！」

「ガルウ……」

「？　？　？　キマイラはリュドを頭から振り払う。グリードーは振り飛ばされた彼を優しく受け止めた。」

「クソツ！逃げるのか！？」

「？　？　？　グリードーはキルビートを悔恨と怒りに満ちた眼で睨む。キルビートはそれ臆することなく見下し返す。」

「今日は挨拶に來ただけ。．．．そうだわ、いいコト思いついちゃった♪今度会う時はお土産を持ってくるわ、楽しみにしといてね…」

「？　？　キルビートは不敵な笑みを浮かべてキマイラと共に消えて行っただ。」

「待て！」

「グリードー！！もういい！」

「？　？　ガリオンがグリードーを諷める。」

「先ずはお前のサーガを見てやるのだ．．．」

「？　？　グリードーは自分の腕の中にいる火のサーガが震えていることに気付いた。彼が震えていたのはグリードーが無事だったことからくる安堵からの条件反射だけではないのは誰から見てもわかった。」

「リュド．．．」

「グリードー、大丈夫…？」

「ああ…」

「？　？　グリードーは彼がタリスポッドを片手に持っているのを見つけた。それはある意味彼の現実そのものであり、希望でもあった。しかし、それとも．．．。彼は邪心を振り払い、リュドを今は唯々抱き締めた。」

「一体、何だつてんだ．．．。なあ、ラン．．．ラン？」

「・・・ユウト、」

「あ？」

「??? シロンが背後にいるユウトを一瞥し、ハツとする。ユウトはグリードとリウドをただ眺めていた。思うに、突然の出来事に驚いていたのだろう。すると、マリがズオウに抱かれながらユウトの前に来る。」

「ユウト、帰ろう。」

「・・・。」

「ユウト！」

「!!あ、ああ……そうだな、帰るか…、桜みんなで見れて良かったな。」

「うん、そうね！ママにも感想言わなきゃ、リウド、トミ、帰りましょう！」

「??? マリが召集をかける。リウドはグリードの腕からひよいと抜け、トミもガリオンの後ろからマリたちの元に行く。」

「また行きたいわねー！」

「そうだね、こんな綺麗なものどこの美術作品にも無いよ。」

「ふん、リウドは本当にそういうの好きだな！」

「よく言われるよ、」

「僕お腹空いたんだな、ハンバーガーが食べたいんだな。」

「ハハハッ、じゃあ僕が後で父さんに頼んでおくよ。」

「??? 何事も無かったように談笑をする子供、いやサーガたちパートナーである彼ら四大レジェンズはただその健気な姿を見つめることしかできなかった。苦しかった。」

＊

「ただいま！」

「おかえり、リュド！花見はどうだった？」

「あのね、暗かったけど・・・」

「落ち着きなさい、リビングでゆっくり話そう。グリードー、リーオンが寂しがってたよ、行ってあげてね。」

「？？？ ドアがボタンと音を立てリュドとディーノをリビングに取り込む。長く赤いカーペットが敷かれた玄関では飾つてある振り子時計が左右に動き続ける音しかない。」

『今度会う時はお土産を持ってくるわ、楽しみにしといてね...』

「？？？ 最後に残されたキルビートの言葉が脳裏に甦る。そして、それは不穏な思惟にしか至らないものだった。」

「俺はどうすればいい...」

そして、彼は呟く。

「兄貴・・・」

唯一の肉親を。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.
.
.

- ? (後書き)

限がいいところで次回予告をいれていきたいなあ、と思っています。
早くシリアスにしたい・・・

Ep・9 ただ君を抱きたくて 〈MY memories are sti

僕は思い出したよ、メグ、マリ……。
もうあんな思いはしたくないから……。

??? 春休み終了。そして子供達は新たな学年に心機一転するはずだった。

「ユウト、何組？」

「三組だ。お前は？」

「僕も三組♪」

??? ? リュドが微笑んで、昇降口に貼ってあるクラス分けの表を指差す。こんな小さい字なんだから、指しても判らないって。??? ? 一方、マリとトムは未だに自分の名前を探すのに苦戦していた。

「あー、もう！見つからない！」

「あ、マリ、見付けたんだな♪三組の欄なんだな。僕も三組なんだな。」

「え、どこどこ？」

??? ? トムがマリの名前を指差す。マリはその方向を見るが絶対見当違いな所を見ているだろう。だから、見える訳ないって。

「皆、同じみたいだね。」

「そうみたいだな。まあ、変わりばえしないって感じ。」

「仕方ないよ！作者の図らいなんだから。」

??? ? リュドの言っていることがよく判らなかったが、概ね、一緒のクラスで皆嬉しいのは間違いないのだが…。

「ジェニファー、別のクラスだね…」

「カレンと同じクラスが良かったなあ…じゃあね…」

「……中には当たり前だが、友達同士別々のクラスになってしまつこともある。というより、大半がそうだ。すると、リュドがじつとその様子を見、頷いていた。」

「どうした、リュド？」

「いや、ああいうのってクラス離れると疎遠になるよねって思つて。」

「笑顔で言つな、笑顔で…。ありがちだけだな。」

「……ひとまず、他人のことは他人のこと。俺たちは晴れて六年連続で同じクラスを共にしたのだ。単純計算でスゴい確率である。」

「ユウト…！」

「よう、お前も三組だつてな。トムも。」

「あら、知ってたの？無事に同じクラスになれたわね！リュドは？」
「僕も三組だよー。」

「……？リュドの返答にマリは良しと言わんばかりのどや顔を見せる。しかし、何で偉そうなのかは不明だけど。」

「クラスが分かった人は自分のクラスに移動して下さい…！」

「……？教師の注意が聞こえる。それに従い、俺らも急いで自分のクラスへと向かった。」

＊

「??? 昼下がりに、まだユウトが帰って来ていないマツタニ家ではシロンとランシーンがキッチンでトランプに勤しんでいた。」

「ガガッ！（これでどうだ！）」

「フガッ！（ふっ…）」

「ガガーンッ！（ジョーカーだと…！？）」

「フガガッ！（決まりですね…）」

「??? シロンは等身大のトランプ（ジョーカー）を一枚手に残して、悔しそうにテーブルを叩く。」

「ガアーーー！ガガガァガガッ、ガガガァアアア！（チクシヨ！）なんで勝てんねーんだああ！」

「フガガガフグ…（苦手ものをやるもんじゃありませんよ。）」

「ガガガガガッ！（もう一回勝負だ！）」

「うるさい！！！」

「??? キッチンで皿洗いをしていたメグが声を怒らせて、二匹を注意する。大音量に二匹の騒ぐ口はピタリと止まってしまった。??? ? メグはそうなった後、上の戸棚から白砂糖でコーティングされたプレーンドーナツを皿に二個乗つけてテーブルに置いた。」

「ほら、食べていいわよ。でも静かにしてね！」

「ガガガッ！（ナイス、メグ！）」

「フガガ…（ドーナツですか…）」

??? ? 大喜びするシロン。一方でランシーンはドーナツを目の前にして不満そうな顔である。それに気付いたメグが、

「もしかして甘いの手？」

と言った。ランシーンはコクリと頷く。メグはクスリと微笑み、別の皿にティラミスに乗せてランシーンの前に出した。

「フガガ…？（これは…？）」

「ティラミスよ。こっちは余り甘くないわ。」

??? ? メグはただへさえ小さいティラミスを綺麗に四等分をする。そして、弁当用の透明の小さい二股のフォークをランシーンに手渡した。

「……。」

??? ? ランシーンは一切れを全身を使って刺す。そして、口に運んだ。

「フグッ！」

??? ? 小さな口でパクリと食べた。口にチョコレートクリームを付けながら咀嚼した。

「フガ…！！（これは…！！）」

?? ? ランシーンはカタンとフォークを落とす。

「ガガッ?! (ランツ!?)」

「あれ、ダメだった?」

「フガガッ！！（美味い！！！！）」

「ランシーンはティラミス之余りの美味しさに啞然とした。
このふんわりとした力口才香るスポンジと控え目なクリームが見事に口内を別世界へと変化させる！そして、ココアパウダーの苦味のある風味が上品かつ素材の持つ深みを引き出している…」

「ががー…（だいじょうぶかー…？）」

「結構美味しかったみたいね。このティラミス売ってるケーキ屋さん美味しいのよ。今度また買って来て上げるわ」

「フガガ…（ああ…）」

「恍惚に満ちたランシーンはただティラミスを食べることに夢中になっていた。それがシロンには気になったのか、彼は小さな手をティラミスに伸ばす。しかし…」

「ガガッ！（俺にも喰わせろ！）」

「シロンがランシーンのティラミスに手をかける！」

「フガガッ！！（何するんですか！？…って！）」

「ランシーンは振り払おうとする。しかし、持っていたフォークのせいでバランスを崩し…」

「フグあつ！（むぐっ！）」

?? ? ティラミスに顔を突っ込んでしまった！

「ガガガガガッ！！（ハハハハハッ！！）」

?? ? ティラミスから顔を抜こうとするのに必至なランシーンをみて、シロンは腹を抱えて笑いこける。

「ふぐい…！ふがあ…！（んっ…！ぐぬ×…！）」

「ガガガガッ！！ガガッ！！（ハハハハ！！やばい！腹いてえ…！！）」

「まったくもう…」

?? ? 見かねたメグはランシーンの尻尾を掴んでティラミスから救出して、テーブルに置く。ランシーンはクリームを顔にドロドロに付けながら、ペタンと腰を下ろした。

「たっただいまー！」

「おかえり、ユウト。」

?? ? そんな時、ユウトが始業式から帰宅する。そして、すぐにダイニングテーブルの上に目がいった。

「ラン、どうしたんだ？」

「フゲグッ…」

「シロンとランシーンさんが喧嘩してたの。それより、さっさと手

洗いなさい。」

「はい。」

「ユウトは面倒だったのか、キッチンで手を水で洗う。そして、鞆の中のランチボックスをテーブルの上に置いてバタバタと二階に上がり、自分の部屋に急いだ。」

「バンツとドアを開けていつもの散らかった部屋と対面する。少しその様子を見て戸惑ったが、後で片付ければいいや、とユウトは小学生らしい発想に至った。」

「（リュド達と約束してるからな…早く行かな…）」

「ガチャリ。急いで鞆の中を整理していると、タリスポッドが床に落ちた。それを一、二秒眺めたかと思うとユウトは無言でそれを拾い上げた。」

「（レジェンズ…前の翠色の馬…）」

「ユウトは頭の中で先日、花見の出来事を思い出していた。レジェンズか…。」

「…ってヤバイ！遅れる！遅れる！」

「ユウトはタリスポッドを鞆の中にヒョイっと入れて、それを肩に掛けて部屋を出て行った。」

「次はストームだ…」

「それじゃ僕に任せてよ！」

「そうか、フォルス。頼んだぞ…」

*

「お待たせー！」

「ユウトが来たんだな。」

「遅いわよー！」

「相変わらずだねー。」

「？　？　ユウトは皆より遅れて秘密基地に着いた。そして、両肩には白いネズミと黒いネズミがそれぞれ乗っかっていた。

「？　？　秘密基地にいた三人はそれに目がいく。ユウトは自分に向けて視線が集中したかと思いきよっとする。

「ん、何だ？」

「……。」

「えーと……。」

「…あ、そうそう、グリードローがDWCの屋上に来ってっシロンと

ランシーンに知らせといてって言ってたよ!」

??? リュドは慌ただしくそう言った。

「そうか…それじゃあ…」

??? ユウトはタリスポッドを鞆から取りだし小窓に向けて、
叫ぶ。

「シロン、カムバック！リボーン！」

??? そしてタリスポッドから大きな竜が現れる。ユウトは更
にもう一回、叫ぶ。

「もう一回！ランシーン、カムバック！リボーン！」

??? 白い竜の隣に黒い竜が現れた。黒い竜の方は不機嫌な顔
をしていた。

「シロン、さつき笑い者にしたこと…あとで後悔させてあげます。」

「…!?なんだよ、根に持ってたのか…」

「じゃあ、さつさといつちまえ〜！」

??? ユウトは適当に手を振る。それを見た二匹は少し不穏な
空気を纏いながらDWCへと翼を向かわせた。

「二匹とも目立つなよー！」

「ねえ、ユウト…」

?? ? 二匹が去った途端にトーンを下げて呟くマリ。二匹の翼から発した風が小窓から入り込み、彼女の髪を撫ぜる。

「ねえ、ユウトはさ…」

「ん？」

「花見の時のこと、どう思う？」

?? ? 予感してた質問だった。でも、自分の中でも不明確なまま靄ついていて…何とも言えるものなかった。

「俺は別に…お前らはどう思ったんだよ。」

?? ? ユウトは質問し返す。マリは少しムツとした表情をしたが、仕方ないように答えた。

「私は…ちょっと怖かったかも…」

「……リユドは？」

?? ? ユウトは次にリユドに訊いた。

「僕は……皆見てたでしょ？言わずもがなって感じじゃない？」

?? ? リユドはひきつった笑いを見せた。ユウトは出来事を思い出しながら、次にトミーに訊いた。

「僕も怖かったんだな…」

?? ? 意見一致。そう、初めて”観た”レジェンズの戦いは衝撃そのものだった。

「で…」

「ユウトは…」

「どう思ったのかな？」

「俺は…」

?? ? 日で陰った基地内に一陣、ユウトの背を押す風がいた。

*

「…来たようだな。」

「待ち侘びたぞ、二頭のウィンドラゴン。」

?? ? 一方、シロンとランシーンはDWCの屋上に到着した。フェンスで囲まれていて、水を貯めるタンクが備えてあった。そして、そこには、グリードー、ガリオン、ズオウが重々しく立っている。二頭は翼でホバーを掛けてふわっと着地した。

「まったく、誰にも目立たないように来るのは神経使うぜ…」

「それはどちらかと言うと私の方ですよ。」

?? ? 二頭は睨み合う。そこにいた三頭は呆れるしかなかった。

「おい、シロン、ランシーン！今は喧嘩してる時じゃないんだ…」
「そのビックフットが話があるようだな…」

？？？ それを聞いて、二頭の視線はズオウに集まる。

「お前が話か…ちょっと意外だぜ…」

「今は確かに何でもいから意見を聞いてみたいものですけど…」

？？？ シロンとランシーンはズオウにキャラクターからしてあまり体したことを話すとは思えなかった。すると、その様子に勘付いたのかズオウが口を開いた。

「君たち、僕だから話せないって思ってたない？」

「！！？」

「お前、ホントにズオウか？」

「どうしてそう思うの？」

「だって、その喋り方…」

？？？ ズオウは普段の幼い喋り方をしていなかった。むしろ、大人びたそんな口調だった…。

「おい、グリードー！これって…」

「お前だけに戻ってない『記憶』の影響だ。」

？？？ シロンはその単語を聞いて言葉に詰まった。ランシーン

を一瞥したが、彼はわざと目を逸らしたように見えた。

「俺だけ戻ってないってどういうことだよ……」

「君だけ、断片的にしか過去思い出していないことだよ。」

「？　？　ランシーンを含める四頭の視線がシロンに集中する。」

「何だよ！何なんだ！俺だけ除け者かよ……！」

「？　？　シロンは齒を食いしばり悔しさにも似たものを感じていた。」

「それはこっちの台詞だ！何でお前だけ戻ってない……」

「グリードー……？」

「お前は本当にトルネードらしい性格だ……。気楽で、陽気で、辛いことなんて全部忘れて……」

「……っ！……！」

「？　？　グリードーがそう言った瞬間、シロンはグリードーに殴りかかっていた。グリードーはバランスを崩して、後ろに倒れる。シロンはすかさず、グリードーにのしかかり倒れているグリードーにまた拳を放った。」

「何なんだよ！！俺が一体何なんだっ！！？」

「シロン！やめて下さい！」

?? ? ランシーンはシロンの脇に腕を入れ、羽交い締めにする。
シロンはそれに抵抗するように、グリードの腹の上で暴れた。

「何なんだ！何なんだよ…」

「シロン…これは私たちが教えても無意味なんです。あなた自身が一番よく知っていたことなんです。私たちが教える事で、誤解を招くような事があつては…」

「離せ…」

?? ? ランシーンはシロンを開放する。シロンは項垂れて立ち上がった。グリードも殴られた頬を摩りながら立ち上がり、言葉を続けた。

「俺らもまだ戻ってきた記憶の整理ができてねえ…。混乱してんのはお前だけじゃないんだ。」

「……。」

?? ? シロンはグリードが殴り返して来なかったことに不快感を感じていた。シロンにはその態度が苛つくものに映った。

「なんで……。」

「何も知らないことが皆を傷付ける。だからと言って、俺らは手助けができねえ…。シロン、お前自身が自力で思い出さなきゃいけないんだ…」

?? ? グリードは静かにそう言った。しばらく沈黙が続いた

かと思うと、ズオウが口を開いた。

「あるよ……」

「？」

「もう一つ記憶を思い出させる方法あるよ……」

「？？？ シロンはその瞬間、ズオウの肩を掴んで迫りよった。

「おい、それは一体……」

「あれ、もしかして喧嘩中？」

「？？？ 突如、何者かの声が聴こえた。すると、フェンス越えにそれが下から上がってきた。

「誰だ！？……っておい……」

「エメラルド色の体……！」

「やあ！僕はフォルス！君たちを倒しに来た、ただのシーホースだよ！」

t o b e c o n t i n u e d

Ep・9 ただ君を抱きたくて 〈My memories are still

やばい、何ヶ月振りの更新だコレ…。

しばらくポケダンに熱中してた…とりあえず待たせてすみませんで
した(ーー;))

Ep. 9 - ?

「誰だ！？つておい…！」

「エメラルド色の体…！」

「やあ！僕はフォルス！君たちを倒しに来た、ただのシーホースだよ！」

「？？」？ 突如、そこに現れたのは上半身が馬、下半身が魚のような尾鰭おひれを持っているシーホース。普段は青い身体も今はエメラルド色に輝いてしまっている。

「何者だ！？」

「そんな怖い顔で見ないでよ寂しがり屋のブレイズドラゴンさん。」

「お前、何を…！？」

「まあ、『君たち』というのは大袈裟だね。正確には、そのビツクフツト君かな？」

「？？」？ シーホースのフォルスは挑発的な目でズオウを睨む。ズオウも上目で彼を見た。

「思ったよりいい目をしてるね。もっと、サーガ、サーガと病的にサーガに依存している幼児退行中の可哀想なレジェンズかと思ってたんだけど…そんなことなかったみたいだね。」

「さつさと用件を話してよ。今は、？昔の僕？なんだから、舐めると痛い目遭うよ。」

「？？」？ それを聞いたシーホースはニヤリと笑った。

「そうだね、さっさと始めようか！！！！レインアロー！！！！」

「っ！！！！」

「？？？ 水で作られた夥しい数の矢が空中に現れる。そして、それが一気に彼らに注がれる！！」

「あぶねっ！！」

「？？？ 矢がまるで銃弾のように打たれいく！それは屋上を見事に破壊した。シロンたちはそれを飛んで躲す！」

「「そうそう君たちは邪魔だから飛んでよ。僕はこのズオウ君に用があるんだから。」」

「このやろおっ！」

「？？？ シロンが敵に殴りかかっていこうとしたその時、

「待つて！」

「？？？ ズオウの一声が響く。ズオウは血が上ったシロンを見る。シロンも不服そうな目でそれを見た。

「なんだ！？早くやっちまわねえと……」

「こいつは僕に任せて！」

「何を……」

「？　？　？　シロンはそれを聞いて、すぐ反論しようとしたが、グリードーに後ろから肩を掴まれた。グリードーは紅い目をシロンに向けて、

「やめとけ。」

「なんでだよ？」

「あいつがやるって言うてるんだ。それにどういふもんか見てみてえな…あいつの本気を。」

「はっ！君、なかなかやるね…！」

「僕たちの話の邪魔しないでくれないかな？」

「？　？　？　ズオウは手の平に水の球体が作られて、両手でそれに回転を加えて敵に放った！」

「フロード…！」

「？　？　？　球体が高速で敵に向かっていく！」

「？　？　？　フォルスは余りの速さにそれを避けきれず、顔面に直撃を喰らった！」

「グブツ…！」

??? 急に屋上中に爆音が響いた。その場にいた皆は思わず耳を塞いでしまう。爆音は皆の背後から聞こえたようだ。

「おいっ！？あのタンクが…」

「木っ端微塵…」

??? さっきの爆音の原因はなんと貯水タンクだった。直径4mはあるであろうその上半分が無残に破裂していた。金属片がそこら中に散らばり、水がチョロチョロと流れ出ていた。

「……誰かいるようですね。」

「何だって!？」

??? すぐさまランシンの眼に破裂したタンク内に人影が映った。一同もそこに目をやる。すると、ランシンの言うとおり何者かがユラユラと蠢いていた。

??? すると、フォルスが口角を上げて、いやらしく笑う。

「紹介するよ、僕の部下だ。」

「おい、タンクの中にいるのって…!」

「また翠^{みどり}の眼、ウォルフィーと…」

「ダンディ・クロコダイルさんだよ…」

??? 誰も言葉が出なかった。目の前に居たのはかつての仲間だったからだ。

*

「で…」

「ユウトは…」

「どう思ったのかな？」

「俺は…」

「？　？　ユウトはどう答えるべきか考えた。正直に今の気持ちを吐いてもきつといいのだろうけど、それは一般人には浮いたものに聞こえるかもしれない。」

「ユウト、教えてよ…」

「？　？　マリが返事を急かす。」

「？　？　ユウトは不安そうな彼女の顔を見たら、それを言うのが少し躊躇われた。」

「俺は…別に…」

「……その帽子被ってる、ガキンチョだ。」

「……お前の『やりたい事』なんだろう？じゃあ、好きなようにやればいい。」

「俺は……」

異端かもしれない……でも……

「もっとシロンたちと仲良くなりたい！」

「「「！……！！」」」

「もっとシロンとかランのこと知りたい！それだけじゃなくて、もちろん他の皆なこと！」

「……」

「それに自分たちが……サーガってやつがどうなのか気になるし！今は何も分からないけど……でも知りたいじゃん！」

「……」

?? ? 皆が口をぽかんとして依然として自分に視線を集中させていた。ユウトは続けた。

「ごめん、やっぱ変だよな。あんなことあったのに…」

?? ? ユウトはそのまま床にストンと座り込んだ。自分はレジエンス同士の戦いを目撃していたのにもかかわらず、あの光景には恐怖以外の”何か”を感じていた。だから…

「あははははっ！！」

「…！？」

?? ? すると、マリが急に腹を押さえて笑い始めた！ユウトは訳が分からないといった感じでそれを見ていた。
?? ? 横からリユドが閉じていた口を開いた。

「ごめん、ごめん！実はユウトが来る前にもう話し合ってたんだ。」

「え…ええっ！？」

「もう、よくそんなこと恥ずかしげもなく言えるわね！聞いてるこっちが恥ずかしくなったわ！」

「でも、ユウトの言ってることはちゃんと伝わったんだな。」

?? ? そして、リユドが此方に近付いて座ってるユウトに手を差し出す。

「…！」

「なんかこれからもつと大変になると思うけど、一緒に頑張るよ！」

「お前ら…」

「？　？　ユウトは皆の目を見た。皆、希望に馳せる目をしていてつきりレジエンスを嫌いになっていたのかと思っていた。むしろ興味をそそられた自分だけがおかしいのかと思っていた。でも、それはどうやらとんだ思い過ごしにしかならなかったらしい。

「…おう！頑張ろうぜ！」

「？　？　ユウトはリュドの手をとって立ち上がった。

「じゃあ、早速、お父さんとかに会いに行く？」

「賛成なんだな」

「でも、父さんたち仕事中だよ…」

「おお、そうだ…」

「？　？　ユウトは指をパチンと鳴らす。そして、元気良くこう言った。

「シロンたちのところ行くっぜ！」

*

「なんで…ダンディが…」

??? シロンは愕然として眼をエメラルドのように光らせるダンディをみていた。ダンディはすっと屋上に飛び移る。彼の眼は淀んだ翠に支配されていた。

??? 一方、ガリオンは前のような光景をみて動揺する。

「お主！何をしたあつ！？」

??? フォルスはその様子をみて皮肉めいた笑いを見せて返事をする。

「僕はただ彼をこの地球に住む愚かな人間たちを懲らしめるための戦力の実験をしてるだけだよ。例えば、こんな昔の仲間同士を闘わせたりとかさ…いけ、ダンディ・クロコダイル！！」

「はい、御主人様…」

??? フォルスの命令と共に、ダンディは水の槍を創り出した。そして、それを両手を器用に回してパフォーマンスをした後、先端をズオウに向けて敵意を露わにした。

「仕方ない、僕が相手するよ！」

??? ズオウは威勢良く態勢を整えた。心なしか彼の顔は笑みが浮かんでいるように見えた。

「ダンディ…ダンディ！！目を覚ませ！！」

「無駄です、シロン。あれは強力な催眠の一種！声などでは解けるはずも無い！！」

「何でそんなこと分かるんだよ！？」

?? ? シロンは狼狽してランシーンに怒鳴りつけた。ランシーンは相手をするのが面倒になったのかそれを無視した。彼に理由を教えてもいいが、今の彼にその行為はあまりに意味がない。

「（何故分かるか……調べたからに決まってるじゃないですか！？あまり信じたくない事実です……。）」

「うおおおおお！！！」

?? ? ダンディが脚の筋肉を柔軟に使い、ジャンプして槍を振りかざす。ズオウも身につけていた斧を手にとって、立ち向かう。

「ぐっ！」

?? ? カキンツ！

?? ? 互いの武器が摩擦し合う。火花が微かに散った。ズオウは腕を込める力を強める。ダンディの力が思ったより強いことに焦った。

「結構、強いね……！」

「……。」

?? ? 膠着状態となり、ダンディはバックステップを踏んで距離をおいた。ズオウはこのとき、どうすればいいか考えていた。

「（あいつ結構強い……。それに力があんま出ないや……。）」

?? ? サーガ、つまりマリが近くに居ないため思っ様に戦えない。しかし、ここに彼女を連れてくるのは出来るだけ避けたかっただから…

「まだまだよ！？ウェット？！」

?? ? ズオウは澄んだ水を生み出して自分へと浴びさせる。それは聖水。そして、ズオウの身体から蒼の気迫が漂った。

「これで、威力倍増だ！？フロリム？！」

?? ? ズオウは大きな水球をダンディへと放つ！

「…！」

?? ? ダンディは槍を水球に向かって突き出したかと思うと、後ろへと流した。背後のフェンスに直撃して、大破する。針金が付近に散らばる。

?? ? そして、ズオウは手強い相手に確実に体力を削られていた。

「はぁ…はぁ…」

?? ? その様子を見たフォルスは機嫌良く笑って、

「あははっ！もう終わりかな？ダンディ、やっちゃえ！」

?? ? と、言い放つ！ダンディは槍を更に変形させる…。ラン
シーンはそれを見て呟く。

ロングヌス
「聖槍…」

「何だそれ？」

「私も詳しい事は知りません。ここアメリカで流行っている宗教関連のものですよ。それにそっくりですから。そんなことより、いつでも助けに入れるように準備しておいてください。いくら一匹で大丈夫からと言ってもね…」

「？　？　ランシンの心配を余所に戦いはヒートアップする！
「？　？　ダンディは槍を両手でしっかりと持ち、素早く突く。

「…っ！」

「？　？　ズオウの顔に傷が入る。血が顔を紅く染める。水で作ったからといって、鋭利な部分は本物以上に精巧だ。ズオウが距離を取るために後ろに下がる！その時、

「…っわっ！」

「？　？　思わずバランスを崩す！憔悴からか、それとも疲れからか…。ダンディはそれを見逃さなかった。ダンディは駆ける。

「ふっ！」

「…！」

「？　？　走りながらズオウの胸を蹴る。ズオウは地面に叩きつかれた。ダンディは反作用でそのまま跳び上がり、

「終わりだ…！」

「（やばっ！）」

？？？ 槍をズオウの胸に向かって突き落とす！

「ズオウー！」

「っー！」

「ビッグフット！」

皆が助けに行こうと足を踏み出した時だった。屋上のドアが大きな音を立てて開く。

「ズオウッー！」

？？？ 出て来たのはマリ。彼女はズオウの胸の上に飛び掛かる！フォルスは予想外の出来事に急いで、

「ダ、ダンディ、攻撃をやめろ…！」

？？？ と、ダンディに命令をする。槍はマリの背中に少し触れて止まった。

「あー、もう…これじゃキルビートと一緒にだよ。これだから人間つてのは嫌なんだ。」

？？？ フォルスは大きな溜め息を吐いた。フォルスはその後、大きく嘸く。

「何だ！？」

??? ? すると、ダンディの眼の色が普通に戻る。ダンディの槍は水に戻り、マリとズオウにかかった。普通になったダンディはそのまま力なく後ろに倒れる。

「おっと！」

??? ? シロンがそれに素早く反応し、彼を掬うように受け止めた。

「すっかり、気絶してんなあ……」

??? ? ダンディは目を閉じてすっかり気を失っていた。死んだわけではないから一安心だが、とても疲れた様な顔をしている。シロンは安堵した。一方で、ズオウはマリを抱き上げる。

「マリ！大丈夫！？」

「うん、大丈夫！ありがと……」

??? ? マリも無事のような。シロン達はフォルスに向けて鋭い眼光を放つ。彼は不敵に笑み、

「今日のところは此処で退散かな？君のお仲間も返してあげるよ。あんま強くないしね。」

??? ? と言い、身体に水を纏いながら高速で回転させ始めた。まるで渦潮のようだ。

「じゃあね、皆！また会うのを楽しみにしてるよ！」

「待てっ……！」

「?? ? 手を伸ばした時にはもう遅い。彼は渦潮が消えたかと思うと既にそこに姿は残されてはいなかった。」

「逃げたか…！」

「まだあんな奴らがいるかもしれない…。我ら、四大レジエンスを相手に何を企んでおるのだ？」

「?? ? 敵が去り、辺りに静けさが戻る。すると、ランシーンが溜め息を吐いて。屋上のドアの方を向いて言う。」

「サーガ達、そこで何をしてるんですか？」

「（おい、ばれてんぞっ！）」

「（ランシーンは透視能力でもあるの？）」

「（レジエンスなんだから、きっとあるんだな。）」

「?? ? 屋上のドアからユウト、リウド、トミーの男子三人がでてくる。空中を滞空しているランシーンは呆れたようにして彼らを見て更に問う。」

「いつからいたんですか？」

「マリがヤバそうになった時からかなあ…。」

「戦ってたから危ないなあって思ったから隠れてたんだ。」

「ちよっとお取り込み中だったみたいなんだな。」

「?? ? 子供らしく、穴のある言い訳をする三人。レジエンスの皆は仕方なさそうに彼らの言い訳を受け入れた。」

「で、何か用ですか？」

「ああ…そうだそうだ…」

「？　？　ユウトは用件を思い出し、すると、シロンの方に駆け寄る。そして、シロンの顔を指差す。

「…何だ？」

「シロン、俺はお前を知りたい！」

「？　？　シロンは突拍子もないことを言われて、顔を紅潮させギョツとする。

「何だ、何だ！？どういふことか詳しく…」

「レジエンスのことだ！レジエンスのこと！」

「？　？　すると、今度はリュドが出て来た。

「僕たち自分達なりに話し合った結果なんだけどね、君たちのこともっと知りたいなってことになったんだ。」

「？　？　周りのレジエンス達はそれを聞いてポカンとしている。正直、此处でわざわざ言いに来ることもないし、その理由も分かんなかった。

「？　？　マリがリュドに続けた。

「私たち、貴方たちのサーガじゃない？なら、もっと貴方達のこと知った方が良くないかなって思っ…今だって何かあったん

でしょ？別に私たちは大丈夫だからね！」

「？　？　レジェンズは互いに見合って、不確かな驚きを受けた。何はともあれ、レジェンズを自分達なりに受け入れようという気持ちの表れなのか、彼らにはまだよく分からなかった。その時だ。」

「ふふっ……」

「？　？　すると、ランシーンはクスリと笑う。シロンがそれを訝しく見る。」

「なに、ニヤニヤしてんだ。気持ち悪い……」

「いやいや、彼らはやっぱり良く出来た子供達だ。流石はサーガの胤、宿命の子供達だ。」

「？　？　ランシーンはそれぞれの顔を見て言った。」

「今日は帰りましょう。マリも身体が濡れて、風邪を引いてしまうでしょうし。話はまた今度だ。ビクフット、それでいいですか？」

「僕は構わないよ。それとも、少し後にでも話そうか？」

「その時は、私から訪ねましょう。皆もそれでいいですね？」

「？　？　グリードー、ガリオンもそれに肯いた。シロンは舌打ちをして、仕方なさそうな顔をしながら渋々同意した。」

「もう帰るのか？」

「？　？　ユウトがランシーンに訊く。」

「はい、私は貴方達の意志が聞けて充分ですよ。」

「へへっ、そっか！」

??? ? ユウトは思いっきり笑う。ランシーンもそれにまた微笑んだ。

「ダンディ、どうするんだ？」

「DWCで少し様子見ます。安心して下さい。ハル力達なら分かってくれるでしょう。」

??? ? そして、サーガ達はそれぞれのパートナーに跨り、別れの挨拶をしながらニューヨークの空へと飛んで行った。

「マリ！着替えなきゃね！」

「ホント、ビシヨビシヨ！でも、貯水タンクがあんなだからお風呂入れないかも…」

「うー、僕のせい、ごめんね…」

「いいのよ、ていうか…さっきズオウがズオウじゃなかった気がする…。」

「え、え！気のせい、気のせい…木の妖精…」

「変なズオウ！…まあ、帰ろっか！」

??? ? 僕は守る、彼女を。彼女を傷つける奴なら誰でも僕が倒してみせる。もう、昔のようににはしたくないんだ。

…。

「ズオウ、それは本当ですか…？」

「可能性としては高いと思うよ。ランシーンは何か見つけてなかったの？」

「今まさにその見つけていたものが貴方の意見と頗る一致しました。5000年前の封印されし力が関係している…」

「？　？　そう今の僕はまともだ。大丈夫…」

「そうだね、早く打開策を見つけないとね…」

「…良い未来を導けるはずだ。」

「…。」

「次はこのフォルデイスが行きましょう。」

「流石は王族。しっかりとやってくれよ……」

…多分ね。

t o b e c o n t i n u e d

Ep. 9 - ? (後書き)

四ヶ月ぶり…なんというか書きたくなったので。
長い間お待たせしてすみません…。・・(ノД、)・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5388j/>

レジェンズ Legendz Behind of Chronos

2011年8月11日14時54分発行